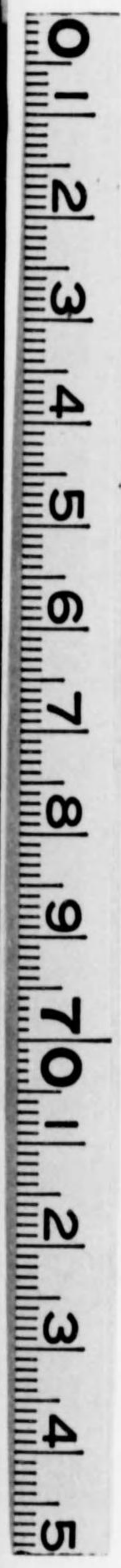
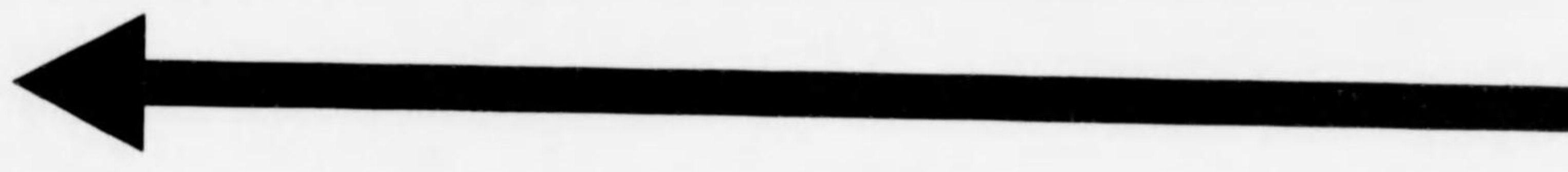




特277
257



始



鹽

原

多

助

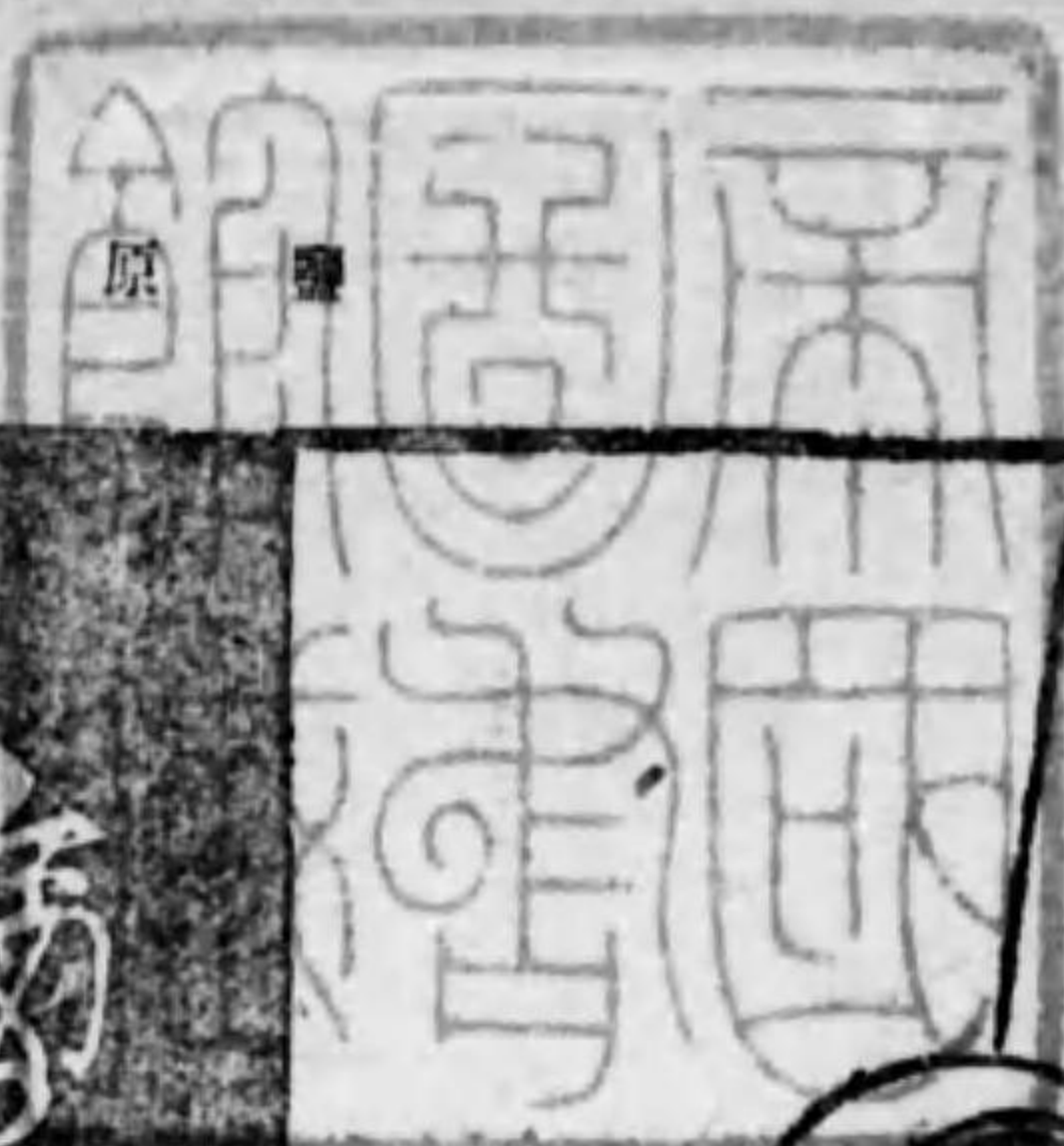
三遊亭圓朝講演



41277

257

助 多 原



鹽系多助

三花堂
用大庄稿

は
か
り
な
い



本編 活動の人々

山口屋善右衛門	豪農角右衛門	鹽原角右衛門	鹽原多助
後妻おお	多助妻お榮	百姓お八	藤野屋娘お花
道連小平	又旅おかく	原丹三郎	原丹治

— 豪農角右衛門危難に逢ふ —

扱て申上まするお話は鹽原多助一代記と申しまして、本所相生町二丁目炭薪商の落
 天保年間頃まで大分繁盛で、地所の二十四ヶ所も持つて居りました故、其の落
 首一本所に過ぎたるものが二つあり津輕大名炭屋鹽原と唄にまで誦はれまして、
 十萬石の御大名様と一緒に喰へられる位になつた、其起源は上州沼田の下新田から、
 僅か六百文の端錢を持って出て参りました身代で、夫れから段々取立まして五代目まで
 繼續しました、其多助の身の行狀の真正のものと孝行なものと、殊に商法の名人で經濟に長
 じて居ることは、立派な學者でも及ばん程で、多助は別に學問もありませんが實に天
 稟て居りますので、今に淺草八軒寺町の萬年山東陽寺といふ寺の墓場に鹽原多助の石

特 277
257

碑があります、其石碑に實父鹽原角右衛門養父も鹽原角右衛門と法名が二つ御座い
 ますが、實父も養父も同姓同名で御座りますから種々と調べて見ますと、上州沼田の
 下新田に未だ縁類も残て居りますから聞糺しますと、實父角右衛門は元と阿部伊豫守
 様の御家來で八百石を領ました者ですが、何云ふ譯か浪人して行衛知れずになりまし
 た、其角右衛門の家に勤めました岸田右内と云ふ御家來があまりして、其者が若氣の
 至りで角右衛門の御新造の妹おかめと密通をして家出をいたし、本郷春木町に裏家住
 居をいたしまして名も岩田屋宇之助と改め旅商ひをして居りますが、實は戀は思案の
 外で御座います右内は忠心の者で御座いますから旅商ひをしながらも旦那様は那邊に
 御出かどうかお目に掛り度と主人の事を片時も忘れた事はありません、不圖沼田に主
 人の居る事を聞てから日光の中禪寺の奥へ三里入ると温泉がありますから商ひながら
 参りました、其の頃は開けませんから湯場も鶴の湯と川原の湯と二ヶ所で旅宿もあり
 ます、其中に吉見屋と云ふ宿に泊りましたが、道伴は境屋傳吉と云ふ岸田屋の宇之助
 と旅商人仲間、兩人は親密で御座いますから兩人はこれから沼田へ山越をしやうと

云ふので道で聞きますと、山道でとんと往來がありませんので極難所ですから案内者がなければいけません、と聞て其夜の中に案内者を頼みまして翌朝になると宇傳吉さん案内者は傳今聞てるんだがモシく宿の旦那御案内者は宜しう御座いますか
主「ハイ、心得ましたが、昨夜はどうも商ひにお出なすつて多分のお茶代を戴て済ません、何卒明年も御心配なくなア傳「イヤ眞の心ばかりで、此の宇之助さんは沼田へ行きたいと云ふ私も煙草を少し仕入に往ふと思ふのだが、大分道が知れにくいそ
うだから昨夜から案内者を御頼み申たのだがありませんかへ主「ハイ、案内者は最
う頼み置きましたお辨當を拵へましたから傳「何卒強壯そなたを頼んでをくんませ
へ主「エ、強壯いのを頼みました、コレ磯之丞く、傳「磯之丞といふのが案内者です
か主「左様で御座います傳「軟弱そなた名で、なまめいた名ですなア主「ナアに頑丈
なもので御座りやす、と云ふ所へ出て来たのは脊は五尺七八寸もあつて脛に毛の生て
居る熊をみたやうな男がノソリと立て案「へい御案内しやせう傳「どうも劇演なら磯
之丞なんと云ふと突き轉ばしがする役だがコリヤ強そなた、而してお前は跣足かへ

案「エ、跣足です脚半も穿かないで一重物に小倉の常をチョツ切り結びにして鐵砲を
擔いでおります傳「モシく腰にある毛の生へた巾着はなんだへ案「これは狐の皮で
拵へたんでがんす傳「カウどうだへ狼は出やし升まいねへ案「狼は出ねへが大蛇や猪
が出まさア、なアに出ても飛道具持て居るから大丈夫で御座りやす、貴所方の荷物
をお出しなせへと、二人の荷物を聯索のやうなもので脊負ひ、其上に鉈を付けて出掛
て往く主「左様なら御機嫌宜ろしく磯之丞氣を注げて上げる傳「左様なら御機嫌宜し
くと、暇乞ひをして西の方へ出掛ましたが花野原を二三町往きますと雫々流れが在て
別に路としてはなく、澤を渡りて歩くと七八町参りますとこれから山手へ掛るに従がひ
熊笹が生へて居て、歩行たびにゴソくとして朝露に袖を濡しまして段々と登る程
と熊笹は脊を越し向ふが見へず傳「オイ、案内さん少し待てくんな狼が出て大蛇
が出て分らねエじやねエかへ案「狼が出て大丈夫でがんす宇「此様な所はどの位
あるへ案「未だ廿町ばかりありやす傳「どうも驚いた熊笹も鮎屋にあると随分粹なも
んだが此様なにあつちやア不意氣なもんだのうと話しをしながら漸く登りすると是

れから金精峠と申て實に難所で樹木は榧松と雁翔檜の大樹ばかりで彼是れ一里半ばかり登りますと西の方は日光の男體山此方は白根山が見へまする 傳「どうだい酷い所だねへ、どうだへなんとか云たッけ磯之丞さん酷い所だねへ、此様な所じやアないと思たがこれぢやア大蛇も出ませうどうだい宇之さん宇「酷い所で御座います私もし程とは思ひません是れから又登るのかへ案「これからアハからこれより一里半ばかり



ア下ります、と云ひながら下りますと溪の流れで

ドウくツと流れる、すが見馴れぬ草で名もります、溪の水で咽喉半ばかりも登りますと兩人は草臥れたから大けて 傳「宇之さん辨當ん辨當を出して下さい 傳「お前は能く馴れてねへ案「私なんざア年から平地は却て歩行きが辨當を開けると大きいのが入れている 傳「何だい大變大きな握飯じやないか、もつと幾個にもしてくれ、ばい、に梅干は眞赤で堅いねへ、ア、酢ばい案内者さんの握飯は大きいねへ案「私ア



山には草に花が咲て居ま知れない草の花が咲てをを濕ほしてそれから一里見上る程の大樹ばかりで樹の根にドツカリ腰を掛を遣ふじやないか案内さん案「ハア随分草臥やすあるから草臥ないやうだ中斯ふ云ふ所を歩行てる悪い、といひながら兩人な握飯が二個と梅干の堅

此奴を半分喰て又明日半分喰ふのだ 傳「苛いねへ茶か何か貰いて ものだねへ 案「茶も何もありやしねへ六里の間家がねへから 宇「それじゃア水を汲んで来てくんねへ 案「水もありやしねへ 宇「それでも先刻流れて居たじやアねエか 案「ハテ山の上から搾れて打落してめへるだから下にはあるが山の上には水はありやしねへ 宇「苛いねへ スッポリ飯を喰ふのだと、小言を云ひながら辨當を遣てサアノ下りませうと、これから二里ばかり下りますと里近く成たと見へて水がドウ／＼と流れて雑木山が在て向ふに薪をこなし居るは此山村の柚と見へて傍の方に山菅で作つた腰袋に谷地草で編んだ山岡頭巾を抛り出して在て、くすぶつた薬罐と茶、二個と辨當が投げ出して在るを見て 傳「宇之さん水の在る處へ來ると茶があらア向、何だか何んだか居るやうだせ、申し少々お願ひ申ますがネ私共は日光から山越をして來ましたが此處に茶か何かあります戴けませうか 柚「ハイぬるく成りましたらうが宜しければお飲みなさい 宇「モシ貴所の御宅は此近所ですかねエー 柚「ハイ是より二里ばかり下で御座います 傳「それじゃア此薪を脊て、下るのですかエ 柚「イ、エ此難所を薪を擔いで下りられ

ません 傳「それじゃア馬の脊で下ろしますのかネ 柚「イヤ馬では猶いけません 傳「それじゃア何しますへ 柚「此谷川へ投り込んで置きますと恰と翌日の晝時分に私共の村に流れて着ます 傳「へーのんきなものですなア、お茶を一つ戴きますよと云て居る所へ、雑木山から出て來たのは此柚の女房と見へて歳頃は二十七八で色白く鼻筋通り、家には稀な女で御座います、細帯に兩裾を端折り亭主の手助けをして居りますものと見へ、兩人とも仲よく働いて居りますを見て 傳「宇之さんかういふ山の中の女だから猶ほ目立ちやすが、斯様なにくすぶつて居るが是れを江戸へ持て往て磨て見ねエ、どんな紙屑買が見たほしても奥様の價格があるせ 宇「へー成程いゝ人柄ですなへーと思はず宇之助が見ると八年跡に別れましたな主人鹽原角右衛門夫婦故「お懐かしいどうして此様な處に御出なさいましたと、驅け寄りて 清「オヤマア右内だよ、旦那岸田右内でお座いますよ 角「オ、右内か懐かしかつたと云はれて右内は涙ぐみ 右「エ、其様なお身形に御成なさいまして此様な山の中にお出なさいますか、お情ない事で御座いますナア 鹽「イヤもう浪人して別に便る所もないから此村に元家來の惣助といふ者がゐ

るから、それを使つて来て少しは山も田地も持て居たが、四ヶ年跡の山出水で押流されてどうも仕方がないから此通り秋は樵をして冬になれば獵人をして漸々暮して居る實に尾羽打枯らした此姿で此所で逢ふとは思はなんだのヲ 右「へい、私が家出をしましたのは八年跡其時は嘸御立服を成さしましたらふナ 鹽其折は悪い奴主人の妹をそののかし家出を致すは不埒者と云て居たが此五六年此方懐かしくて實に逢度存じて居たナ 清」そうして妹のおかめは無事で居るかエ 右「へい、壯健で御座いますお宅を家出しましてから、只今では本郷の春木町に裏家住居をして居ります、外に斯と云事も存じませんから只今では斯遣て旅商ひを致して居りまして、主公にお目に掛つてお託事をして戴きたいと旦暮存じて居りましたが、此様な山の中にお出とは存じません沼田の方に御在ると云ふ事ですから、日光から山越をして参りましたも若しや主公にお目に掛られる事もありませうかと神佛を信じて居りました甲斐が有てお目に掛る事が出来ましたと涙拭へば 角「件もある様子だが今晚は私の家へ泊つては呉れまいか 右「へい、泊つても宜しう御座います商人仲間の伴が有ますから彼男を先へ歸しませ

うと咄してゐると 傳「ヲイ、宇之助さん、オヤ彼の女にへい、お辭誼をして居よ、辨當の餘りでも貰ふ氣じやアねエか、宇之助さんどうしたい 右「私は今少々譯のある人に逢て今晚泊らなければなりませんから、貴君は明日沼田の大竹屋といふ宿屋へお泊りなすつて下さい、殊に寄たら二日位遅くなるかも知れないが 傳「左様かいそれじやア先きへ往テ居るヨ、お前が三日位かゝつても待て居るヨそれじやア磯之丞さん先へ往ふと、これから別れて案内と兩人連立て参ります、此方は三人で女房が薬籠を提げて右内が脇に付きまして、漸々山路を小川村へ二里ばかり下りて横に又四五町入て見ますと、屋根には板の上に石を載せて嵐を防ぎ實に見るかげもない山住ひで中へはいると大きな爐が切てあつて竹自在へくすぶつた薬籠が掛つて居ります、留守居をして居りますのが多助といふ八歳になる角右衛門が一人の子ですが、これが後に鹽原多助と申て天下に名高ひ人に成ります者ですから自然に他の子供とは違ひましておとなしやかに居ります、右内は如何に御運が悪いとて八百石領の御身の上が人も通はぬ山中の斯様な茅屋に住つて御在になるのか御情ないといふ氣の毒そうに上つて來ました 右「誠

に思ひ掛けなくお目に掛りましたなア 清「アノ右内やお前が屋敷を出る前に産れた多助と云ふ件はこれだヨ 右「エ、那の御坊様で御座いますか、御親父様に能く肖ていらつしやいます私は右内で御座いますが貴郎は御存じ御座いますまいなア 多「何だか知んぬいやい 右「どうも丸で田舎語に成てお仕舞遊したなアと涙を拭 右「成程獵師の家のやうで御座いますなア 角「何しろ一杯つけなと是から女房が支度をするのに、前川で捕れた鰯に苦鯛といふ魚に其頃會津邊から回る味淋のやうな眞赤な酒で 清「エ、これは奥州から来る石首と云ふ魚の干物だ一個お喫べな 右「へ、どうも御新造様のお酌で恐れ入りますな、私が家出をしたのは矢張八月朔日、其年の三月の御節句に御客様の歸た跡で御新造様の御酌でお白酒を頂戴した事杯をかめとお樽をして居りました、家出をしたのもかめが懷妊を致しました故で御座います、只今では七歳に成り名をおゑいと申ます 清「ヲ、左様かへお前に肖てもかめに肖ても好子だらうが見る事も出来はいのヲ 右「それでも渠が裏家住居に馴れて誠に常節はよく馴れて居ります、働のな私で御座いますから不自由勝で、へい妙な御酒ですなア 清「お前は喫た事はないだ

らう 右「へい甘いやうな酢ばいやうな變ですなアへーこれが會津から來るので 角「アノ其方の親父右平は屋敷に永年奉公をして呉れて、其伴の其方も屋敷に勤めて居たのだから家來とは云ひながら家來でない、殊には私の妹を女房にして居るから舍弟も同様でのヲ 清「旦那様は故あつて御浪人遊ばしてもお固い御氣性だから二君に仕へすと云ておいでだが、此伴はどうも世に出したいと思て居るが、私の甥に當る戸田様の御家來で野澤源作といふ者で宇都宮の藩中だからそれへ頼まふと思て度々書翰を遣た所が、どうか重役に相談して世話を上げてますから夫れに就てどうか話したいから出て來いと云て返事を寄越したが四年跡の山水で田地から諸道具衣類迄皆流されて失つた故今ではどうする事も出来ず今お金が五十金有は江戸の御屋敷へお住み込みが出来るのだから、此處で妾がお頼みだが、かめと兩人でどのやうにも才覺して送つては呉れまいか 右「へいどうか致しませう 角「馬鹿ア云ふな旅商人の右内に五十金出來やう筈はない 清「それだつて良人これに頼むより外に仕方が御座いません、それに右内は家出をする時内のお金を甘金持て逃げてお行だヨ 右「エ、誠に恐入ます只今では

金子の出来やう筈は御座いませんが來年の三月まで御待ちくださればどうか致しませう 清「來年の三月じや遅いじやないか、是非今年の中にと云ても雪が在て來られまいがどうか今年の中に送つてお呉れ 右「ナにどうか致しませう、なアに子がなければおかめを勤め奉公に賣ても、エこれは御新造様の前でなにどうか致しませう、と口には云ても右内が今の身の上では才覺の出来様道理は御座いませんが、どのやうにも才覺じやうと考へながら其晩は寝まして、翌日出立とするを彼是と引留められました 少し過ぎに漸々振切て出立しますと、此方は親子三人で須賀川の堤まで送て参りまして 右「左様なら御機嫌よろしう、と云ので此方も見送る右内は見返りながら金の出来やう筈はないが神佛の恵でもどうか才覺したいものだと思へながらうか／＼と大原村と云ふ所へ掛りました、所が大きに草臥れましたから茶店に腰を掛けて休んで居ると其處へ入て來たお百姓は年齢四十四五で木綿のほうた布子に羽織を上に着て千草の股引で御納戸色の足袋に草鞋を穿き 客「誠に久しく逢ひません 婆「オヤマア角右衛門さんおあがなんしよ 角「鳥渡來てへと思ふが秋口になると用が多くツて來られねへて

マア老婆も壯健で 婆「誠に此間も貴所の方へ向けて遣たら演劇を見せて呉れると云ふから遣た所が、角さんなればこそ世話アして見せて呉れて娘子を遣たら能く世話アして呉れやした歸つて來てどんな狂言だつたと云ふも何んだかしんねへが辨慶編の衣物を着たお士が出て來て脇差の柄へ徳利を提げて居たが、餘程酒の好なお士で跡から機織女が緒手巻を持って出て來た所があんだかはア知んねへがいきなり其のおさむれいかはア其娘子を脇差で突き通すと女が亂髪打振て眼睛まわしてはつこりゑツたつて云やんすから跡で聞いたら妹春山の狂言だつて 角「ハイ碌に構へませんでハア、家のお爺さんは居やんすかなア 婆「へい居りやんす新田の角さんが來やしたヨ 九「へい貴所無沙汰をしやんした、貴所に見せべと思つて居た青爪で三歳五ヶ月になる馬でいゝ馬だ今見せるから待て下せへ 角「ア、馬かへ 九「マア物を見なせへと、云ひつゝ引出して來たのは實に駿馬とも云ふべき名馬で 角「ヤアいゝ馬でがんすナア 九「貴所此馬は實に珍らしい馬でね一か一つ起して噓一つした事がねへ、どんなに曳て曳まわしても足に血溜り一つ出來る馬じやアねへ見なんせへ 角「マア見べるかと思ひながら、齒を見

たり爪を見たり前足も撫でたり暫く見て居りましたが角「コリヤア買ってへねへ幾許だ
な九」五、五粒たつて角「貴へなア九」貴つて五兩五粒がものはあらア角「左様け
へ己ア今金はあるが千鳥村へ田地の掛引に來たんだから、田地が賣買にならなければ
歸りに直ぐ買って往くから何にしる手附を置いて往から馬を置いて下せへと、懷中から取出
す胴巻は木綿か紬か知れませんがヅル」とこいて落ちた金は七八十兩もありましたよ
うが其中から一兩出して、「サア此處へ置きやすと残りの大金を懷中へ括し附けまし
て、「外へ賣らねへやうに左様なら婆」左様なら歸りにお寄なんしよ先刻から兩人で、
話しをして居るのを岸田が見るとはなしに其處へ落ちたのは大金、ア、有る所には有
り餘るものだ、あの金さへあらば主人を世に出し御恩報しも出来るものを、と思ひま
すと皺の出る程欲くつて堪らないからウカ」と思はず知らず追貝村まで彼の百姓の
跡を尾て來ました百姓はそれと知らず谷合まで掛りますと右「もし旦那へ、」な
んだへ右「へ」先程大原村の茶店で馬を買ってお手附をお出しになる時側に茶を飲んで
居りました私は旅商人で御座います鹽「ハイ右」始めてお目に掛けて恥入りますが私は

元は武士でありましたが商人になりまして岸田屋宇之助と申ます、私の主人が故あつ
て浪人をして此先の小川村に住んで居りまして昨日圖らず逢ました所、五十兩の金が
在れば世に出られるから才覺をして呉れと云はれましたが、私の只今の身の上では逆
も才覺は出來ませんから心配をして居る所へ貴所が手附をお出しに成た時見た金は七
八十兩はあると思ひます誠に押つたお願ひですが屹度御返却 申ますから來年の三
月まで五十金拜借はなりますまいかと、云はれて角右衛門は驚きましてそつと懷中へ
手を入胴巻を押へながら角「ナニ五十兩貸して呉れと己れは數坂越へを幾回もするが
汝れエやうな盜賊が居るから旅人が難澁するのだサア名主へ連れて往くから來い 右」
盜賊なんのと云ふものでは御座いませぬ名前までお明し申程で御座いますから、御得
心下さればこれから主人の所へ參りまして兩人で連印の上拜借します、どうも主人を
世に出さなければ濟ませぬ、神掛けて御損は掛けませんから何卒來年の三月まで御貸
し下さい、印形を捺して證文を入れますからナア申し角「馬鹿野郎五十兩と云ふ大金を
汝がやうな始めて逢た奴に誰が貸す、主人の爲めだの忠義だなんと云やアがつて己が

金へ目を着ける盗賊め、サア名主へ来い往かねへかと拳を固めて右内の横面を打たか
ら顔から火の出るやうだが右「ア痛た〜御尤もで御座いますか明かして願ふのです
から私の身體は主人の爲めなら十や廿打れましても厭ひません、主人は立派な侍で彼
様所へ置く人ではありません、江戸表へ参りさへすれば百石領り位になるのは造作も
御座いませぬ、主人さへ世に出ればお金の融通も出来ますから最と早く御返却致しま
す、何卒貸しておくんない、角「黙れ汝へ已れに打たれるか右「へいお打ちなさい
角「サア此所へ来いと髭を取て引寄せて甘ばかり續けて打ちましたから實に頭の割れ
る程痛い耐へて右「それで貴所御承知なら主人の所へどうか御一所に御出下さい
角「馬鹿野郎未だ金を借りたいと云ふか名主へ連れて往のは面倒だから打のめしたんだ
往けつたら往かねへかと云ひながら力に任せて右内の胸をけて横面をポーンと打たか
ら其處へ倒れました、日此柔和な右内だが餘りの事と思はず道中差へ手を掛けて角右
衛門を睨む、「汝ア脇差見たやうなものをさして居て己を切る氣か右「ナニ切る氣は
御座いませぬが打たれ〜ば金を貸して遣ると仰しやつたから打せたのに打た上に土足

に掛けて金も貸さず、私も武士の祿を食んだもの見ず知らずの土民に足下に掛けられ
ましては捨ておかれませんかどうあつても貸されませんかと威して取らうと思ひまして
ピカリと引抜く刀の光りに百姓だから驚きまして、トツ〜と逃出したから右内は跡
を追ひ驅けて往きますと彼の百姓や運悪く木の根へ躓いて倒れる處へ、宇内得たりと
上に乘し掛りて百姓の頬へ抜刀を差附けて右「サア貸してお呉んなさい、お前さんは
人を土足に掛るとは餘ではありませんか、サア貸して下さいどうあつても貸して呉れ
なければ據なく、お前さんを殺さなければなりません、サア貸して下さい〜サア
貸さなければ殺しますよお前さんは五兩五粒の馬を買ふやうな立派な人ではありません
んか、貸して下さい貸せないかい〜と責めつけられても百姓は生命より金の方が欲
しいと見へて盗賊〜と云ふ聲が訝に響きますが誰あつて助ける者はありません、此
處は追貝村の入口で西の方は穂尊山東は荒山北の方は火打山で南の方は赤城山又山
の數坂峠大樹は生茂て居まして大泉小泉と云ふ堀割の岩間に浮島の観音といふのが在
て、赤松が四五本川邊へ枝を垂れ其處に塚が在て翁の詠んだ「夏來ても皆一つ葉の一

つかなしといふ碑があります此の大泉小泉の堀割から片品川と云ふ利根の水の上へドツくと岩へあたつておとします、水に移るは夕日影さしてひらめく劔刃の光り、右内は心がせきまますからサアサアと責めつけられ、下では只人殺くと云て居る此時向ふ山を通りかゝりましたのは鹽原角右衛門で、先刻右内に別れてより家に歸つて只うつくと致ておりましたが、お獵にでもいらした方が宜しう御座いませうと、女房の勸めに鐵砲を擔いで山狩りに出しましたが、小鹿を見失つて歸る折から向の岸で盜賊くと云ふ聲がするが雜木山の林で生茂つて下は薄闇く確とは見へませんが旅人が山賊に出逢たに違ひないから助けてやりたいと、片膝立て有合す鐵砲に玉込めいたし引き金へ手を掛けて現在自分の家來なる忠臣岸田右内と知りませんから、胸元へ狙ひをつけましたが是から如何相成りますか御會に申上ります。

(一一)

多助角右衛門の養子となる

引續きまする鹽原多助一代記は多助が八歳の時のお話じで御座ります、彼の岸田右内

は忠義の爲めとは云ひながら心得違ひに見ず知らずの百姓が五十兩懐中致して居りますを知つて無心を云ひかけますと、彼の百姓は驚きまして争ひと成り右内は百姓の轉びし上へ乗ツかゝりお主の爲めには換へられぬと嚇して五十金を奪はふとする、下では百姓が人殺しくと云て居りますが往來は稀れに山村で名におふ上野國東口の追貝村、頃は寛延元年八月の二日山曇りと云ふので今まで晴天で居たのが暗くなつて霧が顔へ掛りました、暗さは暗し向ふ山では鹽原角右衛門が山賊を打とめ、旅人を助けんと家來と知らず鐵砲の狙いを定めてガチリツと引金を引いた拍子に轟然と鎗へ響いて無慘や右内は乳の上を打抜かれて、一度びは恐れしましたが一方へ刀劍一方へ草を掴んで立上り足を爪立て身を慄せウーンと云ひながら、ガラくと血を吐き出しますと其血が百姓の顔へ掛りますから、百姓は自分が打れた心地がして人殺しくと慄へながら云つて居る、所へ鹽原角右衛門が獨木橋を渡つてトツくと驅けて來ました「コレサ御旅人お怪我はありませんか角」ハイ怪我アしたかもしんねエ眞赤ナ血が出やした鹽原それは私が今上の賊を打留めたに依て其血が貴君に掛つたのだらう夫れ

とも少しは切られましたかナ角「へー道理で痛くも何んともなかつた、助かつたかな難有御座へやすと、血塗に成る百姓が仰向て見ますと鴨鹿の膏無しに山猫の皮を前掛にしまして八千草の笠を背負ひ八百目の鐵砲を提げて鹽「マアお怪我が無くツて宜つたなア角」獵夫さんで御座へやすか、既に此奴に殺される所を助かりやした私の懐中に金のあるのを知て跡を尾て来て取らうとするから名主へ連れて行くべと思つて居た所が既に殺される所でがんした鹽「イヤ悪い奴で御座いますと云ひながら賊を見ると右内だから喫驚して鹽「右内ヤア」心得違ひをしたナ右内ヤア」と呼ぶ聲が忠義の心に通じましたか、右内は漸々細き目を開て見れば目の前に主人の顔、右「旦那様旦那様と云ひながら鹽原の手に縫り付く鹽「何故心得違ひをした汝も元は侍ではないか如何に落ぶれ果て食ふや食はずの身と成るともナア何故其様な卑劣量見に成てくれた渴しても盗泉の水を飲まず位の事は心得て居るではないか、何いふ譯で人の物を奪る氣に成た、手前とは知らずナ此角右衛門が旅人を助けやうとして打留めたのであるぞ——コレ許してくれエ」といふに、右内はハッ」と息を吐てものが云ひ度が外へ

出る息ばかりで漸く微な聲を出しまして右「旦那様八年ぶりで主公にお目に掛りました所、彼の通り見る影もないお身の上御新造様からも五十金才覺して呉れと家來の私へ手をついてのお頼み、此の旅人が金を所持して居りますのを見て主公を世にお出し申度ばかりで、心得違ひを致しました、主公のお手に掛て死ぬのは本望で御座います、永らく御奉公を致して御恩を戴いた御主人の妹を連れ出して逃げるやうな心得違ひを致しました右内ゆゑ天罰主罰報ひ來たつて只今此所で旦那様のお手に掛て死ぬのはあたりまで御座いますが、江戸表に残た女房おかめと未だ年のいかない娘が此事を聞きましたら嘸歎きませうが決して盗賊をして殺されたのではない、旦那様を江戸表へお連れ申度と思ふ心得で斯様な事を致しましたと云ふ事を旦那様から仰聞られて下されませ、ア、最う目が見えん此世のお別れと云ひながらバタリと倒れましたから鹽原も思はず聲が生まれて鹽「ア、不便な事をした家内が聞たら嘸歎くであろう、許して呉れと歎くのを百姓が聞て居てホロリ」と泣き出しました角「とんだ事になりましたア、金を貸せば宜かつた、道理で主人の爲めに金が入るだ主人も私も印形を捺て證文

を張るからつて名前さえ明かしたかよもや虚言だと思ふから貸さなかつたツケ 鹽「ハ
 イ全く私共の家來で御座いまして手前を世に出し度ばかりで此の様な事を致しました
 何卒御勘辨を願ひます 角「御勘辨所じやない鐵砲を打たなけりやア乃公が殺される所
 だ、何んとそう云ふ良家來を鐵砲で打たら嘸悲しかんべエ 鹽「貴君も不便と思召なら
 ば此遺體は拙者一人では持まいる事は出来ませんが、此處に細紐が在りますからこれ
 で括げて吊りまして鐵砲でさし荷ひ、一方擔いでは呉ませんか 角「ハア擔ぎますゝゑ
 と泣くく擔いで小川手前まで歸て來ました、家ではお清は角右衛門の歸りが遅ひか
 ら案じて居ります所へ 鹽「今歸つたヨ 清「お親父様がお歸りだよオヤ、良人お一人
 でいけないからお手傳ひが入りましたか猪でも打ちましたか「イヤ、飛んだ物を打ち
 ました、お前が聞たら嘸驚くだろう話しをするからマア貴君此方へお上りと、百姓を
 上へあげこれくの譯だと話しをして「おせい、間違ひとは云ひながら今朝別れた右
 内を鐵砲を打うとは思はなかつた 清「何處に居りますと云ふから箆笠を反除けまする
 と情けない死狀 清「ア、今朝お前に別れる時金さへあれば旦那様が元の武士になられ

ると無理な事を頼んだから、私共兩人を世に出し度ばかりで非業な死をさせたのも妾
 が酷く頼んだから心得違ひしたのでらう、良人何して人と獸と見違へました：「イ
 、エ獸と間違へて打たたのではありません、此の方に係た山賊と心得て打たの泣く所
 じやないお詫ひ言を申せ 清「ハイ、悲しいのに取紛れ御挨拶も申ません、これは家
 來とは申ながら私共の妹を女房にして居りますから家來と申ても弟と同じ事、跡には
 七歳になる子もありまして不便なもので御座います、何卒忠義ゆへと思召まして御勘
 辨なされて下さいまし 角「私も斯いふ事になるなら話し合ひにしたものを、打擲る
 べゑと思つたら此様な事に成て仕舞て誠に氣の毒だ 多「お親父様なんで叔父さんを鐵
 砲で打たかなア、江戸に居る叔母さんだのおゑいと云ふ從妹が聞たらどんなに怨むか
 知れねへから若し叔母様が來たら多助が間違て打たと云ふから家尊は殺さねへふりを
 するが宜ヨ 鹽「ア、宜い、小兒にまで苦勞を掛けて濟まない 角「誠に年はいかねへ
 がへエ八歳位なもんで、へエ實のなる木は花から違ふつて貴君御侍士で御せへやすナ
 鹽「取紛れまして未だ名前も申上ませせん手前は鹽原角右衛門と申ます浪士で 角「イヤ

「私(わし)が鹽原角右衛門と言ふ百姓(ひやくしやう)サ、へー私(わたくし)が…」角(かく)「貴君(あなた)何時(いつ)から鹽原角右衛門と云(い)や
す鹽(しほ)何時(いつ)からと云(い)て先祖(せんぞ)から角(かく)「乃公(なまへ)が名前(なまへ)も先祖(せんぞ)から鹽(しほ)手前(てまへ)の先祖(せんぞ)は下野(しもつけ)の國(くに)
鹽谷郡鹽原村(しほやたに)の郷士(ごうし)鹽原鹽衛門(しほはらしほゑもん)と云(い)ふ事(こと)が書類(しよるい)に残(のこ)つて居(ゐ)りますが、精(こ)しくも調(しら)べて
は見(み)ません角(かく)「私(わし)が先祖(せんぞ)は野州鹽谷郡鹽原村(のしゅうしほやたに)で沼田(ぬまた)へ來(き)て鐵(てつ)一ツ(いつ)から今(いま)では田地(でんち)や山(やま)
も持(も)つて居(ゐ)りやすが、それ(それ)じやア貴君(あなた)も元(もと)を洗(あら)へば同(おな)じ血統(ちゆうてい)で鹽(しほ)「妙(めう)な縁(えん)ですなア角(かく)縁(えん)
は縁(えん)だが此(こ)様な事(こと)に成(な)つては惡縁(あくえん)だねへ、サア此(こ)所に金(かね)が五十兩(ごじうりやう)あるからこれ(これ)で身形(みなり)を
整(と)へて立派(りっぱ)な御侍(ごさむらい)士(し)に成(な)つて下(くだ)せへ鹽(しほ)「何(なに)う致(いた)しまして見(み)ず知(し)らずの貴君(あなた)に頂戴(てうたい)する事(こと)
は出(で)來(き)ませせん角(かく)「ダツテ元(もと)を洗(あら)へば全(おな)じ血統(ちゆうてい)じやないか鹽(しほ)「左様(さやう)では御(ご)ざいますが大(だい)
金(かね)を戰(いく)譯(わけ)はありませせん角(かく)「戴(たい)かねへツて云(い)ふが貴君(あなた)が鐵砲(てつぱう)を打(ぶ)たなければ己(おの)ア命(いのち)を
取(と)られて金(かね)も取(と)られてしもうのだ、それを助(たす)かつたのだから貫(ぬ)つて下(くだ)せへ貴君(あなた)此(こ)金(かね)で
江戸(えど)へ歸(かへ)らねへと此(こ)の右内(うない)どのが犬死(いぬじ)になりやすが、命(いのち)を捨(すて)ても主人(しゆじん)を助(たす)けてへと云(い)ふ
のだから此(こ)事(こと)が世間(せけん)へ知(し)れせへしなけりやアいゝのだ、貫(ぬ)つて早く御屋敷(ごやしき)へ歸(かへ)つて下(くだ)せへ
鹽(しほ)「イエ、家來(からい)が惡(わる)い事(こと)を致(いた)したのだから手討(てうち)ちにしても宜(よろ)しいので角(かく)「それ(それ)では

五十兩(ごじうりやう)で貴君(あなた)の大事(だいじ)な物(もの)を買(か)つて往(い)きやすべえ鹽(しほ)「ハイ左様(さやう)でせうが四年(よんねん)前の山水(やまみづ)で大(だい)
事(じ)なもの皆流(みななが)されて仕舞(しま)つて何(なに)もありませせん角(かく)「こりやア貴君(あなた)の伴(せがれ)でせうこれを私(わし)に
下(くだ)さい鹽(しほ)「何(なに)う致(いた)しましてこれ(これ)は一人(ひとり)の伴(せがれ)ですからいけません角(かく)「お前方(まへかた)は年(とし)が若(わか)けへ
から未(ま)だいくらも子(こ)が出來(き)るヨ、己(おの)ア四十二(よんじふに)歳(さい)になるが未(ま)だ子(こ)がねへから此(こ)様な子(こ)を
貫(ぬ)つて往(い)はこんな難有(むづかしい)事(こと)はねへ清(きよ)「これはどう致(いた)しても上(あ)げられませせん魚(うい)「鹽原(しほはら)の子(こ)を鹽原(しほはら)
貫(ぬ)ふのだから宜(い)じやないか鹽(しほ)「上(あ)げられませせん清(きよ)「とんだ事(こと)を仰(おほ)しやいます、家來(からい)に
無(む)心(しん)を申(ま)したのも此(こ)伴(せがれ)を世(よ)に出(だ)したいからで御座(ござ)います、どう致(いた)しまして出來(き)ませせん、
角(かく)「よく考(かんが)へて御覽(ごらん)なせへ、貴君(あなた)が江戸(えど)へ往(い)つて此(こ)家來(からい)を此(こ)地(ち)へ埋(う)めて、江戸(えど)から此(こ)數(かず)
坂峠(さかとうげ)を越(こ)して追善供養(つひぜんぐやう)をしに來(き)る事(こと)は出來(き)やアしねへ、私(わし)が此(こ)子(こ)を貫(ぬ)つて往(い)けば私(わし)は沼
田(ぬまた)の下新田(しもしんでん)此(こ)所(ところ)までは半日(はんじつ)で來(き)られるから、蓼蓼(れうれう)をさせて追善供養(つひぜんぐやう)もしようじや無(な)か
私(わし)は三百石(さんひやくしやく)も田(でん)畑(はたけ)があり山(やま)もあり不自由(ふじゆう)はさせねへから殊(こと)には此(こ)子(こ)の爲(ため)には叔父(おぢ)さ
んに當(あた)ると云(い)ふだから子(こ)のねへ昔日(むかし)と諦(あきら)めて下(くだ)せへ鹽(しほ)「成程(なるほど)面白い事(こと)を云(い)ふ親切(しんせつ)な方(かた)
だ、宜(よろ)しい上(あ)げませう清(きよ)「何(なに)を仰(おほ)します多助(たすけ)を遣(や)つて良人(よしみ)どうなさいませう鹽(しほ)「宜(い)しい

黙止て居ろ、コレ／＼多助此處へ来いと云ふと多助はハイと云つて愛らしい紅葉のやうな手をついて其處へ座はる鹽「コレ／＼手前は私の眞實の子ではない、此沼田の百姓の子だが乳がないので薬の上から預つて養育て呉れとの御頼みゆる八歳まで育てたから最う下新田とやらへ歸つて角右衛門様御兩親に孝行を盡せ、而して此の死んだ叔父さんの追善供養をしろ、よいか解つたか其お前を育てた禮として五十兩を下すつた、此金子で私が身形を整へて江戸の屋敷へ歸るからよう／＼解たか多「アイ何時でも母上さんが私を抱て寝て居て嚴父さんが金があれば江戸の御屋敷へ歸へれると云ふから、ア、金が欲しいと思つても仕様がねへから豚兒が今に成長なれば稼いで上げべえと思つて居たが、それじやアいやだけれど此の下新田の叔母さんの子の積りで往やすべゑ角「ア、何んでも知てるからいけねへどうか聞きわけて呉れヨ清「能く聞きわけてて呉れた、お前お母さんが毎晩愚痴を云たのを能く聞きわけてお呉れた、お前も悪戯や何かすると不孝になりますヨ、妾共はないものとお思ひヨ角「難有な、それではお壯建で又此地の田舎の親父さんの家の方へ来ても逢ふ事がありやすべえ鹽「イヤ屋敷

奉公をすると便が出來ん、殊にお前の爲めにならんからコリヤ多助此の親は假の親と心得て沼田の尊父さんに孝行をしろ多「ハイ／＼孝行をしますから早くお屋敷へお歸り成さいますし、と云はれてお清は堪えかねて泣きながら清「寝ますと踏脱ぎますから氣を注げて下さるやうに、どうか御目にかゝりませぬが御家内様に宜しく御面倒を願ひます角「なアに心配するには及びやせん、これから祝ひに酒肴で親類固めに佛の通夜と酒宴をして、翌月三日の朝村の倉田平四郎といふ名主へ届けをして、百姓角右衛門が多助を十文字に背負まして夫婦は須賀川まで送つて來まして夫婦はどうか、道をお厭ひなすつて角「へー道は氣を注げるから大丈夫ですが、どうか屋敷へ歸て御奉公をなされたら便を聞せて下さいヨ鹽「御無音勝で御座いますから何分願ひます多「父上さん母上さん壯健で屋敷へお歸んなせへヨ、と後ろ身に成て此方を伸び上げて見る、鹽原夫婦も見送り／＼泣く／＼歸り掛りますと、向ふからワイ／＼といふ聲で大勢驅けて來る、其先へ眞しぐらに馳けて來たのは青馬で荒れて荒れてトツ／＼と來ます、此道は左右が谷川で一騎打で何處へ往く事も出來ません、ア、此子に怪我をさせては

濟まないとい氣をもんで居ると、見るより浪人鹽原角右衛門が馬の前に仁王立に成つて馬の轡を押へて百姓に渡すと、幸い此馬は角右衛門が買はふと云た馬だから直ぐに馬を受取て多助を馬に乗せて沼田の下新田へ参ります、浪人鹽原は角右衛門から惠まれた金で支度を整へ名主の所へ別れを告げに参りますと、名主も名残りが惜いからお立ち祝いをしたいと云ふので村で鹽原に劍術を教へて貰つた者もありますから、九月三日まで留められました、これが鹽原多助の生育で御座います扱お話替つて江戸表に居りますお龜は娘お忍いが毎日お親父様は未だ歸りませんかと云はれるので、おかめも案じて居りますと、堺屋傳吉は歸つて來まして右之助さんは上州の小川村で知人に逢て別れて私は沼田の大竹屋に待て居たが來ないので、何時までも待て居られないから歸つて來たが、未だ宇之さんは歸らないかと云はれたので、種々心配して神圖を取たり賣卜者に見て貰ひ杯したか分らない、殊に借財方から責められて逆も身代が持切れませんから身代を仕舞まして七歳になるお忍いを十文字に背負まして心當りを尋ねやうと出立しましたは九月の三日、唯上州小川右と聞たばかりで女の獨り旅で御座りま

すから馬士や助雲杯の人の悪い奴に挑かはれ心細くも漸々の事で中仙道の大宮宿泊り翌四日は鴻巣の田本が中食です、例の旅費が乏しいから勿論駕籠なんぞを纏ふ事は出來ず馬を雇ふ位ですが夫れも十分には往きません、漸々田本で中食を誂へて居ると偶に居る客は年齢四十二になる女で衣裳は小辨慶の衣物に細かい縞の半纏を着て居る商人體のお神さん、今一人は息子が供か年齢は廿二になる商人體の人品のいゝ男で紺縞の脚半甲掛も旅馴れた様子で頻りに中食をしておりますと男「母上さんいゝ子供で御座いますねへ、女「ア、いゝ子だねへモシエお神さん貴婦のお娘子で御座いますか龜「ハイ左様で御座います女「幾歳になりますエ龜「ハイ七歳で御座います女「貴婦は何處へお出です龜「私は上州小川村まで参りますのですが小川村といふと何處へ出ましたら宜うございませう男「小川村と云ふのは上州も東口とやら山國と聞きましたが大層遠方へお出でございませうねへ女「お前さんは江戸辭のやうですが何の御用で小川村へお出になります龜「ハイ妾の匹偶が小川村に居まして夫へ參ますが誠に旅馳ませんから困ります女「左様ですか私共は前橋に參りますが元は中橋で生まれて江戸生で御

座いますから前橋でさへ寂くつていけませんに、そんな山の中へお出に成るはお一人
 で嘸マア御心細いでせう、嬢さん此處へお出で人見知りをしてない子ですから叔母アさ
 んと顔を横にして云ふから女「サア此お肴をお喫り龜「あれさいけないヨ何人様の所
 へでも構はずあがつて困ります女「妾は子煩悩ですが子と云のは此忤許りで、女の子
 はどうも可愛らしくつて、サア之をお喫と彼是言ふ内に直に馴染まして取附たり引附
 たりするからどうせ熊谷へ泊る積で松坂屋と言のが宜う御座いますから其家へ泊りま
 せう、貴婦はお草臥でせうから私が背負て上げませうと言ふので、お龜も一人旅で連
 れが出来たから心嬉しく思っておりますと、最う悉皆そのお神さんに馴染んでお神さん
 と一所に寝なげれば聞かない、今夜は妾が抱て寝ますよと言ふので神さんが抱て寝て
 翌日出立しました、前には熊谷より前橋へ出ますには本庄宿の手前に御堂坂と申所よ
 り繪木戸村から八丁川岸それより五料と申所に日光一の關所が御座います、當今馬車
 道に成りましたが其頃は女は手形がなければ通られぬとて久下村より中瀬に出て渡し
 を越て漸々堺と云ふ所まで來ますと、七つ下りになりまして足が勞れて歩行かれませ

ん女「何うしやう伊勢崎まで往やうかね 男「母上さん此邊にはいゝ宿屋がないから伊
 勢崎の錢屋へ泊りませう女「さうしやう而してお神さんも勞れて居るから駕籠を、ア
 レサどうせ私共が乗るんですから宜しう御座いますと言て居る中に男が暫く經て馬を
 一疋駕籠を一挺頼んで來ました 男「母上さん駕籠は一挺ほかありませんからお神さん
 は馬に乗り附けますまいからお神さんを駕籠に乗て母上さんは馬でお出なさい 女「そ
 れじやアさうしやうお前はお母さんとお駕籠へお乗りヨ 子「イ、エ私しや叔母さんと
 一所でなくツちやいや龜「あれマア聞きわけのない事ばかり 女「それでは仕方がない
 から少しの間氣味が悪くも乗つて御覽なさいな、馬には乗つて見ろ人には添て見ると
 言ふことがありますから龜「ハイ、乗つて見ませうとこわく、乗りますと乗り付け
 ませんで、ことに道中馬は危ないから油汗が出て確かりつかまつて居る、シャン、
 くと馬方が曳き出す、これから百々村へ出まして與久村から保泉村へ掛ますと駕籠
 より馬の方が餘程後れましたから、心は焦けど馬は緩く跡より來る男は遅く姿は見へ
 ません、其うち雜木山がありまして左右から生茂りて薄暗い所へ往きますと馬士が立

留つて馬貴婦此處から下りて下さい龜此處から下りちやアしやうがないヨ伊勢崎の錢屋まで往のじやないか馬私は與久村の者だから駄賃より出越して来たんだから此所で下りて下せへ龜妾は始めて困るから跡から兄さんの来るまで待てお呉んなさい馬いけねへから下りてお呉んなせいと、言ひながら無理にお龜の腰を押へて引きづり下して仕舞ひました、お龜は道中馴れないから龜何をするんだと云ても仕舞ひがない、其中村方はシャンノと馬を曳て往て仕舞ひましたから龜誠に道中の馬士と云ふものは悪いものだ、ア、彼の兄さんはどうしたらうと恟々して居ると雜木山から草を踏んで来る惡漢が物をも云はず掴まへるから、アレーと云ふ中に一人が足を縛へ一人が手を縛へ擔いで行きます、所へ通り掛りましたのは沼田下新田の角右衛門で不崎から歸り道暗さは暗し分らないから惡漢に突き當るとおかめを擔いだなり仕舞ひした角右衛門は見ると女を擔いで居るから此奴は盜賊だなと突然拳骨を打ますと、百性で力があるから痛いの痛くないの惡漢は驚いて逃げ出しました角お神さんく、我はありませんか龜ハイ誠に難有御座います女一人で御座いますからどうも苛い目

に逢ふ所をお陰様で助かりました角全體貴婦は何處へお出になるんで女伊勢崎の錢屋へ参ります角私も錢屋へ往くんだから一所に往うお前さんお一人かへ女先へ娘が参て居ます角何しろ一所に往きなさいと、これから伊勢崎へ来て錢屋へ往くと左様な娘さんを連れて来たお客はありませんと云ふから萬一宿屋の名前でも違ひはしなひかと外の宿屋を捜しても知れないから角右衛門はコリヤア此のお神さんは惡漢の爲めに娘を略取されはしないかと思しゆえ角お神さん娘子さんは縹緞は宜かへ、フウン親だから能く見へるだらうが七歳とはいひながら略取と云ふものがあるから見ず知らずの子を可愛がるのは了簡が在て略取したのではねへかと思つてサ女ハイ妾の良人が歸ませんから尋に参りますので御座ますが、假令夫に廻り逢ひましても一人の娘を略取されましてはどうも良人に濟ません、何處の御方かは存ませんが娘を取返す事は出来ずまいか角取戻す事も何も出来ねへがお前さんは何處の者だい女妾は江戸の本郷春木町に居ります旅商人の岸田右之助と申もの、女房で御座います角エ、それじやアお前は鹽原角右衛門と云ふお士の妹で其家來の岸田右内さんのお神さん

でおかめさんと言やんすかへ女『どうして御存じですぬ角』どうしてッて最う魂消た實に不思儀な縁サ、併しア、氣の毒な事だが貴婦の尊兄角右衛門様と云ふ人は小川村に浪人して居るだがと云はれて驚き女『貴君どうして、それを御存じで御座います』角『兄さんにも御亭主にも私が逢せてやるが未だ兄さんは支度も出来ぬから逢はして上げやすべえ、心配しねへがやうおんすと、云ひましたけれども沼田の角右衛門は夫れでは良人が非業に死だ事も知らず、子供を連れて来る道で娘を略取されるとは氣の毒な事と、おかめを不便に思ひましてこれから娘を略取された事を其地の名主にかゝり八州様に願て手配してもらひおかめは計らず下新田の角右衛門の世話になりますと言ふお話しは次回に申上ります。

(三)

右内の妻お龜娘を誘引さる

沼田下新田の百性角右衛門は私用がありまして木崎まで參て歸りかけ保泉村と云ふ所で計らず岸田右内の妻おかめの災難を助け信切に世話をして身の上話しを聞くとこれ

くといふからア、不便なものだ、小川村で非業な死を遂げた岸田宇内の妻が殊には夫を尋ねて来る途で娘迄略取されたか如何にも氣の毒な事と心得ましたから、直ぐに伊勢崎の名主へ掛り八州へ願て其悪漢をいろく〱と捜しました所が三日程経まして纏られて參りました、兇漢三人は百々村の倉八と太田の金山の松五郎今一人は江田村の源藏で段々お調べになると、其者其の申口に旅稼ぎの親子連の者に金を三兩宛もらつて頼まれたので何と申すか其者の名は知れませんが云ふのでいろく〱お調べに成たが親子連れの旅人は更に行衛が分りませぬゆへ三人の悪漢は江戸表へ送られました、おかめと角右衛門は日數が長く掛りまして伊勢崎に長くも居られませんか、角右衛門が私に沼田の下新田の者でお前の兄さんにも逢してやるから私の家へ來なさいと云ふので、一所に下新田へ連れ歸りましたが五日程掛りましたから下新田の角右衛門の宅では餘り主人の威りが遅いゆへ案じくらしして居ります所へ角『今歸つた妻』オヤ良人マア此んなに遅くなる譯はねえが何處へ往きやんした角『少し譯へあつて飛んでもねへ間違が出来て此方の災難見たやうな譯で、ハア大きに日數も掛たから案じて居べエ

と思つて居たが手紙も出さねへでハアどうも妻「さうでさすか多助も父様が歸らねへつて心配して五八も案じて居るし村でも心配して見舞に來やすから、何にも追刺に逢ふ筈はねへが久しぶりで往たんだから木崎の親類で留められて居るんだんべーつて云て居やんした、五八我へ其所を片付て盥をあげろ戸口に立て居りやんすのは誰だと思ますと年齢は廿四五で綴綴はよし愛嬌のある婦人で御座いますから妻「貴女此處へお掛けなせへお連れじやありませんとエ角「ア、これはな、伊勢崎で合宿に成お神さんヨ妻「はア—かめ「誠に不思議な御縁で此度は此方の旦那様に助けられましたて行き所もない身の上で可哀そうだと仰つてお連れ下さいましたもので御座います、どうか行末長くお目を掛けられまして下さいまし、女房はハイと云たが見馴ぬ女殊に姿と言ひ言詞遣ひと言ひ近所の者でないから妻「旦那さん何處から此方を連れて來やんした「己れが保泉村を通りかけて此神さんの難儀を助けてから餘義なく此神さんの事に掛つて泊つて居るやうな譯で五日錢屋へ逗留して居たのヨ妻「へ—此神さんと一所に錢屋へ逗留して居てへ—さうとも知らねへで家じやア案じて居たのに淺屋へ泊つて此様な美

麗い神さんと五日も逗留して娛んで居たんでがんすか良人マア幾歳になつたか角「馬鹿ア言へ此神さんに災難があつて、伊勢崎の名主へ掛つて、八州様へ頼んで居たのだ妻「八州様へ頼んだかお女郎屋へ頼んだか知んねへが五日錢屋へ泊つて居れば知れたもんだハア、だめな家じやア案じて居るものをそりよう家を五日も明けてよくのめめと歸られた義理だかア角「那云ふ事をいふ——お神さん心配しねへが、仕様のねへ婆だ四十面をさげて飛んだ事をいやアがつて、貴女心配しねへがようがんと云て少しも譯をおかめにも云わす、又女房にも云はないからおかめは居苦う御座います、四五日経つ中雪が降りまして道が絶へて仕舞ひましたから角右衛門はおかめを小川村へ連れて往て鹽原角右衛門に逢せたいと思つても連れて行く事が出来ませんので其年も暮れて翌年寛延二年三月になりました角右衛門はおかめを連れて小川村の鹽原の所へ尋ねて往きますと、鹽原は去年九月三日に此村を出立したと云ふからア、それで多は直ぐに支度をして立た事かと思ひ、角右衛門も仕方がないから岸田右内の墓場へ参りますと未だ新しい卒塔婆が立まして村の者が手向ますか香花はたへずに上げてあり

——オレの妻お龜娘を誘ひさる——

四〇

ます其石塔の前へ参りまして角「モシお神さん此處へ來なせへ、お前の御亭主に逢せてやるから此處へお出なんしよ」か「誠に不思儀な御縁で貴君がお助け下さつて今年まで御厄介に成て居りましたが兄も江戸表へ出立しましたとの事ですが妾の夫岸田屋宇之助は此村に居りますか」角「ハイこれがお前の御亭主でがんす」か「ハイ何處に居ります」角「其處に徹郎忠操信士と書てある之がお前の亭主サ」か「エーそれでは妾の亭主はアノなくなりましてのですか」角「譯をいふのも氣の毒だから今までは云なかつたが云なけりやア分らねへから云ふべえが、去年九月の二日わしが用があつて金を持って千島村まで往くと、あんたの御亭主が跡から來てモシ「旅人さんといふから、ハイと云て振りかへると私が主人の爲めに五十兩入るだから貸して呉れば主人が江戸へ歸へれる、損は掛けねへから貸して呉れると手をついての頼みだが見ず知らずの者に其様な事を云ふのだから盜賊だと思つて打ち撲るべえと思つたら、お前の御亭主が脇差を抜て追驅る時に私が轉倒だ上へ跨つて殺すべえとするから一生懸命に人殺しい」と云つと、其時向ふ山を通り掛けたのは貴女の兄さんで鹿を打遣した歸り路で私等を見て

盜賊が旅人に掛つたのだと思つて鐵砲を撃つて其玉が右之助さんの胸へ當つて現在自分の家來と知らずに兄さんが鐵砲で打たと云てオイ「泣やんすから、私も氣の毒になつて死骸を小川村へ送て往て身の上話をする」と貴女の兄さんも私も元は先祖が一人で一人は沼田へ出て百姓になり一人は阿部様の家來に成て又此處で巡り逢ふとはハア實に驚いた譯で不思儀な縁でがんすから私が五十兩遣るべへと云た處が受けねへと言からどうしたらよかんべいと思つて、岸田が太死に成て可愛そうだから獨息子を無理無態にもらつて來のが家に居る多助サ貴女の爲には甥でがんす、其處へ又貴婦を私が助けて家へ連れて來て見れば叔母甥の斯う遣て一つ所に來て委しい話しをすると云ふのは前世からの約束と諦めて貴女も御亭主さんの死んだ事は何時までも鬱々と思つて居て身軀にでも障るといけねへから諦めておくんなし「か「誠にさう云こととはしらす連れの者が先へ歸つて來ても良夫では歸つて來ませんから何うした譯かと案じて居りましたが、田舎では其地に長らく居りますと養子にすると云ふ事を聞きましたから良人も多に養子にでも往たのではないか、女房子を振捨て他家へ養子にはいるとはあんま

——右内の妻お龜娘を誘ひさる——

四一

り情ない不實な人と怨んで居たのは妾の誤り、良人が左様いふ譯に成まして唯た一人の兒女を略取されましては生甲斐のない身の上、寧ろ一思ひに死にとうございますから先刻來る道にありました豆川へ身を抛げて死にますから貴君は先へお歸り下さいましと泣倒れますから角「そんな馬鹿な事を云ふもんじゃないやねへ、貴女の娘は畧取されても死だか生きておるか知んねへのだから夫よりも私が家へ歸つて多助と兩人で娘の行衛を捜し私も亦捜して遣から手分をして尋たらおゑむさんとやらにも逢へねへと云譯もねへから、今早まつて命を捨るよりも生きてゐて死んだ右之助さんの菩提を弔ふのは貴女と多助ばかりだ、何卒私の云ふ言を聞いて下さい」と、云はれておかめはハイクとばかりで泣いて居ましたが、角右衛門の辭を捨かねて是非なく兩人で沼田へ歸つて參りましたが、扱て話頭兩岐に分れまして鹽原角右衛門は其の前年の九月の三日に小川村を出立致しまして沼田の御城下に泊りまして、翌日は前橋に泊り其翌日が熊ヶ谷泊りでそれから鴻の巢桶川と中仙道を下りましたが、足弱の連れで道も抄取りませんので天神橋へ掛りますと日はトツブリ暮れ足は疲れましたから御新造は歩るけま

せんから寫屋と云ふ茶屋へ寄りました角「誠に困たものだなア足は痛むかな清「ハイ幾ら樂を付けても癒りませんので困ります角「誠に草鞋喰と云ふものは悪いものでナ其癖山道は歩行きつけて居たが平地は却て草臥るといふのはどういふものだらう、これく女中これから大宮宿までは幾程あるな女「これから一里四町ありやんがハア日が暮て御困りでもがんせう角「當家では泊めて呉れまいかな女「爰な宅でわハア堅う御座へやすからどんな馴染の御客でもとめましねへから三味線と藝はいりやしねへヨ私どもは堅へ家でなくつちやア勤まりませねへ、其代りにやアこゝな家の忙がしくて庭の中を一日に十里位の道は歩行から夜は草臥て顛倒して仕舞ふのサ、それから見ると熊ヶ谷の女共は絹布着物を着て居て樂な代りに此家へ來ると三日も勤りやせんでハア、誠にどうも何も御座へやせん玉子焼に鱈汁に生節豆腐でハア角「よし、何でもいゝから早くと云ふので此家で支度を致しまして角「コレく女中勘定をしてお呉れコレお清此包をお前持してお呉れ之は端錢で出して置からこれは私が持て行くと云ひながら荷を分けて居りますと、側に居た年齢廿二三で半合羽を着て居る商人体の男が草

鞋の穢れたのを穿いて頬冠りをしながら此男も出に掛りますと、いきなり傍にあつた角右衛門の風呂敷包を引攫て逃げましたから角右衛門は驚きまして盗賊待てと云ひながら追驅けました、彼は一町餘りも追驅けて加茂宮村と云ふ所から西へ別れて加村まで三町許り追驅りましたが鹽原は最早間に合ひませんから脇差にあつた小柄をズツと抜いて手裏劍に打ちますと打人は名におふ鹽原角右衛門の腕前ですから狙ひ違ふ惡漢の右の太股へ立ましたから、ヤツと云て畑へ倒ました所を角右衛門は惡漢の頭髮を取て引休し角「ヤイ盗人旅中の事ゆへ助けへ遣まいものでもないが包をよこせ 惡」ハイハイ貧の盗みで御座いますどうか命計は助けて下さい 角「黙れ貧の盗みだ杯と申し左様な事に欺されるやうなものではないは、今度は免して遣はす以後たしなむかと云ながら側にあつた板の根株へ頬片を捺り付ますから惡漢は痛くて堪りません 惡」どうか御勘辨を願います、盗賊では御座いません、實は私の母が眼病で難澁して居ります、それに七歳になる妹が御座いまして生計に差支へますから母に良藥を服せる事が出来ませんので、何卒して良藥を服せて癒して遣たいと思ひまして實は今日鴻の巢まで藥

を買ひに參りました天神橋の蔦屋で休んでおりますと、旦那様が荷物をお分けなすてこれだけは端錢で出して置くと仰やつたのを側で聞ておりまして不圖惡い了簡を出してお包を持って逃げましたが、中にお書付でも在てはお氣の毒で御座いますから今晚お泊りへ持て出て返へそうと思つて居りましたので御座います、誠に惡事を致して濟みませんどうか御勘辨を願ひます、足が痛くて歩行けませんからどうか小柄をお抜なすつて下さいませと泣ながら申しますと 角「成程賊といふ者は様々の言を云ふもので先程荷物を攫て行く様子が貧の盗みとは思へんは 惡」へエ眞實の盜賊では御ざんせん其處が私の家で御ざいますから虚だと思ふなら往て御覽なすつて下さいと、云ながらダク／＼血の流れる足を曳摺て上總戸のもとに膝行りより 惡「母アお前の眼病を治さうと思つてとんだ事を致しました、此お士様に御詫言をしてお呉よと云ながら戸を開けますと、四十三四の母が眼病の様子にて其側に七歳位になる女の子が居ります側へ這ひより 惡「母ア／＼お前の病氣を癒さうと思つて濟ねへ事と知りながら悪い心を出して此處に居る旦那の荷物を奪うとする所を捕まつて今お詫びをして居る所だ、母アお

前もお詫をしてお呉れ母ア——ヨウ——母「何か忤が不調法を致しまして申譯があり
ません何卒お免下さいまし角「これは手前の宅か、と云て居所へおせいも驅けて参り
まして角「能お前來たねへ清「へイ様子が分りませんで心配になりますから参りまし
たがアノ包は御ざいましたか角「ナニ包は奪られませんが婆「誰君様で御ざいますか些
少見へませんがどうか御勘辨を願ひます不届至極な奴で御ざいます、サアこれへ來い
——といひながら忤の頭髪を取て引寄せまして三つ四つ續け打に撲ました悪「母ア勘
忍して呉れ——婆「勘忍して呉れと云てコレ手前も元とは祿を取た者の子ではないか
假令如何に貧乏すればとて人様の物を奪ては亡なつた尊父様に濟まないどういふ了簡
でそんな事をしたと泣ながらむしりついて打擲しますから側に居た鹽原角右衛門
も氣の毒に思ひまして角「阿母免して遣て呉れこれが貧の盗みだと言ふ事だから、併
し假令親の爲でも人の物を取るのには宜しくないぞ以後斯様な事があつてはならんよ、
これは少しばかりだが小兒が怖い——と言て泣て居ではないかサ、これは聊かだが小
遣ひに遣るから何か好きな物でも母に買て遣れ、だがそれと知らず氣の毒なは足に手

裏劍を打たから嘔痛むであらう、餘程痛むかなそれは貴様が心得違ひをした故仕方な
いヨシ——これで別れる婆「どう致しまして忤が悪い事を致したのに金子を戴くなん
ぞといふ事は出来ません角「少しばかりだり取て置け悪「ハイ——母さん折角の思召
だかち戴いて置きな婆「面目次第も御ざいませぬ、と云ひながら親子の者が夫婦を見
送りまして禮を申します此方も取急ぎますから出て行きました、親子は上總戸の所まで
鹽原夫婦を見送り雨戸を立て顔見合せ彼の阿母は眼病だと云たのが眼をバツチリ開き
まして忤に向ひ婆「問拔どじをふんじやアいけねへじやねへか悪「エ、悉皆遣り損な
つて仕舞た婆「壁に成て仕舞て高飛をする時にどふする積だ悪「此小柄は滅法に痛へ
や母ア彼奴は今夜大宮の栗原へ宿ると云たから今夜跡から往て意趣返しに仕事をして
來るからヨ婆「よしねへ——お前のすることは何でもどじばかりで仕様がねへ、又遣
り損うといけねへから止しねへよと親子で争て居る所へガラツと戸を開けて來たのは
次立の仁助と云ふ胡魔の灰仁「母ア何しろ此處に居る事は出來ねへ、あの子を略取し
た事からツキがまはつたといふ譯は百々村の藏八と金山の松と江田村の源藏が捕まつ

て、己れ達へ足がついて来たから直に逃げなくつちやアいけねへせ婆、それ見ねへナ
賢に成てどうするんだい此處に薬があるから付けねへナ仁、どうしたんが小平哥々
やアどうしたんだ小、なアにつまらねへ仕事を仕損なつて婆、此の野郎は遣り損なつ
て足へ小柄を刺されて痛くつて逃る事が出来ねへ眞實に半間ナ野郎でしやうがねへヨ
小、其代りにやアこれから此の小柄を以て行て足を痛められただけの仕返しをしなく
つちやならねへと言て居る所へガラリツと戸を明け鹽原が息を切て参りまして角、今
小柄を忘れて行たから返して呉れと言われたから今まで眼を明けて居たおかくは急い
で眼を閉いで仕舞ひ小平もまご／＼して小、へい小柄は此處にありますと差出すのを
受取て鹽原は脇差へはめて角、考へて見れば誠に氣の毒な事をしたなと云ひながら急
いで歸つて往きました婆、これだよする事爲す事半間じやねへか彼の侍士の金を取て足
へ小柄を刺されやがつてこれを取りに来ればハイと云て渡すんだもの仕様がねへじや
ねへかこのどちさをヨ仁、そうサ小平哥々失錯遣ちやアいけねへせ何しろ此處には長
くは居られねへからは是から信州路へ掛るにやア秩父へ直に山越して逃げやうと、惡漢

三人相談して略取したおゑいを背負いまして此所を逐電致しましたが、惡事と言ふも
のは通れ難いもので再び追捕に掛りますと言ふお話しになります、此方は鹽原角右衛
門夫婦其夜は大宮驛の栗原と申す旅籠屋に宿り、翌六日江戸に着し本郷春木町に参り
まして岸田右之助方を尋ね妹お龜に逢ひ、右内の變死の事と其事より沼田の百姓角右
衛門に五十兩もらひ受け支度をして歸府致した事を知らせやうと右内の家を捜し升と
近邊の者の申すにはお龜は字之助さんが歸らないから世帯を仕舞ひ此月の三日に子供
を連れて旅立した、と聞て鹽原夫婦は残念に思ひましたが返らぬ事ゆえ直に筋違橋内
戸田能登守の家來野澤源作と申す者は妻お清が従弟どしなれば是を便り江戸侯へ奉公
すみ致し、新地五十石にて馬廻り組に召抱へられましたがお寛延二己巳の四月御主人
は野州宇都の宮より肥前の島原へ國替仰せ付けられ、鹽原も江戸公の御供を致しまし
て國詰の身と相成ましたからとんと沼田下新田の角右衛門方へ音信は打絶えましたが
再び實子多助に廻り逢ひますお話しは一息つきまして申しあげます。

(四)

十三年目に母娘會返す

引續きますお話しは鹽原多助一代記で御ざります、是は文化文政の頃まで大評判の者で本所相生町に居りまして地面の廿四ヶ所も持ち炭薪の大問屋で御ざいますが、纒か
 の間に儲け出し斯様な大身代に成たと申ますが、なんでも其頃は未だ世の中が開けぬ
 時分で御ざいますが、當節は追々開けて參り仕合せな事には大火と云ふ者が殆ど御ざ
 いません是は家造りが石造或は店藏に成たり又は煉瓦造に成りましたのでマア火事
 が御ざいましても焼ける道が塞がつて居りますから大きな火事が御ざいませんが、開
 けぬ往昔は折々大火が御ざいました事で、丑年の火事午年の火事或は佐久間町の三味
 線屋火事杯種々大火も御ざいました、其中で一番大きいのは本郷丸山本妙寺火事目黒
 行人坂の火事これは聽衆方も御案内の事でそれに赤坂の今井谷から出まして麻布十番
 から古川雜式網坂を焼拂ひ三田寺町聖坂から三角へ掛け田町へ出ましてこれが品川で
 鎮火致しました大きな火事で御ざいましたがこれは寶曆十年三月四日の夜に出まして

一日おいて又六日に outbreak しましたのは神田旅籠町から佐久間町を残らず焼拂ひ遂に
 淺草茅町二丁目まで延焼し見附を越して兩國へ飛火致し兩國一面の火に成て馬喰町を
 焼き横山町三丁目残らず本町通りを出て日本橋通りから江戸橋の方へ焼け四日市小網
 町一面の火となり、深川へ飛火致し深川一面の火となり漸く鎮火致しますると、其翌
 晩また芝神明から outbreak しまして芝片門前本芝残らず焼拂て御濱で鎮火致し、僅た二
 日の間に江戸大半を焼き盡しました、これは開けぬ往昔のお話しで只今斯様な事は
 御ざいませぬ、田舎のお話しも此時分のお話しを致しますと殆ど虚説の様に聞へます、
 沼田下新田杯と申ますと甚しい山間の鄙村の様で御ざいますが、當今では沼田から新
 橋まで人力車でまゐられ、前橋から汽車に乗りピイト上野まで忽ちに來られ一日の内
 に東京から往復が出來ます事で、追々開けて參りました故これからは鐵道が日本國
 中へ蜘蛛の巢を掛けた様になりますさうですが、マア幾許便利になるか知れませんが
 其頃は一寸旅立するにも中々不容易な事で、田舎のお方が江戸見物に出るにも泣きの
 涙で出ましたもので、江戸ツ子が上方見物に往にも實に不容易な事に思ひ、留守中如

何云ふ事のあらうも知れぬ萬一これが永い訣別になるかも知れないと云て水盃などして繡刺だらけの俠氣な哥々が、オイ／＼泣きながら川崎邊りまで送られて參り友「そんなら健全で往て來な」男「阿母の事を留守中何分頼む、などと云て泣き出しまするこれが遠國へでも往くのかと云ふと纔か百三十里ばかりの處へ往くにも此の通りで御ざいませが現今では大違ひで「君革函を提げて何處へ「イヤ鳥渡亞米利加まで行て來ます、杯と云ふ様な譯で隣の家へでも行く様に思ていらつしやいます、其頃沼田下初田と申ては随分山間の鄙村で御ざいました、扱ておかめは角右衛門に連れられ此處へ參りまして一年半ばかり居ります中に、角右衛門の女房が没かりましたか角右衛門も未だ老朽る年でもなく殊に縁合に成て居るおかめさん、多助さんにも叔母さんにあたるさうだからこれを後妻に直したらよからうと村の者等が切りに勸めまするが、角右衛門は倒々堅固な人だから容易に承知せず、あんな年の遠て居る若い女を女房に持は世間へ對して誠に宜敷ないからと云て聞き入れませんのを、さうではない貴公の跡目相續をする多助さんの叔母なり殊に彼の子を可愛がつて能く世話をしなさるから女

房に持つがよいと、分家の者始め村方一同の勸めに止を得ず承知致し、不思議な縁でおかめを後妻に直しました、これから十二年経ちましてのお話で丁度寶曆十年に相成りますから角右衛門は年が五十四歳になりました、五八と云ふ奉公人を伴に連れ江戸見物ながら餘儀ない用事があつて國元を出立致し馬喰町に宿を取て居りますと、二月四日の大火で赤坂今井谷から出火し品川まで焼け込んで鎮火したと申ますから恐怖こんだと思つて居ると又一日隔て神田旅籠町から出た火事は前申上りました通りゆえ角右衛門も馬喰町を焼け出され五八は大きな包みを脊負てせつ／＼と焼け出されました往來／＼アリヤア／＼など、云ひながら大きな荷を擔いで右往左往に駆け廻る、此方からはお使番が馬に乗て驅けて來る仕事師は繩を振り鉤をかついで威勢能く繰出して參る騒ぎに、二人はまご／＼しながら漸く逃げ出しましたが行き所ろがありません五「旦那さん恐怖じやねへか、一昨日大けへ火事があつて又今日こんな火事が始まるとは恐怖こんだ、江戸は火早いと云ひやんすがこんなに大けへ火事がこう續いてあるとは魂消やした、火に追掛られるやうだヨ危へとも危へともあんなどうも先の尖銳た

驚嘴を擔いで驅けて居やすから頭へでも打つけられて怪我でもしては大變でがんす旦那さん何處へ逃げますか角「我れも始めて江戸へ出たのだから困た、仕様がねへが此間一度尋ねた小網町の積荷問屋ナ彼處へ行くべいと、これから小網町へ参りますと、此灯事が日本橋通から江宗橋、四日市、小網町へ焼け込んで参りましたゆえ、角右衛門は又此處を焼け出されました五「恐怖ねへ處だ江戸へ逃げてへ所にやア二度と再び來る所じやねへ、火に追かけられて居るんだねへ旦那さん何處へ逃げべいか角「仕内がねへ外に往き所もねへから深川の出船宿へでも行くべいと、深川高橋まで参りホット一息吐く間もなく又此の火事の飛火がしまして深川一面の火となり火の粉がバラ／＼落ち掛りますから五「旦那さん又何處へ逃げべえねへ角「何處へも行きやうがねへ角「ア二度と再び來る所じやありやしねへ角「仕様がねへ馬喰町は焼けて仕舞たから板橋へでも行て泊るべえ五「板橋まで焼けて來やしねへか角「さうしたら沼田へ歸るべえ五「沼田までやけて來たらどうする角「馬鹿言へと言ひながら二ツ目の橋を渡り御竹藏邊りまで参り、ホット一息吐きながら後ろの方を見かへせば天は一面に梨地の色を

現はし火事の明りで往來は見へ透き人々皆疲れて一人も出るものはなく、往來はバツタリ止て仕舞ひました、夜も段々と更け以前の御竹藏前で現今交番所のある所から割下水の方へ掛りますと、女の金切聲でアレー人殺し／＼と言ふから角右衛門は氣が付向ふを屹と見ますと、一人の悪漢が島田鬚の女を捕へて打擲するのみならず娘の持たる包みを引攪つて逃げ行きました、跡に娘は泣き仆れて居ましたが何思ましたか起ち上り前なる御竹藏の大溝へ身を跳らして飛込まふとする様子に驚き、角右衛門は親切な男ゆゑ驅け寄て突然娘の帯ぎは取て引留め角「オイ娘子お前此溝へ飛び込のか身投じやねへか、何だか様子は知んねへが男がお前の荷物を擡つて逃げそれに大そう打たれた様子だか一體如何いふ譯でがんす娘「有り難う存じますかどうぞお放なすつてくださいまし、妾は深川の火事で焼け出され阿母と一處に逃げて参ります途中、阿母にはぐれ一人で爰まで來りますと跡から附けて來た悪徒が突然妾を突倒し撲ち打擲致しまして大事な荷物を持って行て仕舞しましたが、彼の中には金子もはいつて居り殊に大事な櫛笄や着物も入て居ます故あれを取られましたは阿母にどんな苛酷めに逢さ

れ殺されますか知れませんが寧ろその事死なうと思ふのでございます 角「マア待なせ
 へ私は田舎漢で始めて江戸へ出て来たもんだが能く物を考へて見なせ盗賊に荷物を
 取られる位は災難とはいひながら些細の事だ、此マア大けい江戸の火事を見なせへ何
 十軒とも知れねへ家が焼け土藏倉を落す中で盗賊に包を取られた位はなんでもねへに
 阿母に濟まねへからと云て此溝へ飛込んでおつ死ぬとは年はいかねへが餘まり分別が
 ねへ話だ、お前様が阿母様に逢て斯云譯の災難で取られたといつてあなたが謝び事を
 したら御母様も聞かない事もあんめへ娘「でもどうぞお殺しなすつて 角「馬鹿な事を
 云はねへもんだヨあなたに御母様に云ひにくければ私が一處に往て謝事をして上げべ
 いからアレエ、マア心得違へをしちやいけましねへと留めるも肯かす娘は泣て身をも
 がき騒ぎまするに困り果て 角「仕様がねへナ五八ヤ／＼爰へ來う 五「何んだかねへ
 角「早く爰へ出て來う何處へ往た 五「おらア人殺／＼と言からおつかなくつて堪りや
 しねへから茲處に引下つて居りやすのだ 角「今此娘子が身投やうとして留めても肯か
 ねへから茲處へ來て手傳て押へて呉れと言はれ五八出て參り 五「ナニ身段るつて止し

なせへ止すがゑへヨ此んな小けへ所へ這入て死ねるもんじやあねへ 角「ナアに母様に
 濟まねへから身投るだつて 五「よすがにいゝに死んじやア命がなくなるヨ 角「當然の事
 だ娘ツ子私ア田舎漢ですが此火事に焼け出れ那地此地逃廻つて包を脊負たまゝ泊る所
 もねへのでこゝをうろ／＼して居る所だが貴女の死うとするのを見掛けどうも此儘
 見捨て往く譯にやアいきやしねへから貴女の家迄一所に送つて上げやんせう 娘「有り
 難う御ざいますが妾も焼出されて家はないのでございます赤坂の火事で焼け出され深
 川橋下の親類共へ參つて居りますと今晚の火事で焼けてしまひ行き所はございません
 角「仕様がねへ困つたもんだアねへどうか探したら知んねへ事もあんめへ 五「どうか
 探したら知んねへ事もあんめへ 角「私等は馬喰町から焼出され小網町から高橋の方へ
 逃廻つて泊る所もないがなにしろ爰は往來だからマア一所にお出なせへ 五「爰は往來
 だからマア一所に來なせへ 角「なんだ全じとばかり言ていやアがると三人連立ち山の
 宿へ參り山形屋と申す宿屋へ泊り段々娘に様子を聞くと妾は三田の三角のあだやと申
 します引手茶屋の娘でお梅と申す者でございますが、おかくと申す母と二人で深川橋

下の親類内に居りますると又焼出され逃る途中御母にはぐれてしまひ先きの男に包を奪れましたがあのの中には金子もあり大切な櫛笄に衣類もはいつて居ますからあれを奪た事を母が聞きますればどんなに謝ても許す事じやアございませんからどうぞ身を投げますからお見逃しく下さいとばかり言て居ますゆゑ角右衛門も困り果て角困つたもんだねへ何しろ探して見ませうと外に仕様が御ざいませんから當てもないよでございしますが、三田の三角へ尋ねに行きますのに若い娘を一人置いて心得違ひな事でもあつてはならんと存じまして五八を付て置き角右衛門は出掛けまして三角から深川を彼地此地と三日の間探しましたがとんと心當りもなく鼻の穴を黒くして埃だらけになつて歸つて参りました五「お歸んなんし旦那さん知れやしねへかね角」しんねへヨどうも困つたもんだ、アノ何んとか云たつけネ姉さんまア爰へ御出なせへ貴女も知ての通り今日で三日の間探しやすがなにしろ焼け原べいで尋る所もなし自身番へ保て尋てもどうもしんねへ誠に困つたもんだが斯な事を云て氣にしちやアいけねへが是程の火事だつてなんぼ私等が田舎漢だつてこうやつて手間かけて尋てしんねへ譯はねへが、何しろ

大火の事だから御母様もおらと全じ五十の坂を越して居る人、殊に女の二つちやアあるしするから殊によつたら焼原へ突飛されておつ轉んだ上に人がぶち乗つてマアそんな事もあんめへが焼け死んだやうな事があつたら貴女の身の上はどこへ連れてめへつたらいゝか知んねへからそれが心配でなんねへ娘「御深切様有り難う存じます私共の阿母は殊によつたら焼け死んだかも知れませんヨ、焼け死にますれば妾のからだは落籍が出来て却て仕合でございます 角「馬鹿なことを云ふもんじやアねへ年いいかねへつて母様に小言云はれるのがつれへもんだから焼け死ばいゝなんぞと荷めにもそんな事を云つちやア濟みやしねへヨ 娘「いへほんとうの阿母ではございません虚の阿母でございませぬ、それに心得違ひな人で悪い事はばかり致し妾は幼さい内から育てくれましたから仕方なくついて居ますがヤレ妾に出ろのそれが否やなら女郎に賣るのと無理難題を申し、まだそればかりではありません阿兄と云ふものがございま、が妾には義理ある兄でございまして妾のやうな者を捕へ猥褻しいことを云ひかけますが假にも兄弟でそんなことは出来ませんと衝放ましたら妾を憎み出し、阿母と二人りして責めますゆ

へ四五年前から驅出して仕まはうかと思いましたが參る所もないので仕方なく惡黨の親子の側に附隨て居ますが阿母が焼死すればどんな辛奉公をしても妾は堅氣になりたいと思つて居ます 角「そりやアゑれへこんだが何か外に親類でもあつて預けて往く所はありやしねへか 娘「妾には親も兄弟もない者を助けて幼さい内から育てたのだと阿母が申して居りますからなんにもございませぬ 角「いくつ位から育てたのでがんす 娘「七歳の時から育てたのだと申します 角「でも實の父母が在りやせう 娘「あるのでございませうが何處に居りますやら一向妾には分りませぬ 角「こりやあ困つたが實の母様の名はなんと云ひやすへ 娘「なんと申すか存じませぬ 角「それじやア尋ねる手が、りがねへが實の父様の名もしれねへ 娘「親父の名は妾の幼少時分懐に抱て寢て居ながら迷子にならないやうにと口で教へたを幽微に覺へて居ます眞實か虚かしりませんが慥か本郷春木町味噌屋の裏で岸田右之助の娘おゑいと云へばはぐれないといはれた事が耳に残つて居ります 角「ナニ岸田右之助の娘だとハテネそれなら慥か十三年跡保泉村の原中で賊の爲めに略取された岸田右之助さんの娘おゑいさんか 娘「ハイ貴所

はどうして御存じ 角「コレハ魂消た五八ナんとマア不思議なことだのう 五「どうもマア不思議なとでおゑいさんが出て來るとは不思議な譯だして見ると此火事も中々好事だ 角「エ、ハア心配をおたねへでも貴女の實の母様は達者で居るから差せて遣るべし 娘「ほんとうの母様に逢せてくださいますと 角「それには種々譯があるが話は家へ歸へつてから緩裕りしべし、我れは沼田の下新田と云ふ山國だがお前さんの實の母様は我れが家に居るんだ 娘「どうもマア不思議な御縁でどうぞ御伴れなすつてくださいまし 角「實に不思議な縁だ構はねへでいきやせう其の母様は尋ねないでもいと、急に支度をして三人連立ち道ではお榮には何も深い話しもせず國へ歸りましたが、國の方では江戸は大火事で江戸中丸で焼けてしまつたやうな話を話して居る所へ歸りました故か「オヤマア旦那御歸り遊ばせ江戸は大火事であつたと云ひますからお怪我でもなければいとどんなに心配をして居りましたらう、なんだか江戸は残らず焼けてしまつたやうな事を申しますし、又跡で聞けば觀音様は残つて居ると云人もあり、どんなに心配していましたか知れませぬ五八さん大きに御苦勞だつた 五「へい只今戻りや

した、どうも江戸はるれへ怖かねへ所でなく、いゝ所だと云ふのは處でがんず、側からく、火事が追廻て来て彼處此處逃廻つて漸やくのこんで歸つてめいりやした孫子の代迄遣る所ぢやアありやしねへ、角「おかめ江戸へ往つた土産に好物を連れて来たヲイこつちへおはいんなんし、龜「ヲヤどつから連れて来たのと云に角右衛門は娘に向ひ角「コリヤアおらア妻アだ、角「コレハ御初に御目にかゝります、私は旦那様の御影様でこちらへ参りました者何分宜敷御願ひ申します、龜「そうでございますか、こんな山の中へ能くマア御出だねへ、久し振で江戸の風を見たがどうもいゝ、縹緞だ事、年は幾許ナニ十九だとへ、オヤさう焼け出れてそれでそれはマア御氣の毒ナ、旦那これは何所の娘です、娘「これは十三年跡保泉の原で略取されたお前の娘のおゑいだヨ、能顔を見ろ、龜「ナニエー、角「これがお前の實の阿母だアヨと云れ、親子は思ひ掛なき再會におかめは娘の手を取てつく、顔をながめながら、旦那様どうして此子を連れて来てくださったか、さいましたか、角「なんとマア不思議なわけで此間の火事の時此娘も焼出され逃ぐる途中阿母に別れ獨りで来る後から悪漢に附かれ持て居た包を奪れ、阿母に濟ないと云ふ

所から身を投げやうとする所へ已等が通り掛り助けたうへで様子を聞ば、これくと云ふ話に我も飛立ばかり嬉しく思ひ直に連れて来たんだが何しろ嬉しかんべい、龜「どうもマア思ひ懸けない事、大層大めくなつだんで一寸表で逢たつて知れる氣遣ひは悪りません、お前が七歳の時私がお前を脊負馴れない旅をした、お前は略取され私は悪徒の爲に既に殺されやうとした所をこの旦那が助けてくださり、それから後ちご厄介になり今でも何一つ不足はないが暑いにつけ寒ひにつけ朝夕共にお前の事を少しも私は忘れた事は在りません、ほんとうにマア幼な顔を見覺へて居るヨ、旦那の前でこんな事をいつては誠に濟ませんが先の連合の右之助さんに誠に能く背て居りますヨ、どうもマアほんとうに思ひ掛けない事で夢のやうな心持です、鳥渡立て見なよマア大きく成たこと、そして風のいゝと鳥渡座つて見なよ一と廻り廻りなよなぞと、いろんな事を申し先づ安心して先の名を呼がいと、これから名をも改めておゑいと呼び多助とは従弟どうしの事故行末は配偶る心得で、二月の末から五月の頃迄中よく日を送りました、一日角右衛門は多助に云ふのはおゑいはまだ御城下を見たとはあんめいか

ら一所に連れていつて見せて來う、沼田は土岐様の御領地でございます、多助はおゑいをつれて往て見物させて歸つてくると其跡から續いて内へ入て來た男は銅鐵造りの長物をさし、菅の三度笠を手に下げ月代を生し末毛先を散ばし、素足に草鞋を穿いて男「ハイご免ねへ五」ヒエー何所から來た男「鹽原角右衛門さんと云のは此方でごせへやすか五」へい爰でごせへやす男「今爰の家へ二人連れて入た若いお方はこちらの若旦那でござへやすか五」へい今こけへ入たのはおらア家の息子どんの多助さんだがなんだへ男「その若旦那と一所に附て入た美しい姉さんは此家の令嬢でございますか五」おらア家のおゑいさんと言ふ娘さんがなんだへ男「へいそうですか、そんならお前さんの所の娘に違ねへのだね、オイ阿母アこつちへ入ねへナ婆「ハイ御免なさいと言ながら入て來た婆々は年頃は五十五六でデツブリ肥り頭を結髪にして細の飛白の單衣に黒鳶絨の帯を前にしめ白縮緬のふんどしを長くしめ鼠海氣の脚半に白足袋麻裏早履といふ姿ですから五八はいろんな人が來なアと吻やいて居ますと婆「角右衛門さんといふお方にお目に掛けてへもんだねえ五」おらア旦那は高平村迄用があつて往やし

ておりやしねへ若旦那へいだ婆「そんなら若旦那に一寸お目にかゝりたう存じます」五「多助さん何事だかしんねへが貴所に逢てへと云ふ人が來やした、といふに奥より出て來る多助は今年廿歳でおとなしやかな息子で慇懃に手をつかへ多「あいにく親父はおりましたねへがお云置でよろしいとなれば私が承り置まして親父に申聞かせよう婆「貴所は御息子さんでございますか、只今あなたと一所に爰の家へ入りました娘はこちらの娘子だと此御奉公人が云たさうでござい升が一體あの娘はどちらから御もらいなさいましたかそれを承りたうござい升多「イエもらつた譯では御ざいません、あれは私の家の先からの娘でございませ婆「お惚氣なすつちやアいけません、ありや妾の娘だヨ妾しヤア三田の三角のあだやと云引手茶屋のおかくといふ婆々だがあれは妾の大事な金箱娘、此二月大火事の時深川を焼出され逃げ出す途中ではぐれてしまひ、今日が日迄行衛が知れないから段々手分けをして探がしたがどうしても知れなかつたのが不圖山の宿の山形屋と云ふ宿屋に泊つて居た客が娘を連れて沼田のこれ／＼の處へ一處に歸つたと聞た故私も娘がいなけりヤア商賣も出來ない事故忤を連れて怖ろしい

開けない白井八崎なんぞと云ふこわい山越しをして此處へ来て沼田の御城下へ宿を取
り三月の間尋ねたが知れぬも道理ごんな、山の中に居るんだものを亞魔女も罰だ先刻
御城下でお前と一所に歩行て居たのを見掛たから尋ねて来たのサ、爰の家の御子息が
悪足になつて居るかどうだか知らねへがどう言ふ譯で誰に沙汰をしてお前の處へ娘に
したかそれを承りたいので多「ハイどう言ふ譯でがんすか私から精しい言を申した所
が御聞入もありやすめへし親父は留守でがんすから親父の歸る迄御待ちなすつてをく
んなせへ、高平迄参りやしたのですから明日は慥に戻りませう待たれやすなら明日ま
で待ってください 婆「待たれませんヨ御歸りまで宿を取り錢を遣つていられるものか、
今迄どの位路金を遣つて居るか知れねへ 多「沼田のどこへ宿を取りなさるかそこを聞
かせて置てくださいりヤア親父が歸たら御迎ひに出す様にいたしませうから 婆「出来ま
せんお腹がすいたから御膳を御馳走になり旦那の御歸りまで泊て置てください、若衆
さん盥へ水を汲んで来て御くんない 五「旦那が留守だから若旦那がいろく話し
をするのに解らねへ事を云ふ 婆「なんでもい、俺の娘をこへ連れて来て我物顔に

娘でございいますと云はれて、はい左様でございいますかと云て歸る様な人間じやアござ
いませんヨ、田舎じやア幼さい時から木綿着物で育て教る事は糸繰か機織位で濟むけ
れど、江戸育の娘といふ者は幼ない中から絹布ぐるみ其上金にあかして藝事を仕込み
これから親が樂を仕様と思つて居るのに其恩を忘れ親を見捨て家出をする様な亞魔女
だから唯は置れないのだ、マア御免なさいと云ひながら上りにかゝるから 五「上つち
やアだめだ名主どんにそう云ふぞ 婆「どこへでも往てそう云へ、こつちで名主へ出の
だぐすくすると略取の罪に落すぞ 五「ナニ略取とはなんだと云ながら屹度詰よると
小「ヤイく／＼なにをするのだ、手前我の阿母を打つのか、ヤイ百性大間拔け我れの阿
母に指でもさすときかねへぞ、まごく／＼しやアがると此家へ火を付からさう思へ 五「た
まげた火を付られちやアたまねへ、と五八は江戸の火事で懲りて居りますから驚きま
した、此權幕に奥ではおかめとおゑいがどうしたらよからうと途方に暮れて居ます所
へ、角右衛門が歸て参りましたが此人は名主から三番目の席に座る家柄と云ひ殊に分
別ある人ゆゑ少しもさわがず、落付拂ひ彼の親子連れの大悪人お覺婆々と道連れの小

平を向ふへ廻はし掛合のお咄しは此次に申し上げます。

(五)

多助とお榮病父の前で婚禮す

却て百性塩原角右衛門といふ人は田地の三百石も持て居りますが、村方で田地の三百石も持て居ると富豪たもので御ざいます、殊に家柄もいゝから座席も名主から三番目といふのは其頃は家柄を尊びました、其百性の家だから旨く往たら二三百兩も強談て往かふといふ権幕で、相手は名に負ふ又旅お覺、是はちよく／＼旅へ出ず昨日歸たかと思ふと又今日旅へ出た又旅へ出たといふ所から自然又旅のお覺と緯號を取りました者で、親子として道逆れの小平是も護摩の灰の頭分で此奴がドツサリと上げ胡座をかくと挺でも動かないといふ、親子諸共名うての悪黨だから其権幕の強いのに怖れて五八も後へ下り名主へ訴へやうとして居る所へ、歸つて來たのが主人角右衛門で奥へ往て様子を聞くと、これ／＼と言ひますとなか／＼の沈着ものですから直に出で参りまして角「ハイ是はお初にお目に掛ります、私は鹽原角右衛門で御座いますが生憎只今

高平まで参つて居りやせんで御座りやしたが、何かマア譯は知りやせんが忤や若へもんどもが頻りに心配して居りやすがどういふ譯で私の所へお出でなすつて人の娘を略取したから名主へ届けるといふのでがんす、其次第を一通り承つた上で御挨拶を致しますが、一體貴様方は何處らのお方で御座いやす覺「ハイ貴方が角右衛門さんですか、お初にお目に掛ります、私は江戸三田の三角で仇屋といふ引手茶屋の主人お覺といふ婆で御座います、此間の深川の火事で娘を見はぐり行衛が知れませんが只今も申すとはり漸々の事で突き留めて、怖ろしい峠を越し此沼田といふ所へ参り宿を取て探して見たが知れませんが居たが、今日不圖御城下廻で見掛ける女は娘に似ているから跡を附けて來て見ると此方の家へ入つたから、此奉公人に尋ねると家の娘だと云ひなさるから、夫はどう云ふ譯で他人の娘を誰に沙汰をして娘にしなすつたか承りますと、此奉公人が名主へ訴へるとか打つとか叩くとか云ふから賣言葉に買言葉、果ては遂に大きな聲を出しました所忤が腹を立て大聲を出しましたが、其様な事をしないででもどうもお話に成る事だがお前さん一體どういふ譯で己れの娘だと仰しやいま

すかそれを承りたいねへ角、ナール程、ハイ御尤もの次第でござりやす、實は御話をしない事は解りましねへが、少しマア用向が有て今度始めて江戸へ参り馬喰町へ逗留しておりやすと、御案内の通り大けい火事で私も始めて火事に逢やした事ゆゑ誠に恐怖やして此彼處處逃廻つて本所の御竹藏へ掛ると、美しい姉さんがお竹藏の溝へ身投て死ぬべいと云ふ處を私がお助け申して、段々仔細を聞いて見ればこれくで阿母にはぐれ悪徒の爲めに包を攫はれました、中には大事な櫛笄もあり金も入て居りやすからあれを取られてはどうも阿母に云譯がないからおつ死ぬと云ふから、マア待つしゑへといらざる事だが私も見兼ねてマア兎も角もと宿屋へ連れて往て、それから貴處の行衛を探したとも探さねへとも三日の間焼原を探しやしたが、どうしても貴處の行衛が知れやしねへ、困つたもんだと思たが何處へ預けると云ふ處もなく、親類もないといふし仕方がねへから私の家へ連れて參つて段々様子を聞くと、親御もなく兄弟もないといふもんだから私の娘にするより外に仕様がねへしやアあんめへじやねへか覺、お惚氣なすつてはいけませんヨ、何だとへ親の行衛が知らないからお前さんは自分

の娘にしたとお云ひだが、それが立派なお百姓さんの御挨拶でござりますかへ、承りますすれで此村方でも御前さんは名主から何番目へとかへ座るとかいふ立派なお家柄で田地の三百石もお持ちなさる立派なお百姓さんが、何の挨拶だ例令親の行衛が知れないと云ても其町内に自身番も有れば名主もある事だから、夫々へ懸つて名主へでも預けて歸らなければ眞實の信切とは云へない、私がこれから彼の亞魔女で少し息をつこふと思つて居たに、大事な娘を攫はれた御蔭で家を持つ事も出来ないから、岡引に頼んで金を遣ひ娘の行衛を尋ねて貰つたが知れない内、漸々山の宿の宿屋で沼田のこれこれの二人連の百姓が斯云ふ娘を連れて國へ歸つたと云ふから跡を附けて來て見ると、沼田からは三里も引込んだ所とは知らず宿錢を遣つて長る間探し漸々突留めてお掛合をするそんな御挨拶、又亞魔女も亞魔女だ親が知れないからと云つてすうくしく此處の娘に成て居る了簡が悪いや、他の娘を一晚でも泊めて見れば瑾を附けたとしか思はれませんから私はもう連れては歸られません、『そんなら私の方へお貰ひ申しやしやう覺、貰ふなら貰ふやうに私の方へ話の極りを附けて得心の上でもらふ様におし

なさいナ徒は上られませんかヨ 角「ナール程是は尤な次第だが貴方が愛想が盡きて私の處へ呉れるなら貴方から確に娘にくれたと云ふ書付を一本お貰ひ申し度もんたが、徒は上げられないとは何いふ譯でがんす 覺「旦那お金を三百兩おくんなさい」ナニ、三百兩とへそんな事を云たつて出来ない相談だ、何故三百兩呉れろと云ふのでがんす 覺「何故と云て二月から五月まで他の娘を引擧つて斯様な山の中へ連れて来て居るんだヨ、私は引手茶屋をして居るから娘が居なくつては商賣をする事も出来ねへから長休みをするのみならず路金を遣て山の中へまで尋ねて来てサハイ上げませうと云て江戸へ歸へられますかへ、呉れろなら上げまいものでもないから夫れだけの入費をお出しなさいナ、私も十九まで育てた填草をしなけりやなりませんヨ、金が出来ねへなら直ぐお返しなさつて下さい、連れて歸つて女郎にでも何にでも打ち賣て填草をするから 角「誠にお氣の毒でございませすが出来ません、どうもハア三百兩は逆も上げる譯には參りやせん 覺「旦那徒だ參りませんで済ますかへ、そんなら何故他の娘を無沙汰で連れて来たヨ 角「親に無沙汰で連れて来た其處は重々済まないが、何分親ごの行衛

か知んねへもんだから 據なく連れてきやしたので 覺「親の行衛が知れないから連れて来たといふ譯で済みますかへ 角「誠に済まねへが全體彼れは貴所の娘に違ねへのかへ 覺「私の娘だから私が路金を遣て態々追懸けて来たのサ 角「それがサ、あのお梅といふ子は七歳の時に保泉村の原中で略取されたお榮といふのだが、どうしてそれを貴所が娘にしなすつたへ、と云はれおかくは悻とし 覺「ハイ貴所は何をお云なさる 角「何も云ひましねへ、あれは岸田屋宇之助と云ふ旅商人の娘ですがお袋が亭主の歸りの遅いのを案じあの娘をつれ亭主の行衛を探して小川村まで来る途で、親子連れの護摩の灰の爲めに略取された娘だがそれをどうしてお前さんは娘にしたか其次第を承はりたもんだ 覺「どうもマア思ひ懸ない事をおいひなさる略取されたかなんだかそんな事は知りません 角「お前さん惚氣たつて無益だヨ、お龜此處へ来て一寸お目、垂れといはれ、こわくながら出て来るお龜とお榮は角右衛門が居るから大きに氣丈夫に思ひ、お龜はズツと進み出て 龜「オイおかくさんとやらお前忘れはしまし、十三年跡鴻の巢の田中で中食をした時お前さんと道連に成り、やれこれ云つてお榮を可愛がり夫から

駕籠へ乗せて來ると保泉の原中で此お榮を攫ひ、能くも此年月娘にして居なすつたヨと云はれ、覺「オヤおかみさんどふもマアと云つたが實母のお龜が此家に居るとは思ひ掛ない事ゆゑ、流石のおかくも驚願して云ふ事も前後致しおどくしながら覺「誠にどうもマアおかみさん思がけない所でお目に懸ました、貴所はどう云ふ譯で此方にいらつしやいますか、角「これにはいろく譯あつて今は私が妻アに持て居やすヨ、それから火事場でもつてからに阿母にはぐれておつ死なうとする所を助けて連れて來と私がほんとうの娘だと云譯ヨ、龜「マアどふもいけしやア、能く他の娘を攫つておいて強請がましい事をおいひだが、誰に沙汰をして他の娘を自分の娘におしだヨ、覺「マアお神さんそう被仰ればお腹もたちましやうが私も旅なれない事故、あの折はお前さんにはぐれたからどうか探してお前さんに渡さうと思つて那地此地を探しましたがどうしても行衛が知す、那の子に聞ても頑是のない七歳か八歳の子供ゆゑ何も分らず、親類は知れず仕方がないから江戸へつれて行て私の娘にして育てるのは當然まへじやありませんか、角「お前さんの云所も又尤もだ親を尋ねても知れず、何も聞ても頑是ねへ子

供で分らねへから貴所が娘にしたと云たねへ、覺「左やうでござりますヨそれを略取たなんぞと云はれちやアつまりやアへません、角「御尤もの次第でがんとす、私も其通り火事場を那町此地尋ね廻りどうかお前さんに渡して上げべいと思つたがどうしても知れず、外に親類もねへと云ひ仕様がねへからつれて歸て娘にしたんだがお互の譯じやアありやしねへか、覺「お互と云たつてそれじやアどうもマア、お前さんどうも江戸から四五十里もある沼田まで連れて來るのはひどいじやアありませんか、角「貴所も保泉村で略取しでもあるまいが親の行衛がしんねへからと云つて江戸までつれて往て娘にすれば道理は同じ事だ、龜「眞實にマアおかくさんなせ他の娘を、角「騒がないでもい、我が云所があるから黙つてゐる、偕これは實の阿母でござります、貴所も實親がしんねへから自分の娘にして居たんだらうから實親が知れたら返すだらうねへ、覺「返すつたつてどうも徒は返へされません、私も路金を遣ひかうやつて態々尋ねて來たんですもの、と言つてゐる側から道連れの小平がしやばり出で、小「阿母黙つていねへ、阿母は老碌してゐるからつまらねへことばかり言て居る、旦那へお前さんは火事場で阿母の行衛

が知れねへから娘にしたと仰やるが、私の方じやア七歳の時から阿母が丹誠してお絹布ぐるみ其上にいろ／＼な藝事を仕込でこれから樂をしやうと思つて居る其恩義を忘れて、スク／＼と此方の宅に居る亞魔女も亞魔女だ夫をたゞ此方の宅へ取上げて只歸さうといつちやア旦那それじやア話しが出来やせん、私も出る所へ出て話を付やせう角「出る所に出るなら勝手に出なさいな、だが全體那時娘を略取れ母様が惡徒に強姦れやうとする處を私が通り合して助けて遣り、伊勢崎の錢屋へ懸り手を分けて探して貰つたが何分娘の行衛が知れないから、八州へ頼み段々略取しの詮議をすると馬方の倉八とかいふ奴と松五郎源藏といふ三人を縛つて名主の庭へつれていつて調べて見ると、親子連れの護摩の灰に三兩宛金を貰て頼まれたと白状したから三人は送られて仕舞たが、親子づれで護摩の灰の行衛が知れず、仕様がねへからママお龜を私の處へ連れて来て置くうち縁あつて今じやア女房にしている譯だが、これを表向にするならおしなせへ伊勢崎の錢屋へ係つて調べの燃を戻せば、お氣の毒だがお前達の腰に繩が着べいといふ考へだ、夫れでもいゝなら遠慮はないから出る處へ勝手に出なせへ、ほん

とうなら己等が方から出べいと思ふんだがそんな荒へ事もしたくねへから、五兩の金を上げベエから草鞋金と思つてこれで歸るならば最う紛紜はなしに子を返したと云ふ書付を一本置いていつて下さい、小「お前さんそんな解らない事を云つちやア困るじやねへか、七歳の時から育て路金を遣つて斯處な山の中まで尋ねて来て五兩ばかりの端した金を貰つて歸へられるか歸へられねへか考へて御覽なせい、角「歸へられねへけりやアどうする已が方から訴へて調べの燃を戻せば五兩の金も取れないばかりでなく腰に繩が付んでがんすが五兩の金も遣り度もないかにいやならそうしやうか、覺「どうもお前さんみんな只どうも、小「阿母の云通り五兩ばかりの金じやアしやうがねえ、角「否やなら訴へる方がよかんべえ、覺「訴へるがいゝつてそんな勝手な事を云つちやア困りますねへ、五八は先刻から此様子を見て居て、五「旦那さんかういふ奴は矢張話しの燃を戻して繩を懸けて各主様へ引いて往て聞へ所へ押入る方がよかむべい、鳥渡名主どの所へ往てくべいか、覺「お待ちなさいまし歸りますよ、と訴へられては身の破滅だから五兩でも取らぬは損と思ひ、覺「小平や書付を書きなといはれ、しぶ／＼しながら小平

は書付を書き五兩の金を請取り出て行きましたが、残念で堪りません故どうかして再び略取さうと思ひ、須川村と云處へ宿を取り様子を伺つて居ますと、此方は安心致しました、處が六月初まりになりますと角右衛門は風の心持から病が重りてどつと床に就きましたゆる、孝行な多助は心配いたし神佛に願をかけ精進火の物断で跣足参りを致しまするが何分効験もございませぬ、角右衛門は村方一同に能く思はれて居る人故かわるく見舞に参るうちに、六月の晦日頃は最う息も絶へくになりましたゆる、家内親類枕元に取巻き看護をして居り、分家の太左衛門は参りて伯父の着病を致して居りますと、角右衛門は苦しい息をつきながら太左衛門く一寸爰へ來う太ハイ伯父様貴君しつかりしねへではいけませんヨ、七十八の爺さままではなし死ぬなんぞといふ弱へ氣を出してはだめでがんす角だめだツテだめでねへツテ今度はどうしても死病と諦めたから汝がに只た一言臨終に云ひ殘す事があるから爰へ呼んだんだが、お龜も爰へ來う多助も爰へ來うお榮も五八も皆呼んでくれ、といふから大勢枕元を取巻きました龜且那しつかりなさいヨ、貴所しつかりして下さいヨ多お爺さん氣を確

かに持て達若になつて下さい 角太左衛門己が血統といふは、汝より外にねへ太私も幼小うちに親父に死なれ又阿母には早く別れ今迄皆な伯父様の世話に成た事は私も心得て居ますから、貴所が達者で居て私もこれからちつたア貴所に樂でもさせべいと心得て居りやすから弱へ心を持ちやだめでがんすヨ 角實は茲に居る多助を己が跡目相續にもらつた譯といふ者は、十三年跡八月二日千鳥まで田地を買に行くとき追貝村で今の妻アのお龜の先の亭主岸田屋宇之助と云ふ旅商人、元は阿部様の御家來鹽原角右衛門と云ふ己と同じ名前の士の家來だが、其御主人の角右衛門様と云ふ人は小川村へ浪人して居た所、八年ふりで宇之助さんが御目に掛り段々の話しにどうか主人を再び世に出していと宇之助と云ふ人が己が金を持って居る事を知て、跡を附けて來て金を貸してくれる主人を世に出してへから借せと云ふから、己ア盗人だと思つて盗人くとなると突然脇差を引抜いて追驅けて來たから逃げべいとすると木の根へ躓づき打轉がると己の上へ乗し掛り殺すべいと云ふ譯だ太ハアエーこれは初めて聞きやして成る程とんだ譯で角所がなア己が下で盗人くとなつてゐると、其時向ふ

山を通り掛つた獵人は鹽原角右衛門と云ふ浪人でお己のがなるを聞いて助けべいと思つて現在忠義の家來なり妹を片付けば弟も同様な岸田屋宇之助を鐵砲で打たへ太「ハアエー成る程大けへ間違へになりやんした角」それがサ間違へで、さうすると其獲人が駈付けて來て死骸を見て魂消て、ア「宇内か知んなかつた我が浪人して居るのを世に出してへと思つて金が欲く成つたかへ、さうとは知らず汝を打た、ア、可哀さうな事をしたつて其立派な士が男泣きに泣くつてやく」太「ハアエー成る程フンとんだ氣の毒な間違ひで角」するとなアしやうがねへから己も手傳て其死骸を鐵砲で擔いで小川の浪人の内へ行て名乗り合て見ると、向ふも鹽原角右衛門己も鹽原角右衛門同じ名前前で不思議に思つたから、段々聞て見ると元は野州鹽谷郡鹽原村の者と譯が分つて見ると元は己と由縁のあるものと分つたから命が助つた替りに金を向ふへ遣り其時貰つて來だのが茲に居る多助ヨ太「ハアエーとんだ深い縁でがんす角」すると其年の九月の五日に、保泉の原中でお龜を助け段々様子を聞けば娘が略取され亭主が死だ事聞き身投げて死なうとするのを段々諭して止めて置くうち、先の妻アが死んで汝等が勸

めに斯うやつて今じやア女房に持て居た處が、此二月江戸へ往て火事場から連れて歸へつてお榮は十三年跡略取された娘だといふ譯から斯して居るのだが、己が亡い跡では此多助もどうせ女房をもらつてやんねへければなんねへが、お榮と多助とは十九と二十年合もよかんべいと思ふ、阿母は多助の爲めには實の叔母なりするから血統三人で此家を履めば大丈夫、さうして太左衛門汝が後見をして農作の事から何から萬事指圖をして呉れば此鹽原の家は潰れめへと考へるから、己の息のあるうちお榮と多助と盃をさせ夫婦にして、年に一度も小川村へ往て右内と云ふ人の法事供養をさせてくれるやうに汝に頼むのだが己の考へはわるいか太「悪い所じやアねへ誠にはア尤もの譯だが、そりやア貴所が快癒た跡の事でよかんべい角」治らねへと思へばこそ盃をさせるのだ、サア茲へ來て早く内輪ばかりだから酒だけでいゝ太左衛門媒になつて早く酌と、急ぎ立られ多助お榮の兩人は恥かしさうに座つてゐる所へ、太左衛門は酒を待て來てマア嫁ツ子からと云はれた時は、なんと云ふべき言の葉も岩間の清水結び染めて深き恵に感じつゝ、難有涙に暮れて居りましたが、角右衛門は七月二日終に病歿り

戒名は一庵了心信士と申し、只今に八軒寺町の東陽寺といふ寺に石碑が残つて居ります、先づ野邊の送りも濟せて仕舞それから三十五日に多助はお龜にお榮と五八を連れて養父の墓参りに参りました、其時用事あつて太左衛門は参りません、参詣終りて四人連立ち返り道で雨が降りましたから多「五八や雨が降て来て困るなア、澤山の降りも有まいかひどくなる」と困るから此木の下に雨宿りして居るから駈て行て傘を取て来てくんな五「へい往て参りませう、と急ぎ足で往てしまふと、いつから附けて居りましたか道連の小平と繼立の仁助が横合から頬冠りして出て来て突然お榮を擔ひて連て行ふとしますゆゑ、多助は驚き一生懸命小平の足にしがみ付盗賊く」と云ふのを、エ、邪魔するなと蹴かへせば多助は仰向けに倒れたが又起上り取つけばお龜も驚き取りつく所を横面を擲倒す又這寄てしがみ付くうちづるく」とお榮を仁助が引すりながら脇道へ入り込榮「ア、人殺しく」と云ても田舎の事ゆゑ助ける者は一人もなく所へ通り懸りましたは土岐伊豫守様の御家來原丹次同丹三郎と云ふ親子の士、湯治に参りまして戻り掛けに先程から女の聲で人殺しと云ふは何事なるかと急いで来て見ると

雨の中で打合が始り大の男が女を捕へて蹂躪ります様子が見兼ねて丹次どのが突然女を連れて逃げやうとする仁助の横鬚を打つ、打たれて仁助は踏ける途端前足を上げてはたと蹴られて尻餅をつく、又小平が向つて來やつを扇子を以てトーンと頭を打ちましたから兩人は呆氣に取られて居ります丹「狼籍者女を捕へて何をします龜「御陰様で助かります娘を略取さうとする悪い奴で御座います、どうか殿様御助けくださいまし小「殿様は何も知らねへからだア、痛へ滅法に頭を打たれた殿様此惡魔女は私の妹ですが略取して江戸から此沼田の下新田まで連れて來た事を知り、阿母と二人で掛合に來やしたら土地の者には叶はねへ、大勢萬せい寄りかゝつて私共に赤恥をかゝせて歸へさうとするから腹が立て堪らねへ、私が妹を私が連れて行くに何も不思議はねへ龜「殿様なアにこれは私の實の娘で御座います七歳の時那奴が略取したので御座います小「ナニ殿様は何も御存じないのだ私の妹に違ひないのだ、此間の火事に阿母に放れ行衛も知れねへから段々様子を聞くと此所に居る事分がり路金を遣ひ此様な山の中まで尋ねて來て手ぶり編笠で歸られませうか龜「さうじやアありません

那奴から私の方へ此娘を渡したと云ふ證文を入れ印形まで捺てよこしたから金子を五兩遣たので御座います小「旦那は何も御存はありませぬ丹「何だか貴様達の云ふのは我にはさつばり分らん、と云ひながらお龜に向ひ一體どう云ふ譯だ龜「全くは私の娘で七歳の時に略取された者で御座います丹「さうだらうと云つて居る後ろに立て居た伴の丹三郎は折々朋友に誘はれ三田の仇屋へ遊びに往た事がありますから、お梅も小平も兼て知つて居る事ゆゑ丹「お爺様あの男は道連れの小平と云ふ悪い奴で護摩の灰などをすると承はつて居ます、阿母も餘程悪黨ださうで御座います、虚で御座いませうヨ慥か其娘は幼年の時攫つて來たのか知れませぬ、何んでも其奴は護摩の灰だと云ふ事です小「何んだ人を護摩の灰と云つたナ丹「黙れ貴様我を知て居るだらう同役と一所に貴様の家へ往た事があるが護摩の灰だと云ふ事だ、グズ／＼すると手打にするぞと云はれて兩人の悪漢は這々の体で逃げ行きます、跡に親子三人の者は大喜びにてマア兎も角もお禮を申したいから宅へ入しつて下さいと云ふので、これから丹次親子を下新田の宅へ連れ歸りましたが、これが多助の爲めに大難の來る起りに相成ります

るお話は次回までお預りに致しませう。

(六)

姪婦母娘孝子多助を苦しむ

鹽原多助は養父角右衛門が死去しまして三七日の寺詣りに参りました歸りがけ、悪徒小平仁助の爲めにお榮が再び攫はれて参る所へ通り掛りましたのは土岐様の御家來原丹次親子で、危い難儀を救つて呉れましたゆゑ實に地獄で佛の譬の通り誠に難有お方様で、どうか私宅までいらつしやいます様何にはなくともお禮の申上度と申し、又お榮は三田の仇屋に居りました時分榮三郎がチヨク／＼遊びに参り知己ではあるしする所から打連れ立て多助の宅へ寄り馳走に成りましたが縁となり、是より度々此の家へ丹次父子が遊びに参りますると、丹次も年四十五歳なれども鰥養しでございませぬお龜も夫角右衛門が死去しまして未だ三十七と云ふ年で、少し梢枯れて見ゆれど花は匂ひ失せず色氣澤山でございませぬ、殊に家來宇内と密通して家出をする位の浮氣ものでございませぬから酒の上とば云ひながら遂に丹次と密通致し、お驚は深く丹次を思ひ

——姪婦母娘孝子多助を苦しむ——

まするが世間の手前多助の前もありませんが、忍びにくく逢ふ事も度重りて今では最う恥かしいのも打忘れ公然で逢ひ引きを致しますゆゑ人の目つまに掛ることも度々ありお龜はどうか丹治と一つになり度がさうするには多助を追出さなければ邪魔に成てなりませんが多助を追ひ出すには如何したら宜らうと考へますと又悪智の出るもので、丹三郎も未だ單身ものなりどうか丹三さんとお榮と色にて成成たなら私も丹次さんと共々に末長く樂しめるだらうと思ひまして、主あるお榮に色事を勧め丹三郎と密通をさせ母子同志で奸通を致し誠に宜しからぬ事で、多助も薄々知ては居りますが事荒立ては血で血を洗ふ道理家の恥己れの恥、殊に亡なつた養父角右衛門のお位牌へ對して濟まないし、嗚呼情けない心得違ひの母親殊に女房お榮まで左様な事を致すとは犬畜生の様な奴と思ひまするがどうも堆を表向きにする事が出来ません、相手は御領主土岐様の御家來なり迂濶の事を云ひ立てる事は出来ませんが、どんな人の好いものでも自分の女房を人に取り取られて腹を立たないものは御座いませんから多助も腹が立ちますから寧ろ此の家を驅け出して仕舞はふかと思ひましたが、いやしく此の家を出たならば

必らず原丹次父子が此の鹽原の家へ乗込んで来るに違ひないが、士には百姓業は逆も出来ないから鹽原の家は必らず潰れて仕舞ふに違ひない、どうも此の家を潰しては八歳の時から貰はれて来て育てられ大恩ある親父様に濟まぬ義理、石の上にも三年の譬へもあればどうか此處で優しく孝行を盡したら終には母の心持も直り丹次父子を寄せ附けぬことにならうかと思ひ、母子諸共非道に多助を虐めるのを怨み返しも致しませんが、優しう孝行をすれば猶更附上り、其年の九月になりました所益々多助を悪みます多助も色白で短身な温良しい好い男でございますが、田舎稼ぎを致しますから千々穢く家にとては居る事も稀れた、月に六度位は馬を曳て歩行き始と家には依り附きませんから日に焦けて眞黒になり日向臭い、又丹三郎は江戸育ちのお士ひ男振も好く小綺麗でございますから猥更多助が厭やで實に邪見にする事全一年、その間一つ寝もせず振付けられても多助は辛い所を忍びくく馬を曳て出ますが人に話も出来せんから泣きながら馬を曳て歩行くので世間の人泣き多助くくと諱名を致します位の事で、夫ですからおかめ母子は増長して多助を虐め出さうとするうち、丁度八月一日の事で

——好婦丹次多助を苦しむ——

ございます丹次父子が多助の宅へ参りましたゆへどうか多助を無いものとしやうと思
ひお龜は丹次に向ひ龜「私もマアこうやつてお前さんに何時も御無理な事を願ひ、貴
郎も御非番の時には度々来て下さいますがお役人様ゆるお泊りなさる事も出来ません
けれども、どうかして月に五六度はお泊め申度と思て居りますが世間の手前多助の前
もありまして思ふ様に参りませんが眞實に此頃は變に多助が悪らしく成て来ましたヨ
丹「斯うやつて父子で度々遊びに来るのは宜しいが多助も馬鹿でない男だから疾より
訝しいと考附いて居るだらうが来る度に厭な顔もしないで旦那様能くもつしやいま
したお母さん御馳走をして上げて下さいよと、へい／＼云て疊へ頭を擦り附けるやう
にされるので何んとなく来にく／＼つてノウウ丹三郎「毎度親父様も左様仰やつていら
つしやるのサ龜「ナアに貴郎彼奴だつて私の子ですから私の氣に入らなければ叩き出
しても宜のですがさうもいきませんから何んぞ仕様があつたらばと思つて居んですが
貴郎も能く心懸けて置いて下さい、と話しをして居る所へ奥からお榮が手紙を持って出
参りました龜「旦那様がお二人来ていらつしやるのに何をして居るんだヨマア此處へ

お座りよ榮「オヤ旦那様能くいらつしやいましたあのお母さん、多助さんが今朝帯を締める時に袂から之れが落ちましたよ、と手紙をお龜の前へ出し榮「分家のお作さんから多助さんの所へ寄越した色文で、マア馬鹿々々しい事が書いてあるノ龜「オヤマ



——好婦母娘孝子多助を苦しむ——

ア年頃になるとおかしなもんだねへ、多助がいゝとか何んとか云て惚れて居るさうだがマア旦那此文を御覧なさいよ、と云ふに丹次はどれ／＼と云ひながら其手紙を取り丹「成程幼少いうちから機織や糸繰ばかりさせて置いて手習等をさせんから手の書けないは無理もないが、俗に云ふ貧の盗みの戀の歌とやら妙だなア、鐵釘の折れの様にはホツ／＼書いたなア、エーなに／＼アハハ、これでは丸で附け文の様だと丹次が手紙を読みましす故、お龜はこれを好機會にして分家へ話しをればお分家の爺は堅いから多助を追ひ出すのは手間暇いらすだから斯ういふ都合にしませう彼云ふ都合にしませうと密々話しをして居る所へ、何にも知らず佛と云われる多助が歸つて参り勝手の方から上つて来て多「旦那さんお出なさいまし、此間は私等が留守の所へお出でがんとさうでんしたか何時もろくな物もあげましねへでお匆々べい致しやす、今日は又能くいらつしやいやんした丹「オ、多助か毎度来て厄介に成て氣の毒だ、外に馴染もないものだから夫ゆるゑに斯うやつて来るのだがお前も幼少い時から田舎者に成たけれど江戸生れだそうだが斯うやつて江戸子同志で寄集るとは誠に頼母しいものだ毎度種

々馳走に成て濟まない決して構て呉るなよ多「何にも上げる物はかんせんお母さんどうか旨い物を出して御馳走をして上げて下せへと云ひながら表へ響ると龜「出て往ちやアいけねへよ少し話があるから待ねへ、お前は眞實に呆れた奇い奴だよ此節は家へ寄り附かないと思つたら分家の娘お作と私通をして居る、多「へいなんですぬへ龜「とばけなさんナお作と一諸て居るだらうよ多「コリヤアママ驚愕たな、お母さん誰がそんな事を云やんした分家の娘と浮氣狂ひをした覺へはがんせん龜「ヤイ／＼何程口の先で不知を切ても書たものが證據だ、之れでも嘘だと云ふか之れを見たと彼手紙を多助の前へ投出を多助「手にとり多「コリヤアお作が已ん所へ寄越た手紙だが斯様ナ手紙があつたか困つた奴だナア、マアお母さん私が所へ此手紙を送たか知りませんが私覺へは御座りやせん、どうして尊母此手紙を持って居やんす榮「多助さんお前さんが今朝衣物を着換へる時袂から落ちたから私がお母さんにお目に掛けたのだがお前さんもあんまりだねへ私もこうやつてお前さんと夫婦には成て居るもの、今日までろくに口もきかないが其様なに私かきに入らなければお母さんに話を附けて貰て

離縁状を書いて下さいヨ 龜「お榮は私には只た一人の可愛い、娘其連れ添ふ夫に姪事をされては世間へ對して外聞が悪いから世間へ知れない内只今お榮に離縁状を書いて渡して遣つてお呉れヨ 多「お母さんどうぞ御免なすつて下せいまし、假令書いたものがあつても知りやせん私お作と姪事アした覺へは何處までもがんせん、又お榮に離縁状を出す事は出来やせん 丹「コレ、多助何もそんなに不知を切る事はない、此方には書いた物と云ふ確な證據があつて母が云ふのだ、又男の働きて一人や二人の女をこしらへるのは當然だから結契たら結契たと云ふ方が宜しいハナ 多「宜も悪いも私些とも覺へはがんせん 龜「書た物が何より證據だにお前が幾許知らないと云つても無益だヨ、これから分家へ往て話しをするから一所にお出、といはれて多助は當惑致し多「分家へ往つてコレハどうも困りやしたなア、叔父さんは物堅へからそんな事を聞せたら怒つて私い濟みませんで出へいりも出来なくなりやんすからどうか御勘辨を願へてい 龜「御勘辨だつて確かな證據があつて見れば仕様がな、さう云ふ了簡ならばお榮に添はせて置く譯にはいきませんと云て何時まで獨身でも置かれなから亭主を持

たせるから離縁状をお出しヨ、何故離縁状が書かないのだヨ 多「何故書ねへつたつて是れべいはどうあつても書やしねへ、死んだ親父様の遺言に我とおゑいとは従弟同志だから夫婦にしてやるが苟めにも喧嘩して夫婦別れをするやうな事があると草葉の影から勘當だぞと云々んしたから、私も大概な事があつても親父様にめんじて堪へて居て何一ついつた事はがんせん、私も我儘ものでがんすが家内で物争ひが出来てお榮を離縁してはどうも死んだ親父様のお位牌へ對して濟みやしねへからお榮に私が氣に入らねへで夫婦に成て居るのが厭やならば厭やて構いやんせんから、家内は切れても表向きだけは夫婦と言はなければ世間へ對し分家の叔父様に對して濟まないから、どうぞさうして下さい 龜「それ程義理を知て居ながら何故分家のお作と姪事をしたヨ、ぐすくして居てじれつていな、と言ひながら有合せた細い粗朶で多助の膝をビシイリくくと打ちますから多助は泣きながら 多「御免なすつて下せへましと言ふを耳にも掛けず、之れでも言はねへか、と二つ三つ續け打ちに打れて多助は心の中で情ないとは思ひながらもしほらしく 多「お母さんどうか堪忍しておくんなんしと下から出れば

附け上りお榮も共に暮り立て多助にくつて掛る所へ入つて来たのは、此家の分家の太左衛門で此様子を見兼ましたからツカ／＼とお龜の傍へ参り太「マア待たんしよ何んだ多助、マア／＼私が出来たから待てお呉なんし、ヤイ多助汝大へ形をして母様に折監されと云様な馬鹿な事が有るか、母様どういふ譯だか知んねへがマア待つて御呉なんなんし龜「おやお前さんがお出でなさうとは思ひませんでした、ほんの内情だけの事ですが餘り私も腹が立ちますから竟暴いことをしましたが、今お前さんの所へ往うかと思つて居る所へアノ御城内の原さんがいらつしやつて太「是れはへい毎度多助から承わつて居りやすが私は一ツ村方でも上下を隔て居りやすからいけに此家へ参りやせんから御挨拶も致しやせん何分御最負を願ひやすと、慇懃に兩手を付きますと丹「イヤ、とんだ間違ひでねへ手前も迷惑を致した太「何か知りやせん、届かん奴で意氣地なしでがんすからそれは阿母に打れるといふ馬鹿で：多助汝此處の家の相續人で汝が此家の心棒だ一軒の主たるものが假令どういふ悪い事が有つたつて母でも無闇に打れるといふ論はない理だ何を失錯た多「私悪でがんすから叔父さんお母さんに詫言し

て下せへお願でんすから太「ナニ悪事を仕たんだへ龜「ナニお前さんどうも人に話もできませんけれども言ませうが、實はお前さん處の作さんと多助と結契て居ますねえ太「ハテそれはどう言譯で龜「親の目つまを忍び逢引するが色事で有ますが、本家分家の間柄で横道た事をして居ますから私が嚴く云はなければ世間様へ濟ませんよ、是を見てくださいと言ひながら彼の手紙を太左衛門の前に置く太「ハイ成程己アお作が多助へ送た文だが、馬鹿なマア此間まで青鼻アくつ垂して柁の葉で笛を拵へて遊んで居のがハアこんな事を仕出かす様に成たかゝる、ナント馬鹿／＼しい事だかのお龜さん此手紙の文を讀と娘が多助に惚て手紙を送たか知ねへが多助が方でも知ねへに違へねへといふもの未だ結契たとも色事をしたとも文面に證據はねへのに、之を證據にして荒立て事を出かせば此處の家も己ア家も恥に成からこれは私に負てお呉なせへ龜「お氣の毒ですがまげられませんよ他の事とは違ひます、眞實に呆れた奴でございませす多助がさういふ根性だとお榮が可哀さうでございませすから今の中に切れ話にしてお榮に實のある堅い亭主を持たせる了簡ですから離縁狀を書いてわたした其上で多助をお作

さんのむこにする共どうとも勝手におしなさいよ 太「未だ色事を出かした譯でもねえのだから穩便に済ませれば世間へも知んねへから 龜「いけませんよ馬鹿くしい、餘りな不人情だからお前さんはやく離縁狀を書かせて下さいましよ、書かせて下さらなければ私もお榮と一所に出て往きますよ 太「おめへが何も出る譯はあんめへじやねへか、そんなら是程頼んでも勘辨は出来やせんか己ア娘は未だ亭主のあるものじやねへ處女でムいやす 龜「だつてお作さんは角右衛門どのの倅の圓次郎さんが養子に往く約束に成て居るじや有りませんか 太「約束は成て居りやすが未だ結納を取り交した譯でもなく唯ほんの口約束だけの事で婚姻をした譯ではがんせんからどういふ事が有ても奸夫と云ふ譯はあんめへ、又男の働きて一人や二人の女り出来ねへとも云はれねへ、それ處じやない立派な亭主持の身で有りながら奸通をするものが世間には澤山有りや、一昨日店で盆の餘り勘定をして居ると彼所では酒も賣り肴もあるもんだから若いお士が腰掛けて一杯遣て居る、其人の年頃はさうと廿二三で恰ど其處に入らつしやる 丹三郎様位の年恰好で、貴所に能く背て居るお方サ、すると姦婦が艶書の便を見守子

に頼んで手紙を其お士に渡すと、お士が惚れた女から寄越した手紙だから飛立つ様に喜んで其文を開いて讀んで仕舞ひ、丸めて袂へ入れた積りで出て往た跡を見ると其手紙が落ちて居たが之れは済まねい譯だと思ふが、此文の文面で見ると去年のマア八月あたりから姦通をしやアがつて今年になるまで結契いて居て其亭主が邪魔になるもんだから追出して仕舞てへと思ひ、科もねい者へ不義の名を附け様とするだ、太い亞魔じやねへかと云ひながら懷中より手紙を取出しナニく名前は丹三郎さま參るおゑいより、何んだ手を出さねへでもえよ、似た名も澤山事あるもんだおゑいより丹三郎さまと聞くよりおかめも願色變へ 龜「詰らない事をおしなさるなと云ながら太左衛門の持て居る紙手を取に掛る 太「手を出さなくつてもいよ、斯ういふ悪い事をする太い亞魔があるだが天命で此文を落し己が手に入るのな罰だ、併し之れも世間へ出せねへ文己ア娘の書いた此文も世間へ出せねへ文だから此三通とも一處にして居爐の中へ投焚て反古にすべいじやねへか、私に預けておくんなさい世間へ知れれば家に疵が附てお互の恥だと云てお龜は丹次父子と目と目を見合せおどくしながら 龜「お前さ

んが入て口を利て下さいましたからこれからは當人も謹みませうし、實にどうも捨て置かれませんか折檻しましたがそんなら此手紙はお前さんに預けますからどうでも好い様にして下さいまし太「それは有難いことだ、コレ多助よ去年の六月三十日汝へ親父が死ぬ時に枕元に己を呼んで云ふのに、お榮は多助と從弟同志なり今の母様は多助の爲めには實の叔母だ、一家に血統が寄集り此家を相續するだから鹽原の家に取ては此位な目出度事はあんめへから、多助がお榮と夫婦別れでもする様な事が有たら汝へ後見人に成てどうか鹽原の家に疵を附けねへ様に頼むと、死んだ親父の遺言をば此文の様子に反古にされてはだめだぞ、馬鹿野郎奴汝様な意氣地なしがあるかい、二十歳を越した男が母様に打れるとは情けないこんだ己ア家へ來う澤山小言云はなけりばなんねへ多「重々濟ましねへ事に成りましたどうぞ勘忍して下せへ、お母さん能く勘辨しておくんなすつて有難うがんす直ぐにお宅へ往て御意見を愛けます太「誠に皆様に御迷惑を掛けやした、左様ならと態と多助に荒々敷いひつゝ引立て太左衛門は歸りました、跡に丹治はお龜と顔見合はして太息つき龜「どうもねへお榮間拔でやないか、丹

三さんへ贈る手紙を無暗に守子杯に頼む奴があるものかいねへよ、さうして爺に拾はれ困た事をした、なんぼ年がいかないからといつて輕浮ばかりして居るよ、氣が利かないじやあないか多助が歸らないうち丹三さんをお寢かし申しなど、氣を利かして二人を次の間へ遣る、丹三お榮は屏風の中に入れて逢引を致します跡はお龜と丹治と差對ひ龜「あの爺は何んぞといふとツイノ云て多助の最負をするので、私はしみる多助が憎らしく成りました旦那貴所どうか多助の畜生を殺してください丹「殺してくださいと云て殺した跡をどうする積りだ龜「殺してさへ下されば誰だを知らない大方追刺でも殺したのだらうと云て濟ませます、當人さへ居なければ名主へ一寸話をして置ますから時が経たら丹三さんは病身でお屋敷奉公は出來ないと云ふ所からお榮の養子によこして下さい、さうすれば貴所は御城内に勤めていらしつても御隠居といふので表向きにチヨクノお出に成るに都合が好いじやございませんか丹「迂濶村方で殺害と百姓共に考付れるといかんから迂濶とは出來んノ龜「此五日には多助が元村へ小麥の俵を積んで往ますが、日暮方から遣ますから山國の事ゆゑ天氣の好のは當にならな

いから案油を掛けて往きない云て鹽原と大きく書いてあるのを掛けてやりませすから見違へる氣遣ひは有りませせん多助が馬を引て歸て來る時桐油を見當に庚申塚邊でむちやくちやに斬り殺してお屋敷に歸り知らん顔をして居て下されば此方では試し斬りにでも逢たとか何とか云て極りが付てから丹三さんをよこして下されば三百石持の主人それにも未だ少とは貯金もございます 丹「跡方の知る様な事が有てはならんヨ 龜「大丈夫でございませすと、云はれてそんならばと庚申塚に身を潜め多助の歸を待受て斬殺す了簡になりましたが、誠に不届な奴でございます、其日は丹治父子が歸り、扱五日に成りますと多助何にも知らず馬を引いて諸方を歩るいて夕方歸つて参りました 龜「アノ御苦勞だが追々秋ぐちは用が多いから直に小麥を積んで往て來てお呉な、又降るといけないから桐油を掛けていきな、アノ新しい方がいゝヨ、と云はれ多助はハイと云ひながら曳慣れた青といふ馬を曳て御城下の元村へ参りまする道は三里餘りで上下六里の道でございませすから、何程急いでも只今の十時當時の四ツ餘程過りました頃で、五日の宵月は木の間に傾き臙膝庚申塚までは三町計り手前の所まで参りますと、馬は自

然に主人の危難を悟つたものか足が進みませんで段々跡の方へ退ります故多「青、困るべいじやねへかヤイ青、荷を皆な下して仕舞て單身に成て、歩けねへ事はあんめへ遅く歸ると母様に叱られるから急いでくんよ、さう跡へ退ッちやア困るべいじやねへか、青々どうした青と言ひながら力を籠めて鼻綱を曳きませすけれども少しもききませせん、曳けば曳ほど、馬はだんく跡え退るから多助は涙ぐんで馬を引出さうと致しますが中々動きませせん、すると後の方から荷を擔で來る人の足音に只見れば幸右衛門の伴圓次郎と云て今年廿五歳になり多助とは極中好しの友達でございます 圓「其處に居るのは誰だ 多「圓次どんかへ、何にねへ己ア元村まで往た歸りだか己ア青が此處で急に動かなくなつて打ても叩いても跡いべい退がつて困るだ 圓「そりや困たナ己見てくれべいと云ひながら荷を卸し馬の傍に寄り 圓「コレ青やどうしたコレ跡へ退るが足でもどうか成てるか痛む氣遣はねへが、多助の母様は喧ましい人だから早く往てやれ、青どうした汝鹽梅でも悪いか、そんな事を云ても馬は何共申ませせん 圓「誠に困たナ己引いて呉れべいハイくく歩く様に成た 多「誠に有難がんす己手においねへ

からどう仕べいかと思つた、サ一處に参りますまいと往きにかゝると多「アレ又止たヨ
 再どうした 圓「今汝へ歩いたじやねへかどうしたと動かねへか、と圓次が引き出し圓「
 ハイくくくく歩いて来た多「誠に有難へ平常こんな事はねへどんな重い荷い附け
 ても悪い顔をする馬ではがんせんアレ又止た青々々 圓「青々々の、掛合でございます圓「
 どういふものだか己が引けば歩くだから己此馬を引いて往くべい、汝此荷を擔いで呉
 れ多「ハアさうして下せへ、そんなら此荷は己が擔いで往きますまいと、擔いで見ま
 したが多助は肩に力がありませんからよろめきながら擔ぎ出す、圓次は馬を引きなが
 らシヤンくくくくと庚申塚へ掛つて来る、此方は先刻より原丹次が刀の柄を
 握りつめ裏と表の目釘を濡して、今や遅しと待設けて居る所へ通り掛りまするといふ
 此の結尾は如何相成ますか次回までお預りに致しませう。

(七)

お龜多助の額を打割る

譬へにも禽獸といへど道有て理なきにあらすと云事がござ座まして、畜生が口を利く譯

はござ座いせんが人間の云ふ事は分るまいと思ふと分りますると見えて、此頃は何所
 様へ参りましたも洋犬が居りました、其洋犬がご主人の使を致し、或は賊を見て吠へ
 る所で見ますれば、他人と主人とは正と自然に其區別を知て居りますので、今多助
 が引慣れた青と云ふ名馬は南部の盛岡から出たもので大原村の九兵衛方より角右衛門
 が買取たのを、多助が十二歳の時より勞つて遣て居ますから庚申塚の前へ來ると馬は
 足が自然に前に進みませんのは丹次が待伏して居る事を知り跡の方へ退ります、圓
 次が引けば動き多助が引けば動きませんゆへ、圓次は右の青を引出し多助は御膳籠を
 擔ぎ急ぐ積りでござ座ますが、馬は足早にボカく、駆け出す様に行て仕まい庚申塚へ掛
 つた時は最早圓次の姿は見えなくなりましたゆへ、餘程後れた様子多助は重荷を擔いで
 居ります故七八町も後れましたから畑中を突切れば道が近いと云ふので荷を擔いで
 桑畑の間をセッセと参ります、此方は圓次が今庚申塚へ通り掛る、時は寶曆十一年八
 月五日、宵闇の薄暗く木の間隠れに閃く刃を引抜きて原丹次が待受る所へ通り掛る、
 青馬に大文字に鹽原と書きたる桐油を掛けて居りますゆゑ、多助に相違ないと心得、飛

出しぎまづツ、リと菅笠の上から糸絛を着て居る肩先へ斬り込まれ、アツトいひながら前へ俯倒る時手綱が切れましたたゆゑ馬は驚きバラ／＼と花野原を驅出し逃げて往く手負はうんとばかりに煩惱まはるを丹治は足を踏み掛けて刀を取相し喉元をブツリと刺し貫きこじられて其儘氣息は絶へました、丹治は死骸の衣服で刀の血を拭ひ鞘に納め急ぎ其場を立退き、多助の家の裏手から庭先へ忍び込みまして雨戸をホト／＼と五ツばかり叩くと、合圖と見へてお龜は丹治と心得そはつきながら密と雨戸を明けお龜「スツバリ殺してお呉なすつたかい 丹」手筈は充分だつたお龜「有り難うマア眞實に萬一失錯なやしないかとどんなに心配したか知れませんが、彼奴さへ殺してしまへば是からは自由ですから今夜はお泊り遊ばせな 丹」イヤイヤ泊る譯にはいかん直ぐ城内へ歸つて當分は來ないお龜「初七日でも濟んだら不慮事だつたとか何んとか云ひながら顔出しをなさらないと人がけどりますから七日でも濟んだら來てくださいいよ、氣を附けてお歸りなさいまし、丹次は其儘立歸る、左様な事とは少も知らず多助は荷をギシギシ擔いで圓次郎の家へ遣て參り 多」伯母さん明けておくんなさへヨ伯母さん 婆「アイ

誰だかへ 多「多助でがんす 婆」オヤマア今明けやす宵から締りを附けて置きやんすよ サアお入んなせへ 多「誠に御無沙汰をしやした月が替てから大く寒くなりやした、なにねへ元村まで小麥積んで往た返り庚申塚まで來ると馬が退つて動かねへで困て居る所へ、圓次どんが通り掛り圓次どんが見兼て引て呉れたら青が歩くから、己馬を引いてやんべいから汝荷擔いで歸れと云て圓次どんは先へ歸りやしたヨ 婆」圓次は未だ歸りやせんが寄り道でもして居るかも知んねへ 多「己より餘程先へ出た積りだヨ 婆」跡から歸るかも知んねへからマア茶一杯飲みなさんしよ、多助さん村の者が皆噂して居やすが母様が邪見でお前の様な温順な人を打ち敲きして折檻するとは情けない母様だそんなでも怨みもしねへで母様を大事にする那樣な温順な人はねへと噂をして居りやんすヨ、どうかマア輕躁な心を出さなければ好と心配して居りやんすから身體を大事にして時節を待つがようがんすヨ 多「ハイ有難うがんす伯母さん己あ阿母は我儘ものでがんすが私も亦遠慮なしに抗辯事をしやすからそんなで打ち敲かれやすのだから強ち阿母ばかり悪い譯ではがんせん、私しが届かねへから小言を云はれるのでどうか心配し

ておくんなさるナ 婆「其心強根が別だヨ能うがんすハイマア大事に多「伯父さんにも能く云ておくんなさへヨ、左様ならと圓次郎の家を出まして我家の門まで来ると生垣の榎木の所に青が屹然と立て居りました故 多「青どうした汝獨り茲に来て何んだ圓次はどうした家へ歸たか、と云ても馬が挨拶は致しませんか家來の様な心得がすると見へます、是れから馬を引いて小屋に繋ぎ自分は臺所口の上總戸を明けながら多「ハイ只今歸りましたと云ふ聲にお龜は驚き幽霊かと思ひ聲慄わしながら龜「どうしたんだへ多「誠に遅くなりましたどういふ事か宅の青が庚申塚邊まで来ると後へ退て少とも動ねへで困て居る處へ、圓次が通り掛り圓次が引くと青が歩くから圓次の荷を私が擔いで荷は今圓次の家へ届けて歸つて来ると青が表に立て居たから馬小屋へ引込んで大に遅くなりやした御免なさい龜「さうかへ道理で歸りが遅いと思たと、口には云へど腹の内で扱は丹次殿は多助と間違へて圓次郎を殺したに違ひない忌々しい事をしたと、思案に沈むは實に悪むべき奴でございます、幸右衛門の家では圓次郎が歸らぬと云ふので家の騒ぎは一方ならず、すると或る人の知らせに圓次郎は庚申塚の前に殘酷死状

をして居と云ふので、急に檢使を受け泣く／＼村方の寺院へ野邊の送りを濟ませました、多助は如何にも氣の毒に思ひ一處に来れば宜つたと幸右衛門夫婦に詫をするとな婦は諦めの能い人で是も定まる約束づくだらうから心配しておくんなさるなと事なく濟ましたが、多助は幼い内から親密の友達の事ゆゑ問さへあれば圓次の墓所へ参り墓掃除を致し香花を毎日手向て遣て居りました、丁度十日目の事で多助は墓參をして歸て参りますと龜「多助何處へ往たへ多「へエ圓次の墓參りに参りやした龜「さうか墓參りでもしてやらなければ冥利が悪いから度々してやんなヨ、圓次も成佛やしないナニ皆な定まる事だ因果と云ふものがあるだから心配しねへが宜いと云はれるだけ私は氣の毒で堪ましねへ龜「誰も居ないから話をするが圓次郎はお前が殺して荷を盗んで城下へでも賣らうと云ふ考へで遣たらうナ多「へエフツどうも驚愕やんしたなアお母さん他の事とは違ひやす私圓次を殺したと誰そんな事を云ひやんした龜「誰も云アしないが天知地知の道理皆な罰だお前の云事が皆間違て居から能考て見な、此間歸

た時何と云た、馬を私が引ば動かさず圓次郎が曳けば動く云たじやないか、引き慣れた馬をお前が引けば動かなくつて圓次郎が引いて歩くと云ふ様な間違た話があるものか、大方お前が圓次を殺して御膳籠に一杯ある荷を盗み人知す賣て仕舞て小遣にでも仕様と云ふ了簡で遣た所、露見するのを恐れ旨く拵へ事をして圓次どんの所へ荷を返へしただんらう、それを馬が動かさないなんぞとツウくしいお前の様な怖い人はない、人には云へないが仕舞には親の寢首も掻き兼ないヨ、今日といふ今日は實に呆れたから唯だ今出て往てお呉れ多「モシどうか御免なさつて下さい、他の事ならどんな事を仰つてもお母さんの云ふ事は例へ御無理が有りましてもお言葉に背くめいと云ふ願掛けて御座いますが、圓次を殺したとは情けない幼い時から同村で生長て殊に親密圓次を殺し物を取て城下へ賣る杯と何を證據にしてそんな事を云ひなさるかお情けねへ設合どんな事が有らうとも神かけて覚えば御座りやせんと、泣聲を振立て言ふにお龜は龜」とぼけなさんな分家のお作と通て居るものだから養子に行く約束のある圓次を邪魔にし、圓次さへなければ末永くお作と樂めるといふ了簡に違ひない、夫程氣にい

らないお榮を女房に持たして置くのは氣の毒だから、只だ今離縁狀を置いて出て往きな太「どうぞ御免なさい此家を出ては死んだ父様の御位牌に濟みません、お榮の氣に入らなければ私を亭主と思はねへでもようがなす、又母様も子と思はず奉公人だと思て臺所の隅へでも置てくだされば有り難うがなす、私は八歳の時から此家に貰はられて來て死んだ父様の丹誠で成長なりましたから是から恩返しをしなければならぬ身體今追出されては恩返しが出来やせんからどうか勘忍しておくんない龜「ならないよ出來ませんよ、離縁狀を書いて出て往きな、お前が出て往かねければ私が出る多「ア、申し親を出して子が残て居る譯には參りません、どうか御勘辨なすつて下さいと云て居る傍から榮「今お母さんが云ふ通りねへ、去年お父さんの遺言でお前さんと夫婦にはなりましたけれど女房らしくしておくれでないから夫程いやなものを無理に居ては御氣の毒で御座います、お作さんも圓次さんが死んで仕舞へば自由氣儘だから好いたお作さんと夫婦におなり、お前さんの様な人は怖つて厭だヨ、お願だから離縁狀を書いておくれ配偶て居るのはいやで御座います、直ぐ三行半を書いておくんない

黙つて居ては分りませんよ、サ、早く書ておくんなさいと、母子諸共慕し立て言はれ、流石に柔和の多助も餘りの事ゆへ面色を變へ居丈け高になり聲荒らげ多「だまれお榮お母さんは何にを言ても己決して言葉返しをした事はないが、汝まで同じ様に圓次を殺したのお作と譯があるのと覺へもねへ事を廉に取て離縁を取べいとすれば、親父さんの遺言を汝忘れたか、従弟同志で夫婦になれば家の治りもつくだから苟めに私の意恨を挿んで夫婦別れをする様な事があると草葉の蔭から勘當するぞと言はつしやつた事を忘れて己を突き出すべいとて夫婦らしくもねへと言のは、ソリヤア己が方で言ふ言葉だ汝の方で振付けて居るのじやないか龜「大ひそう亭主振た利た風な事を言な何の働が有つてそんな亭主振た事を言ふ、眞實に生利だヨ高慢な事を言な親不孝めといひながら傍へに有た粗朶を取り上げビシリと打たれる、はづみに多助はアツといひざま居爐の端へ倒れる處をお龜は腕を延ばし鬚を取て引すり倒しながら、續け打に打擲を致して居る處へ此家の奉公人忠義者の五八が見兼ねましたゆへ飛んで来て中へ割て入り五「御内儀さん呆れたものだ謂れもないに何に仕やす龜「多助の事といふと出

て來やがるヨ、お前の知た事じやねへ引込で居ナ五「己今聞いて居れば何んだとへ、多助さんが圓次を殺し荷を取て城下へ賣うとしたとへ、多助さんは人を殺す様な人か人でないか尊婦も大概分りさうなものだ、よしんば人を殺す様な悪黨でも尊婦の爲めには子じやアねへか、尊婦の血續の甥じやねへか、サそれをお前さまの口からいふてい事はねへこんた、何處迄も隠して陰になり陽になりして異見をしねへければならねへ處を親が先へ立て殺したんべい〜といふのがほんとうに呆れた、多助さん貴所が出れば此家は潰れやすヨ、私附いて居やすうちはどんな事が有ても出しやせん出るとさゝませんヨお内儀さん大概にしなせへ龜「多助の事と云ふと目くじら立て騒ぎやがる、己等の子を己等が勘當するのは當然だ手前の世話にはならないぞ五「ハイ私奉公人でがんす多助さんは此家な相續人だヨ、お前様より多助さんの方が先へ此家へ貰らはれて來は十四年跡の八月で、お前さまは其年の九月に來て其翌年先の内儀さんが死でからお前様を後妻にしべいと分家の旦那様と私が勧めたけれども、旦那様は堅固から餘り歳が違ふから村の者へ外聞が悪いと云ふのは多助さんには叔母さんの事だから女

房に持たがよかんべいと、其縁合で此家へお前様を入れた時何と云はつした有り難い
こんだ果報やけがすると云たじやねへか龜何にを云やアがる手前の厄介になるもの
か利た風な事を云ふな五利た風もないものだ、聲高に云ひ罵るから多助は多五
八は酷罰つて居りやして強情べい申しやすが皆な私が悪いでがんすからどうぞ勘忍し
ておくんない、五八マア此方へ出なヨ五どんな事が有たつても多助さんは出され
ません龜手前から先へ出て往け五私奉公人に違ひないが先の旦那様に抱へられた
で、己出れば此家は打潰れるから出まさんと、云ひ罵るを多助は無理に五八を引出し
傍の座敷に連れ來り多那様に母様に抗辯し事をしては宜くねへはな五でも貴所口
惜つてなりやんせん胸が一べいになりやすといふ譯は貴所の事を世間で泣き多助く
と云からどういふ事だと思て人の様子を聞いて見れば、母様が悪い顔べいして居て堪
へ兼ねるから外へ出ては貴所が泣きながら歩くといふ譯だ、三百石の田地持の旦那様が
母様の機嫌が悪く家に居られないから馬を曳て外へ出ると、貴所の新婦のお榮さんま
でが一處に成て貴所を突出すべいとすれば情けねへこんだから私云ふだけの事は云ひ

やんす、貴所が出れば原丹治親子が乗込むに違ひねへが屋敷者だから百姓業は出来や
すめへ、さうすれば此鹽原の家は打潰れるに相違ねへから多助さん辛かんべいが辛抱
して此家を出ては成りやせんヨ、私も共に貴所と一處に成てどんな辛へ事をしても家
の爲めに働きやすから我慢して居ておくんないヨ家大事でがんすヨ多あいよく
五八や能く家の爲めを思て心配して呉れる、原丹治親子の事も知らない譯ではないが
言ひ立でもすれば血で血を洗ふ様なもの、世間へ對して家の恥辱になる事だから今ま
では何にも言はず辛抱して堪れへに堪れへて居たけれども實に辛くて堪へ切れない
事が度々あるヨ察して呉れや五御尤もでがんす、私も命がけて貴所と一處にな
り働きやすからどうぞ詰らない心を出してくださいなよと、眞實の心から五八が慰め
居りますと馬小屋で青といふ馬がヒン／＼と嘶てバタ／＼と荒れる事一方ならぬ物音
に、五八は慌て驅出て往て見ると繋いである馬がバタ／＼騒いで居ますから、五八が
馬の口を取り鎮めて居る所へ入つて來ましたは原丹治で御座のやす、此れは丹治が圓
次を殺した時の顔を馬が見覺へて居たものと見へ怖がつてバタ／＼暴れたので丹治

も訝しく思ひながら奥へ入りお龜と差向ひで何か密々話しを致して居ます、多助は馬の驚いたのに心付き、ア先達て庚申塚で圓次を殺したのは丹次が私と間違たものに相違なる、之れは此處の家に居る時は殺されるかも知れない、若し命がなければどんなに思つても此の家の爲になる事も出来ない、八歳の時から住み馴れた村方を立退くのは辛い事ではあるけれども一先づ此處を逃げ去て知らぬ江戸とやらへ參てどんな辛い奉公でもして金を貯めたる立歸り、一旦破産れたる鹽原の家を起さなければ養父角右衛門様に義理が立たん、餘所ながら五八や叔父太左衛門様へお暇乞をしやうと覺悟を極めて、之れから沼田の下新田を立出るといふお話しに相成ります

(八)

多助名馬青に別る、

追々お話しが尖ばに相成ますから、これからが面白く成ますが、兎角開けぬ其昔のお物語は嘘のやうなお話しが多いといふのは、物成が極お安く、唯今では物價が高値で昔のお直段の事を唯今申すと嘘らしいやうな事があります、近頃まで湯錢が八銅髮結

錢が八銅寄席のお座料が四十八銅から五十六銅で御座いましたが、當節では四錢と相成ましたからお高いと心得て居りますと、中には又御愛顧の御方が仰やいますに、圓朝や寄席の坐料が如何にも安いそれでは國の恥になるから最少し高くしたら宜からう西洋へでも參ると調度我國の大道講釋のやうなもので座料の一圓や二圓は取るから、斯うやつて樂屋の者が大勢出て疊の敷いてある上へお客を座らせて僅か四錢位では餘り藝が拙いやうだからせめて一人前五圓宛も取たら宜からうと仰やいますが、それでは誰も寄席へお出になる方が御座いません、仕方がないから四錢と云ふ事に致して置きます、昔は蒲鉾が一本四十文で有たと申します、お直段のお安い話ばかり致しますやうで御座いますが下駄の鼻緒杯も昔は二足で三文で御座いました、それからこちらへ厄難のものを二足三文と申す事ださうです、馬も昔は南部の極長けた所で五兩位のもの、それが當今は馬流行で皆さんが乗ておあるきになります、時々横つ倒しに乗つていらつしやるお方がありました危い事で、當今の馬は何れも二三百圓も致しますから大きに模様が違て居ります事で御座います、鹽原多助の養父角右衛門の買ひました

馬は南部の盛岡の市で五兩五粒で買った良馬で御座います、多助は日々その青といふ馬を引て山坂を歩行いて居りましたが田舎では月待日待といふ事がありまして、十五夜廿三夜杯には村の若い者が皆遊びます、多助も廿一歳の若者ですから随分遊びたい盛りで御座います、人が遊ぶ中を重荷をつけて馬を引て數坂峠といふ山又た山を歩行いて居ります、家に居れば母親お龜に虐められましたして實に生傷の絶へることがない位の譯ですから家にとては居りませんで馬を引て歩行しながらも種々思ひ合して見たがどうも此の家に長く居る譯にはいかなない情けないかな母とお榮が馴合て丹次父子を引入れて會引するとは、實に犬畜生同様の致方殊に私を附け狙ふから丹次父子が此家へ出入る中は逆も居る譯にはいかなない、命があれば死んだ養父に恩返しも出来るが命がなくては恩返しも出来ないから、江戸とやら云ふ所はどう云ふ所か勝手は知らないが、先づ江戸へ出て苦い奉公なりとして金を貯めた上で國へ歸つて来て若し家が潰れて居たら建て直すより外に仕方がない、八歳の時から居慣れた沼田新田の村の模様も之れが見納めになる事かと心の中で嘆きながら豆を二俵附け青を引て分家の太左衛門の所

へ餘所ながら暇乞ひに参りました多「モシ叔父さんく、太「オ、多助か何所へ往くん、だ多「ハイ高平まで豆を附けて参りやす、太「オ、高平へ往くか、久しく來ねへから案じて居たが此間五八が來て家に間違ひのあつた事も聞て居たが汝のお袋のやうな悪人はねへ、能く勘辨して堪へて居るな、多「ハイそれもこれも死んだ親父様に恩返しをしていと思つて居るんで、親父様のお位牌へ對し鹽原の名前を汚すめいと思つて居りやんす、八歳の時から貰はれて來て育てられた恩は一通りでねへ、死んだ親父様ばかりでなく叔父様も私が幼少時から多助く、と云て可愛がつておくんさんとした御恩は死んでも忘やせんでハア、太「べらぼうな叔父甥と繋がる縁だ世話アするのは當然だ、汝は切にも切れねへ血統だから艱い事があつても辛抱して居てくれろヨ、よしや若い者だから又狭い心を出して遠い所へでも失走しつてしまやアしねへかと思つて心配でなんねへ、己も取る年なり婆アさんも年を取つて居るし子と云ふものはお作べいが、あんな厄難な者だから汝を力に思つて居るんだから汝へつまらねへ心を出して呉れるなヨ、多「ハイ叔父さん、人間は老少不定と言ふことがあるから若い者でも先へ逝ねへ

と堅い事も言はれねへ、私が高平まで行く途でどんな事があつて萬一歸らねへやうになり之れが叔父さんの顔の見納めになりはしめいかと思へば一里でも二里でも踏み出すのは實に辛へ事ですがんす、太「馬鹿ア云ふな今日は月待だから己が家へ泊つて高平へ往のは明日にしろヨ、多「又往ねへと阿母に叱られますから参りやすべい、叔父さんこれから段々寒くなりやすから身軀を大切にしておくんなんしヨ、太「そんな事を言つちア心細くなつて仕様がねへ、婆々や多助が高平まで往つて寄たから此處へ來うヨ、と言ふに婆々も出て参りまして、婆「ヨ、多助か能く來たナ、此の寒いのに往かねへでもいゝから泊つて往きなヨ、此間はお作が悪戯して氣の毒な事をした、家なア亞魔を小言言つて打擲たがしやうのねへ奴で勘忍してくんなヨ、多「ハイ、ハイ、往きますすべい叔父さん、叔母さん左様なら、太「それならどうでも往くか、多「ハイと言ひながら出ました、が之れが別れになる事かと悚々として往きます、叔父も多助の言ふ事が心に掛りますから戸口まで驅け出して來まして、太「多助、早く往つてこようヨ、と言われて多助も泣きながら、多「ハイ、ハイ、と言て出掛けましたが叔父の事も心に掛りますから心配し

ながら鎮守の森も之れが見納めか清右衛門どの家の棟も之れが見納めになる事かと見返りながら泣く、馬を引て高平まで参り、錢を二分と一貫受取り、沼田原まで來ると此の原中に物見の松といふ松の木があります、之れは戦争の時に物見をした松だと申事で御座います、頓て多助は其松の根方へ馬を繋ぎ吠を卸して秣を宛行つて澤山喰はせ虫の食はなむやうに糸經を懸けまして、二分と一貫の錢を持って居ますゆゑ大概のものなら逐電をするのだから路銀に持て行きますが、多助は正直者ゆゑ其錢を馬の荷鞍へ結び附けまして自分は懐にある私貯の六百の錢を持って行きに掛りましたが、日頃自分の引馴れて居る馬に名残を惜み馬の前面を二度ばかり撫で、多「これ青ヨ、汝とは長い馴染であつたナア、汝は大原村の九兵衛、梅どんが南部の盛岡の市から買て來たのを己の親父様に買はれて來たので、其時己も八歳であつたが鹽原の家へ養子に來る所で汝も己も一所に來るんで己は汝が脊中へ乗て此の沼田へ來て長い馴染、己が十二の時から引なれて斯うやつて長い間一つ所に居れば畜生でも兄弟も同じ事、汝ア壯健な馬で今まで内漏一つ起して噓一つした事のねへ馬だ、それに十六貫目の四斗俵を二俵附

るなら當りめへだがハア三俵となると汝へ疲れべいと思つて山坂を越へる時は己が一俵擔いでやるやうにするから身體も今まで頑丈であつて足い血溜り一つ出来た事はねへ、それに親父様が丹精して年に三度づゝ金焼に遣つて置いたから足も丈夫だ、俺が草を刈て来て喰はせる時も毒な草が入つて居ちやアいけねへからと思つて茅草ばかり拾つて喰はせるやうにしたから、汝も大い坂を越へる

にも艱い顔を一つした事はねへで家へ對して能く勤めたから段々年を取るから樂をさせてやるべいと思つて居たが、俺アどうあつても彼の家には居られねへ、汝知てる通り家の母様と妻アが了簡違へな奴で俺れを殺すべいとすだ、汝へ知てべい此間も庚申塚で俺を殺すべいと思つ



て間違へて圓次郎を殺した時は、汝も驅出したくらいだから俺が居べいと思つても殺されるからどうも居られねへわい、俺はこれから江戸へ往つて奉公をして金を貯めて歸つて来るから、汝へそれまで達者で居てくれるヨ、ヤア俺が出れば定めて五八も追ん出されべいが五八が出れば誰も汝に構ふ者がねへから汝にろくな食ひ物もあてがうめい汝へ可哀さうでなんねへから俺も出めいと思ふが俺が家に居れば殺されて仕舞ふに往くんだから、何卒汝は辛へ所も辛抱して居て俺が江戸で金を貯めて歸つて来るまで丈夫で居て呉れるヨ、ヤア、青く、と誠に我が兄弟が奉公人に物をいふ如くにいひ、閉かせながら馬の前面を撫で摩りまして多助は堪り兼て袖を絞つてオイ、泣きますと、多助の實意が馬に感じましたか馬も名残を惜む様子で首る垂れて宛も悲し



氣に泣き出しまして、其涙が雨の如くハラ／＼と砂原へ落ちまするのを見て多助は猶更悲しく多「ヤ、青汝泣て呉れるか有がてへ、畜生でさへも恩義を知り名残を惜むで泣て呉れるに、夫れに引換へ女房お榮は禽獸にも劣た奴、現在亭主の俺を殺すべいとする人非人め、コレ青俺が出れば原の父子が家へ乗込むで來るに違へねへ、さうすれば鹽原の家が潰れるに違へねへから汝辛かんべいが何卒俺の歸るまで家に辛抱して居て呉れるヨ、ヨウ／＼といひながら行きに掛りますと馬が多助の穿て居る草鞋の切れ目を踏み多助の袖を衝へてやるまいとするから多「ア、未だ留めるか、俺も別れたくはねへが居たくつても居られねへから其處を離して呉れるヨ、ヨ／＼と惜しき別れを無理に振切て、別れまして多助は泣きながらドン／＼と御城下まで一目散に三里ばかり驅けて參りまして、これからは山越しをするのですが何を云ふにも路用は僅た六百文、爰等は只今のやうに開けませんで白井八崎の難所を越へ漸くの事で岩上と云ふ所へ掛りますと白りつと夜が明けて來ました、此處には利根川の支流があり其河邊に松の木が五六本生へて居りました用水が流れて居り、只今では掛茶屋が出來て

此の用水が縣廳の御用水に成て居りますが、其頃は極淋しく水は岩間に突つてドゥー ドット流れます、松の木の側に青面金剛と云ふ石が建て居ります所に兩人連れの方が回し合羽を着て脚半草鞋で旅荷を側へ置いて燃火で頻りに煙草を喫んで居りますのを多助が見掛けまして多「少々物が承りたふ御座いやす男「なんだ／＼多「エ、前橋と云ふ所へはどう出たら宜がんです、前橋へ參りますにはどう參つて宜しう御座いやせう男「前橋へ往くなア此處を構はずツツと眞直ぐ往て突當て左り曲て又突當ると向ふに橋が見へる、夫れを渡ればじきだ多「ハイ有りがとう御座へます、お先へ參りやすと禮を云て往きに掛ります、と男「コレ／＼待て、手前は沼田の下新田の多助だなア多「ハア誰様でがんですか、と云ひますと彼の男は男「多助久し振りで逢つたなア、と云ひながら被つて居た笠を取たが多助は心付かず、只見ますと昨年鹽原の家へ強談に來た道連の小平に今一人は繼立の仁助と云ふ旅稼ぎの悪漢二人ですから多助は喫驚りしますと小「好所で逢た多「御免なすつて下さい小「去年手前の所へ強談つきに住て尖錯つたのでお袋も口惜しがつて居るから手前がお榮と慕參りに往た歸り道でお榮を

櫻はうと思つたら土が邪魔に入つて遂々それも遣り損なつて口惜くつて堪らねへ、サア手前は前橋へ買物に往くのなら三百石の田地持の大盡だから些たア金も持つてるだらう、身ぐるみ脱いで置いて往け多「ハイ買物に往くのじやがんしねへ、お榮も心得違へをしやんして私も家に居られねへでお袋に追出され、六百の錢を路銀にして江戸へ往て奉公する身の上でがんすから衣物も一枚でも取られちやア困りやすから御勘辨成つて下せへまし小「嘘をつけユ三百石の田地持が六百ばかりの端した金で江戸へ行ふ筈はねへ、サアぐすくすると打ツ斬るぞ仁助縛ちまへ仁「哥々があゝいひ出しちやア肯かねへから早く裸躰になつて置いて行きナ、出さねへで七顛八倒すると殺してしまふぞ泣顔するねへ、と云ひながら閃リツと長いのを引こ抜いてズブリツと草原へ突き立てますと多「どうかお願ひでがんすから命だけは助けて下さい、殺されて仕まつちやア私義理ある家へ恩返しをする事が出来やせん、私はこれから江戸へ出て辛抱して國へ歸つて鹽原の家へ恩返しをしなければ死んだ親父様に對して濟みましねへから御勘辨なすつて下せへましと泣きながら掌を合せて拜みますと小「ヤイ縁起が悪い

や、神か佛じやアあるめいし拜みやアがんなといひながら、草鞋穿の足を舉げて多助が兩掌を合せて拜んで居る手と胸の間へ足を入れてドウと蹴倒しまして顛覆る所を土足で踏かけ一方の手に抜刀を持って小「出さなければ殺すぞと云ふので、多助は實に危い場合に相成りましたが、何んと斯る善人が家では母親や女房に附て狙われますのを漸く通れて參る道で又惡漢の爲めに捕まつて斯る危い目に逢ひまするのは神も佛もないものか實に不便至極な譯で御座います、之れより多助の身の上如何相成りますか次回までお預りに致しませう

(九)

多助昌平橋より投身せんとす

引續きまする人情話しは兎角お退屈勝ちの事で御座いまして、草雙紙でも芝居でも善人あり悪人あり善人が悪人の爲めに困苦を致し後に善人榮えて悪人亡び、失ひました寶が出て可愛同志が夫婦に成ると云ふ、是れがどの跋でも同じやうで御座います、善惡二つあるかと云ふと一つだと仰います方がありますが、其一つは何んだと云ふと

無形のものでとんと形がない、善の魂が悪くなるのは何う云ふ譯だと伺つて見ますと或るお物識のお講釋に先づ早く云へば月に雲の掛るやうなもので、これなどは圓朝にも解りますから成程と云ふて感じまして聞きましたが、唯人が何も思はずに居ります時の心は爽たる月のやうなもので誠に清らかで清々として居る所、煩惱の雲が掛り心の月を曇らせますと申すは向ふでヒラ／＼と青い札を勘定して居ると、ア、大層札を保持て居るなと思へば慾張た雲が出て来て心の月にかゝりますと聞くなり、ア、慾いものだと思ふばかりならいゝが何かして彼奴を殺して奪りたいと思はへボツリ／＼と雨が降て来て眞闇になり、又氣が附てア、悪い事をした斯様な事は弗ツリと思うまいと思へば煩惱の雲がスツツと切れますと光々とした月になります、又向ふに駒下駄の音がして赤縮緬の襦袢が見へると助倍の雲が出て来る、彼れは何物だらう阿嬢様か處女か彼れを口説いて見やうか口説いても肯かないといけなから何處か淋しい所で押顛がしてやらうかと思へば夕立ちでガラ／＼と雷になる、ア、悪い事をした止しませうと氣が付けば元のやうな良月夜になる、又向の鰻ぎ屋でバタ／＼と鰻を焼

く音がすると、ア、彼れを食ひたいものだと思ふと意地の穢ない雲が出て来るそれを氣が付けば元のやうになるが其雲の掛らんやうにするには智恵といふ風でなければなりません、雲が掛つて来た時ドッコイと智恵といふ風で吹き散らして仕舞ふやうにしなければいけません『浮雲を拂ひ出たる秋風を松に残して月を見るかな』といふ歌があります、これは左様な事に讀んだ歌ではない月の事に就いて詠みました歌で御座います、雲を風で吹拂た跡は松が枝に渡る風の聲のみで光々明々として月を見て居る心になれば年中間違ひはなきものゆへ悟れば善になり迷へば悪になるもので、迷へば可愛子を棄て夫を棄てるやうに相成ますと、申すは前申上ました通りお龜の心得違ひといふものは戀といふ煩惱の雲がかゝり、心の闇に迷ひまして一地りの間違ひではない原丹次と密通を致し現在の娘を教唆して己れが密夫の伴丹三郎と密通させ、夫のみならず孝子多助を殺さうとする罪は實に悪むべきものでござります、多助も家に居れば命が危い、命があれば又鹽原の家を建て直す時もあると思ひ、住馴れた家を立出で助ました、家では多助が翌日になつても歸つて来ないからお龜の了簡では彼奴は江戸へ

でも往つたか遠い所へでも往たか大方家の辛い所を思て首でも縊てしまつたのであらうと多助の死ぬのを待て居りますと、奉公人の忠義な五八は多助が歸つて来ませんかから心配して探してきましたたが居りません、すると沼田原の松並木に青といふ馬が繫いであると聞きましたから五八は直に行て見ましたが、ハテ解らんと思ふのは馬の荷鞍に二分と一貫の錢と馬通ひの帳面があるから變に思ひ、多助が他國へでも行ならば此錢を持って行く筈だがこれへ縛り付けて行くからは身でも投げたか但しは雑穴山へでも入て首でも縊つて死んだかと思つて山川を探したが判りませんので、お龜は心の中で嬉しいが外面では五八に云付けて何處へ往たか探して御覽と案じる振で探させても判りませんので、お龜も内々安心して居りました、すると九月三日に五八が餘所から歸つて来まして臺所の事をして居ると龜の五八や爰へ來なヨ 五「お神さんなんでもがんです龜此處へ來な、アノ其處に膳があるからそれを拭いて置てくんな、今日は家にお客があるから而して水を汲たり何かしてお呉れ 五「何處から御客が來やんする龜「何處からお客が來るつてお前の知ての通り多助は此家の主人だのに家出をして行衛も知

れず、お榮と兩人で此身代を持って居られないからどんな者でもお婿を貰はうと思つて居ると、お前の知て居る御城内の原さんの御子息丹三郎さんは病身でお屋敷の御奉公は出來ないから百姓か町人の家へ養子に遣りたいと云ふので、名主からの口入れて相談も整ひ今日は婚禮をするので原さんと名主幸右衛門さんとが來るんだヨ、御士様が百姓の家へ養子に來るのだから勝手が知れぬいからお前も氣を付けてあげな、あの方か此家へお出になるとお前も仕合だぞ 五「へい何ですか、お榮さんの處へ婿が來やすか、コリヤア變だなア、お榮さんには多助さんと云ふ亭主のある身で又亭主を貰ふと云ふが、そんなら女と云ふものは亭主を兩人持てもいゝかね龜「何を云ふのだ多助の行衛が知れぬからお榮に婿を貰ふんだヨ 五「多助さんの行衛が知れぬへと云ふて多助さんは先月出たべいで死んだか生きて居るか判らぬいにお榮さんに婿を取るとは餘り義理を知らぬいじやねいか、假令人が婿を世話アしても一周忌でも濟だら貰ふべいと云て斷はるのがほんとうだに、四十九日も経たぬいのに家へ婿を取とはひでいじやがませんか、多助さんも此家を出たくはねいが居られないから出たんだから又了簡を

取直して歸つて来るかも知れぬのに婿を取て濟みやすかへ龜「彼いふ事を云つて
ヨ、渠が歸つて来ても構はないヨ、親を棄て出るやうな奴だから最う構ひません、私
は娘に婿を取らして樂をし様と云ふ譯ではないが多助が居なければ婿をもらふのは當
然だアネ 五「駄目でがんと婚禮はなりやしぬい 龜「能く考へて見なさいお前が何も知
ている譯はぬいヨ 五「それでも多助さんが死んだか生きてるか知れぬのに婿を取
るといふのは情ぬいこんだ、コレ多助さんは三百石持ちの旦那様だのに家にいれば小
言べい云れるので外へ出て泣々歩くから村の者べいじやアぬい他村の者にまで泣き多
助と名を附られるのもお前さまが宜くぬいからだ、多助さんは現在貴婦の甥じやアぬ
いか、それをいびり出してむこを取といふ法がありやすかへ、私 何しても取らせぬ
い 龜「彼云ふ事を云やアがる主人が勝手にするんだ黙っている愚頭くいふなら出て往
きナ 榮「奉公人の癖に阿母さんに逆ふなら出て往きナ 五「出ぬへや出ませんヨ、私ア
先の旦那様に長く御奉公をして西も東も分らぬいものが旦那様の丹精で今では馬通い
もつけられるやうに成た恩があるから出られぬい、多助さんがいなければ此家は儼ほ

危ぬいヨ、マア貴婦考へて見なせい、御城内の者が百姓の家へ養子に来て何月の幾
日に何の種を蒔けば何月の幾日に芽をふくといふ事を知りアしぬい、其様な者を婿に
取れば此家は潰れるから駄目だ 龜「主人が云ふだから出て往けつたら出て往け 五「駄
目だ、己れ往て相談して来る所があるといひ捨て、分家の太左衛門の所へ往きました
五「旦那様内か 太「オ、五八か此方へ入れ 五「旦那様は私ア家の何に當るか 太「馬鹿
野郎め幾年奉公をしてゐる、その位の事が知れぬいといふ法があるもんか、死んだ角
右衛門の甥といへば我れ獨りしかねへ 五「それじやア私ア家の分家だ太「さうヨ 五「其
分家が私ア家へ婿の来るのを知んねへで居るかへ 太「フウン誰へ婿が来るのだ 五「そ
れだから駄目だ、多助さんが出たから宜氣に成つてお榮さん婿を取ると云ふのだが何
んと呆れ切て物が云へぬへ、彼の佛のやうな多助さんを追出し姦通事をして居た丹三
郎を婿に取ると云ふので我に膳をふけと言ふから誰へ来ると聞たら婿が来ると言アが
るし、其合手は城内の原丹次の伴が婿に来ると云ふから私い魂消た貴所蒲團の上によ
つ座つて居る時じやアあんぬい、往て掛合つておくんなせい 太「何んとマア太い亞魔

じやアねいか、何時婿が来ると五「今夜来やんす太」掛合てやるべいと五「往て下さいな」とマア名主が媒人だつて、名主まで馴合ていやアがるんだもの太「コレ婆ア脇差を出せ婆」よすが宜よ又五八がそんな事を言なければいゝのに、相手は士で名主が媒人だと言ふから間違へが出来るといけねへから往かねいがようがんすよ太「黙て居ろ、羽織を出せと言ふので襟巾が三寸五分ある小紋の白ばつくれたやうな羽織を着ましたが前から見ると帯廣裸体で居るやうな姿をして五八と一所に憤り切て出掛けて往きます、此方は今内祝言の盃を取らうとする所へ太左衛門が物をも言はずに上つて来て祝言の座敷へドツサリと座つて、之れから談判を致しますと言ふお話しに成ます鳥渡一息つきまして

○孝子哀薄命一起死

鹽原多助は實に孝子で御座いますが、人には不幸といふものがあり又始めの内に極結構な身の上で老年に至りて艱難するもの、または始めに艱難辛苦をして後に安樂な身の上となるものがあります、これは佛説に言ふ因縁で御座いましてこればかりは何

いふ事か解りません、間が好と好事ばかりで間が悪いと悪い事はかりあるもので、運のいゝ方は頼んだかと思へば札を拾ひ川へ落ちてガバ／＼して居ると金側時計を拾ふやうな事があり、又間が悪いと途中で小便が出たくなつてア、何所かに便所があれば好いと思ふと幸ひ三疋立ちの雪隠があるから入らうとすると皆な咳拂ひをして塞がつて居たり、横濱へ往くの汽車に乗ふと思つて大急ぎで人力車で停車場へ駆け付ける汽車がビイと出て往てしまつたり、天氣が好と思つて合羽を脱いで外へ出れば雨が降て来たり、藝者を買へばブツ／＼と憤てばかり居たり、總て充分にいかんもので御座います、多助のやうな好人は神も佛も附添て居るかと思ふと前回に申上たやうな難澁な目に遭ひ、自分が率馴れた馬に別れを告げて漸く岩上村へ掛りますと、胡麻の灰道連の小平と仁助に會て土足に掛けられ抜刀を附つけて、サア金を出さなければ殺すぞと云ふので多助は青くなり、掌を合せ何卒免しておくんさい裸體にでも何にでもなるからと云ふのを耳にもかけず小「仁助剣いでしまへと云ふので、多助の衣服を剝ぎますと、着て居るのは袍太布子でバツタリと落ちたのは六百文 仁「哥々眞實に六百

しかねへせ 小「手前眞實に六百しかねへのか縁起が悪るい夜が明けてしまふ起ろく」と云はれ多助は裸體で小平を拜みますと 小「縁起が悪い奴だと云ひながら今多助が起き上らうとする所を土足で胸を蹴たから後ろへ逆さま利根の枝川の流れへドブウンと落ちまして、多助は流されましたが川が浅いから漸くの事で這上つて來ますと兩人の者は居りません、着物はなし六百文の錢は差が切れ彼方此方へ散亂致して居りますのを拾ひ集めて漸く四百幾文五百に足りない錢をこれでも命の綱と思ひ都部濡れになつて前橋の手前まで來ると、少し日があたつて來ました、旭のさすのに裸體でも歩けないから宿の取付に古着商がありますから百五十文を出して襦袢を一枚買つて帶がないから繩を締め餘る錢で木錢宿へ泊り、四日路掛つて漸く江戸表へ着きました、其頃は只今と違つて路が難澁で御座いまして、殊に多助は江戸の勝手を知りません、何處と云て便る所がないが江戸と云ふ所は圭庵と云ふものがあつて奉公人の世話をすることうだがそれには受人がなければいけませんと思ひ、風と考へ付たのは十四年前に別れた實父鹽原角右衛門様は阿部伊豫守様の御家來であつたのが浪人して後ち戸田様の家來

になつて居るとの事ゆる、尋ねて往て頼んだら受人位にはなつて呉れるだらう、實の阿母様や親父様はお達者でお出でなさるか、下新田へ養子に往てから便りもしないが何なすつたか逢ひたい事と思つて、筋違橋の戸田様の前へ來て通用門へ掛ればいゝに知りませんから表門へかゝりお役人の居る所へズタ／＼の姿をして參りまして 多「ハイ御免なさい 役「何處へ參るのだ物貰ひならあちらへ行け」 多「ハイ少々物が 承りとう御座います 役「物が聞たければお辻へ往け何んだ乞食みたやうな姿をして 多「これから乞食になればなるんだが未だ乞食にはなんねへ、アノ戸田様の御屋敷は此所でごんすかへ 役「戸田様の屋敷は此方だ 多「それでは十四年前に此方へ抱へられた鹽原角右衛門と云ふ方がありやんすか 役「ナニ鹽原カイあれは十三年前にお國詰めに成て此お屋敷には居らん 多「お國は野州の宇都宮でがんすか 役「前は宇都宮であつたが松平主殿頭殿とお國換へになつて今では肥前の島原だ 多「へイ肥前の島原と云ふ所は遠がんすか 役「さうサ島原までは三百一里半あるナ、と云はれて多助は叱驚致し、ハアと云ひながら思はず知らず此處へ泣き倒れました 役「コレ／＼彼方へ參れ／＼

多「ハイ、腹ア減らして遣ひ残しが二十八文、宇都宮なら食はずにでも往くが三百里あつちやア仕様がねへ役「グヅ、云ふな彼方へ行き多「ハイ、参りやす、と言ながら出掛けました頼みの綱も切れ果てこれから、先きは飢餓で死ぬより外に仕様がないと覺悟を極め、何か知れないやうに淵川へでも身を投て死なうと思つて日の暮れるまで彼方此方を迂路、歩いて駿河臺の織田姫稻荷の所へ参ますと最う腹が減て歩けません、其内に雨がボツウリ、と降て参りますから駿河臺を下りて昌平橋へ掛りました、此昌平橋は只今は御成道の通りへ架つて居りますが其頃は萬世橋の西に在りましたので、多助は山出しで御座いますから頓と勝手が知れませんが多「死ぬべいが此川は國の川と違つて底が見えねへから深いと見へる、此處から飛込むべいか彼處から飛込むべいか、何處から飛込んだらつん流されべい、死ぬには入らねい二十八文此處へ上せて置けば乞食か何か拾つて往くべいから此處へ上せて置くべいと、正直に橋の欄干へ遣ひ残しの錢を載せて多「ハイ、國で信心して居た榛名様や鎮守様八幡様もお情ねいが私が死と國の養ひ親の家が潰れやす、假令家が潰れても私が生きて居れば建

て直すことが出来るが江戸で奉公するには肝心な受人になる人が三百里先きへ往てしまひ受人がなければ奉公は出来ずと云て國へ歸れば抜刀で追驅けられて殺されてしまいやすから據なく爰から飛込んで死にやすが、何卒私がねい後は國の家が立ちますやうお守りなすつて下さいまし、南無阿彌陀佛、と掌を合せてアハヤ身を躍らして飛込うとする後ろから、これ待なさいと多助を抱き留めました此者は善か悪か次回に申し上げます。

(一〇)

名馬孝子多助の仇を討つ

お話し替つて鹽原の家では今お榮と丹三郎と婚禮の壽盃をしやうといふ所へ分家の太左衛門が参りまして太「其壽盃を少し待つて下さいといはれて龜「どうしてお前さん來ましたと大きに驚きました太「ハイ、驚いたかも知んねへが私ら驚いた、何ふ云譯でお榮が所へむこが來か私も分家で居て其譯を立んねいと云事わねいから何ふ云譯で婿を取りやすかそれを承はり度ハイ、龜「實はお知らせ申たいと思つて居りましたがこれ

が表向きの祝儀と云ふ譯ではなし、一旦極りを付けてからお話しをしやうと思つて居りましたがむこを取と申譯は先月多助が出てから女世帯ですからどうかむこを取たいと思つて居りますと、此處においでの方三さんは御病身でお屋敷奉公は出来ないと思ふ所から、お上へ願て御開濟になり名主様のお口入れが有りました年輪もよしお榮は江戸表からの知己でもあり丁度宜しいからお武家様から百姓の家へ養子に来て下さるのには有難い事で誠に斯様な身に取て有難い事はありませんから取極めました、實は貴所の所へお話ししたいと思つて居りましたが、誠に急な事になりましたしてほんの内祝言をして後で貴所の處へお話ししやうと思つて居りましたが、今丁度貴所がお出でなすつて下さつたからどうかこれへお坐りなすつて下さい太「ハイそれを承はりたいもんだ、お榮には多助と云ふ亭主のあるのに何云譯で婿を取りやすへ龜「多助く」と仰やいますすが彼は親を捨て家を出るやうな奴ですから假令歸つて來ても私の血統だけに世間様へ對して入れられませんからお榮に婿を取るのには當然です太「是やア承りてい、此鹽原の家の相續人は多助と定つて居やんすといふのは、去年六月晦日の晩に死

んだ角右衛門殿の枕元に貴所も多助もお榮も五八も私も居たが角右衛門殿が臨終の際に何にも云ふ事はねいが己ア家の相續人は多助と定めて居る、此度は我ア死病と定めて居るから一言云はねいければならねいと云ふものは多助にも嫁を取らなければならぬ、就ちやアお榮は多助の爲めには從弟なりお龜の爲めには多助は甥なりするからお榮を多助の嫁にして此家を相續させれば此位安心な事はねいが助多は未だ年がいかねへによつて太左衛門俺へ此家の後見に成て我が亡え後を頼むと遺言をして私が媒酌に成て病人の枕元で壽盃をしやんした、其遺言にある通り多助は一軒の主人だからそりやア随分南部の盛岡の方に馬のいゝのが有たとか又山の賣物に安いのもあれば買ひに往きてへが急ぐんで家へ知らせる間もなく直ぐに往つて來たと云て明日が日歸へつて來るかも知んねいから若しも多助が歸つて來て私無沙汰で何んでお榮に婿を貰へやさんしたと我れに云はれた時は我れ一言半句でも申譯がねいそれだから私の眼の黒いうちは何うしても此祝言をさせる事は出來ねい龜「お前さんは何んぞといふと多助く」と仰やるが何故そんなら一軒の主人が親や女房を捨て出て往て仕舞ひました

サアお前さんは多助を最負にするから若し歸つて來たらばお作さんの婿にでも何にでもおしなさい、私はどうしても彼様な者は家へ入れません 太「其事柄が極た上では婿を取るなら取るもいゝが極らねいうちは取せぬい我ア分家だにハイ龜「祝言と云ても内々だけの婚禮で村へしらした譯でも何んでもありませんはナ 太「假令内祝言でも我ア分家だから内輪だが内輪の我に知らせぬいといふ法はあんめいと、頻りに争つて居りますと土間の方から五八が 五「旦那様確り遣つてお呉んなせいで、村中が付いて居やすから確りやつてお呉んなせいと怒鳴りますし、太左衛門の申のは實に理の當然ゆゑお龜も困つてめりますと、其頃は名主といふと威張たもので幸左衛門と云ふ名主様が 幸「太左衛門「太「これやア飛んだ迷惑な所へお出でなすつて嘸お困りでがんせうが今申した通りの譯だから何うか此度の所は原さんの所は引取つてお呉んなせいやし 幸「コレ今聞いて居れば汝へ分家だと言つて此婚禮を拒む譯はあんめい、と言ふ譯は此村方は誰の支配を受ける、土岐様の御支配で其御家來の子息さんが此家の婿に成つて呉れるだから此上もぬい仕合せ、殊に外の者が媒酌をするのと違つて此名主が媒酌

をするのだから禮の一言も言はなければならぬのに、何いふ譯で汝ア拒むな 太「ハイ拒みやすナ、貴所名主様なら何故私しが處へ話しをしやんせん、此家には私より外に親類はありやんしぬい、小前の者が違つたことをすれば論してやるのが名主様の役だのに其名主様ともあるものが親類へ話をしぬいで濟みやすかへハイ 幸「それはどうもハア至極最もの様だ成程どうも尤もだが、只今も言通りこれが表向の祝言でぬいから知らせぬいので表向の祝言ならば親類や何かへも知らせ壇那寺まで届けるんだが表向でぬいから知らせぬいのでハイ 太「それじやア私は内輪の者じやぬいへかへハイ 幸「内輪の者には違へぬいけども只今も申す通りどうも其御領主様のどうもそのと名主も辭に支へて仕様がありません、何んと云ても理の當然ですから名主も返す辭がなく困つて居ると、原丹治が見かねましたからそれへ出て太左衛門より少し座を下つて座りまして 丹「太左衛門殿私もとんと心附かなかつた、お前の方にはお話しがあつた事と心得名主様も御繁多でもあり殊に小前といへば子の様に思つて居る所からお前の方へは跡で話しをする積りであつたかも知れぬ、お龜がお話しをせんと云ふのは重

々悪いが彼は女の事で其邊に心附ず、實に男譚がないお前の言ふのは理の當然だが此婚禮が破談に成ては何も知らないお榮や丹三郎が可愛さうだ、お前が承知さへして呉れば實に此上もない目出度事だからどうか勘辨してやつてくれ此通り丹治が首を下げてお詫を致す太「これは恐入やす、マア頭をお上げなさい、至極御尤もな譯でがんすが又御城中のお士が百姓に手をついてお詫をする譯はねいが道に背くからお詫言をなさるんで、道に背いた事はどうしても通せねい、貴所がなんと言ても亡つた角右衛門の前に對して此婚禮は出来ねへ、又何も知らねいお榮や丹三郎が不便だと仰やれば些申たい事がある、お榮や丹三郎さんが何にも知らねいと譯はがんしねへと言ふものは、先達で店で拾た文がありやす、私も焼て仕まふべいと思つたが取てありやすからこれを表向にすれば貴所の御役にも係はるから何にも云はずに歸つて下せい、と云はれた時は原父子は嘆驚してそれでは先達の艶書を太左衛門が疾に焼捨てた事と心得て居たが取てあつたか、ア、困つたものだと思つて居ると丹三郎は血氣の壯者ですから心がはやつて此奴が居るから可愛お榮と夫婦になれないと思つて側にあつた一刀をズ

ツと抜いて突然太左衛門に斬付けますと、其頃は人切り庖丁に驚いたもので太左衛門はこれを見ると驚き外へ逃げ出さうとして椽側から轉がり落ちて慌て、厩の方へ逃げると五八は鋤を提げて五「サア旦那様を殺せば汝を殺すぞ多助さんの代りに我が汝を打ち殺すだ、と勢ひ烈しく抗ひましたから丹三はこれに臆して後へ遡ると、お榮は嫁入姿の儘で驅出し可愛丹三さんに怪我をさせてはならないと思ひ突然に五八の頭髪を取て後ろへ引き倒さうとする所を前から丹三郎が五八の面部へ切り付けましたから、五「ア、我を切りやアがつたなと云ふ、丹三郎が尙ほ切らうとすると太左衛門は厩の方へ逃げて來ましたが向ふは厩西の方は灰小屋此方は生垣で路がありませんから慌て、前の方の大豆や小豆などが干してある所へ來て薙に躓いて倒れる所を丹三郎が長刃を揮上げ一刀に太左衛門を切らうとする、太左衛門はどうしても通れる道はありませんが妙なもので厩に繋いである青といふ馬は多助が家を出る時沼田原の松の木へ繋いで因果を含めた所多助の云ふ言に感じて泣たと云ふくらゐの名馬でありますから、今ま太左衛門が丹三郎の一刀の下に殺されやうとする有様を見るとボーイと厩から躍出

しました、田舎では厩の前にマセと云ふ丸太があります、其マセを馬が鼻先で反ね除けて外へ躍出して突然後足を揚げて丹三郎を蹴ましたから丹三郎は其處へ倒れますと馬が丹三郎の肩へ噛付きましたから丹三郎は宛も苦しげにヒイと泣聲をあげ七顛八倒の苦しみを致します、これを見て居たお榮は驚いてアレーと云ひながら逃出しますと馬は尙更暴れてお榮を追駈けて背後からお榮の鬚を噛て後ろへ引倒して花嫁の美しくう濃てりとお粉粧をした顔を馬がモリ／＼と噛みましたからこれは全く馬が多助の讐を討たやうなもので御座います、此間に太左衛門と五八は表の店へ往て來合せて居た若衆にこれ／＼の譯だと話しをすると、平帯悪まれて居る名主だから名主も原も打殺してしまへと云ふので是から百姓五六十人が得物／＼を持って鹽原の家を取圍むと云ふお話しに相成ります。扱又た鹽原多助は進退茲に谷まり己むことを得ず今や昌平橋から身を投げやうとする所を背後から抱き留められ多「誰様かは知りませんが何卒放してお呉んなせい生て居られねへ深い義理にからまる身の上、何卒放して死なして下さい」コレサそれだがの、今聞いて居れば遠い國から出て來て奉公をするのに受人が

ねへから死んでしまふと云ふのだらう、死ねば義理ある家が建てられねいとか云つたナ多「ハイさうでがんす」「死んで家が建てられなければ死ぬにやア及ばねへじやアないか多「それでも斯やつて居れば腹が減て死んでしまひやすからどうか放なして死なせて下さい」「ダガサア其受人がなくつて奉公に置いてくれる人が出來れば宜のだらう、多「ハイ／＼こんな乞食のやうな者を奉公に置いて呉れてはがんせん」「我の家で奉公に置いてやらうが斯様な斷末場に成ると死ぬ氣にもなるもんだが人間と云ふものは少し熱氣が脱ると苦しい事を忘れてしまふものだからお前が死んだ積りに成て働けば置いてやろうヨ 太「ハイお前さん何處から出た、私ア死ぬ苦みをして働く事は何んとも思ひやせん有難がんす、どうか置いておくんせへヨ」「ダガノウ此心を忘れてはいけないヨ、死ぬ時は了簡の出るものだが少し過ぎれば忘れるものだから、お前が死ぬ氣に成て辛棒さへすれば國へ歸る時は小遣位は持たしてやるから私しと一所に來なさいと連立て参ります、此人は神田佐久間町河岸に居る山口善右衛門と云ふ炭間屋で家は八間間口で土藏も幾箇かあり奉公人も多く使つて居ります 善「今歸つたヨといふと奉公人が皆

な出て参つてへいお歸り遊せくくく奉大層お歸りがお遅からお迎に出やうと思つて居ました、コレく夜まで乞食が入て来て困ナ善乞食じやないそれは私が連て来た人だ、マア此方へお入り多へい御免なせい善コレくお前其繩の帯だけ取なさい、其處の番手桶に水が汲であるから足を洗つて雑巾は手桶に掛つて在るから、ナニ湯布がないサア出てもいゝやナに湯布も賣てしまつた、此方へ上がんナどうか若衆此人を家の奉公人にする積りだから世話アしてやつてくんナ、國から出て来て使る所がないと云て今昌平橋から身を投げやうとする所を助けて来たのだ幸へいそれは御奇特の事で御座います多皆な此處に居るのは番頭さんでがんすか、私ア遠い山國から出て来て使る所もねへから今身を投げべいと思つた所を此方の旦那様に助けられましたものでがんす、どうか目を掛けて下さい、又貴所は番頭さんだから斯様な者を置ちや爲めにならねいから追出してしまつた方がいゝなんて旦那に意地を附けねいで下さいヨ善そんな事を云はないでも宜しひ、質朴で宜しいなアどうだ腹が減たらうナニ昨日から食ない、コレ小僧臺所へ連れて往てお飯を食して遣キヨトくしては不宣

ヨ、今日は御先代の日なり誠に好事をした番誠によい御奇特を被成升た善今の男はどうか辛棒をして義理ある家を建度と云誠に好心掛の奴だから何か皆が目を掛けて遣て呉れ物に成そうだ、コレく飯を喫て来たか多食ひ過ぎて座われねい萬一追出された時三百里往けねいと困るから善何にか食べたか小何も喫べません何をやつてももつたいないくと云て何も喫べません、鹽物をやつたがそれも喫べませんお香物を嘗つて御膳を喫べて一番仕舞に香物をガツくと食べました善そうか妙な男だなア、オイく善太郎此處へ來な、これは今私が助けて来た人だ何と云つたつけないア助けて来たから多助か、多助やこれは家の伴だから又いろく用を云付けるから多へイ若旦那様でがんすかハア、今夜は貴所の父様に助けられやしたどうか御目をかけておくんなんしよ、貴所の着て居るのは和けへ着物でがんす善家の伴は和けへ着物でなければ着ないのさ、なアにこれは不斷着で結城紬だ多へいこれが結城紬でがんすか、結城紬と云ふものは糸を一々手で燃て夫れを高機でかるく打付けて置くのではねへ、女供が力まかせにキイツと締めて織んだから容易に出来るもんぢやアねへ、それ

らを不斷に着るのほうつていねへじやがんせんか、これから貴所と兩人で一生懸命に成て稼いで此家を大きくしねばならねへ、貴所も親孝行をして此家を大切に思ふたら不斷は木綿を着るがようがんすヨ、而して旦那さんあれじやア奉公人のお菜が多うがんすヨ、何でも奉公人のお香は二度はいらねいから一度になせいまし杯と、一々主人の前で申ますから主人は妙な言を云ふ奴だと思つて居ります、多助は善右衛門を命の親と心得有り難く思ひ寝ても醒めても恩義の程を忘れず萬事に氣を利かして骨身を惜まず一生懸命にくるくると働き、子に臥し寅に起るの誠めの通り子と云へば前の九ツで寅は七ツ時で御座いますから寝る間も何にも有りはしません、朝は未明うちから起きて先づ店の前を竹箒で掃き犬の糞などがあつても穢いとも思はず取除けて川へ投げ捨て掃除をしてしまふと臺所のお婢どんが起きて釜の下を焚き附けると多助は水瓶へ水を汲み込んで遣り、其うち店の者が漸く起きて臺所へ顔を洗ひに来ると一々手水盥へ水を汲んで遣り店の土間を掃いて居る中に店の者が御飯を喰べてしまつてから自分が食事を致し、それから直ぐ納屋へ往て炭を擔いで奥藏の脇の納屋に積み込む、何や

かや少しの隙もなく働きますゆゑ主人は素より店の者まで皆な感心致して居ります、多助は餘程希體な着物を着て働らいて居りますゆゑ善右衛門が「善、多助く、多、ハイ、善、お前は其な襤褸の垂つたものを着て居てはいかないヨ、勇次郎の着物の古いのを遣てあるのに何故着ないのう、多、ハイ、難有がんすけれどもとうに着ればハア破れやんすから矢張り此古襦袢の方が惜氣がなくつて却て働きやうがんす、善、働き宜つたつて餘り見ともない、夫れに蹴足で歩行くのは廢せヨ、草履を穿きな若し踏抜きでもして三日も四日も休むやうではいかんヨ、多、踏抜きはしやせん、踏抜きをしねへやうに朝未明うちに貝殻や小さい砂利だの瀬戸物の碎片があると堀取て置き清潔に掃きやんすから平垣に成て居りやす、善、それでも餘り見つともない蹴足で納屋から往たり來たりするから人様が見て山口屋の奉公人は何んだあんな形をなせて置いて乞食を見た様な形だと云はれては外聞が悪いはナ、多、旦那様そんじやア人が聞いたら彼は奉公人じやない乞食が幾百度を踏でゐるのだと云ひなせへ、善、そんな言が云へるものか何か着物にはねいかへ、多、旦那様此間柳原を通ると大い古着屋の家に一枚買ひてへと思つた着物

が有りやしたら、價聞いたら六百だと云ひやんしたが五百五十文位には負けべいと思ひやすがねへ買てもようがんすかネ善田舎漢だと思つて馬鹿にして賸物でも賣られへはいかないせ多「ナニ私い悉皆檢めやんした、事に依たら縫目を綻ひて裏返して見べいか善」それが氣に入て着られるなら買て来るが宜いと、錢を持たして遣りますと多助は急いで柳原へ参り彼の古着を買取て直に着て歸て参りましたを善右衛門が見て善「フ、妙な鹽梅だのう和平どん見なさい紋付の筒袖は始めてだのう妙なものだなア和へー異風ですな、アハ、ハ、ア私も紋付の筒袖は始めて見ました善撰に撰て轡の紋付を買て來たのは何いふ譯だ薩摩様の御紋所のやうだなア多助何かそれがお前の家の定紋か多「そうじやア有りやせん旦那様聞いておくんなせい、國を出る時に沼田の原中の一本松へ長い間引慣れた青と云ふ馬を繋いで名残が惜いから暇乞をしながら馬の前面を撫て我へ江戸へ行き奉公して歸て來るまで達者で居て呉んると私泣きやんして其馬を撫てたり摩たりしやすと、馬も別れを惜んで泣きやんした、私も馬の泣たのを初めて見やんしにが大い眼から涙を砂原にバラ〜と落しやんした時には私泣

には實に辛くつて私い袖びつしよりにしやしたが、夫から江戸へ出ても尋る人には逢へす外に知るべも無つて請人になりてもないから奉公する事も出来ねへで一層身い投げべいとする所を旦那様に助けられ今では雨にも風にも當らねへで暖けへお飯を喰ちや斯やつて何に不足なく居りやんすが、人は樂になると直に難儀した事を忘れるもんですから私其難儀を忘れねへ爲めに見當つた此轡の紋で少し我儘な根性が起た時には此紋を見て馬に別れた時の辛い事を思ひ出してそれを思へばなんでもねへとお手本になりやんすから買て來やしたハイ〜善成程〜感心どうも感心和平どん特別だのう和「誠に感心な事ですなア妙に異つて居りますヨ善「マア〜精出して働け多「へい〜有難がんとす隙間なく身を粉に碎き忠義に働きますゆゑ出入りの者も自然多助を可愛がるものばかりで御座います斯くて其年も果て翌年の丁度九月頃には多助も大きに用向きに慣れて参りましたゆゑ善「多助や〜助「ハイ善「お前のう未だ給金を極めなかつたが能く働いて呉れるから給金を極やうのう多「ハイ旦那様私い給金は戴きましねへ善「戴かんではいかんから給金だけは極めて呉れなければ困るヨ多「そ

れだけはどうしてもいきまじねへ善「極めた給金を蓄めて國へ歸る時の資本にして國の家を建てるのじやアないかへ多「デモ命を助けて呉れた旦那様の爲めに働くのは當然だのにお給金を戴いては濟みまじねへ善「それじや困るのう多「そんなら旦那様私一ツお願ひが有りやすだ、其處等に落しる廢物を拾ひ貯めてそれを賣り二文でも三文でも旦那様へ預けるから安い利で宜いが私い國へ歸るまで預つてお貰ひ申してい、善「拾ひ貯めると云て何を拾ふのだ多「何てへ事なしに癩にするものは煙草の粉でも草履草鞋の不用つて皆なが棄るのには細切れでも紙屑でも何でもハア貯て置て賣りやす善「そんな物を買人が有るか多「何でもハア廢りにはなんねへもので釘かけでも拾ひやすそれを賣て金を蓄めやす善「餘り拾いたがうて若し店へ來たお客が落した煙管や煙草入などを拾てはいけねへせ多「そんな事はしやしません、何でもハア人の不用なつて棄る物べい拾ふので番頭さんはそんな根性が些とべい有りやすねへ、根性が無くちやそんな事は云はないもんだ、自分の心に有ると人もさうかと思ふものだが私のは皆が不用なつて川へ打投る物べい拾ひ集めて蓄めるんでがやす善「何處へ蓄

めて置くのだ多「裏彼の屋根が破れて物がはいらすにあるから板を載せて置きやしたか裏の大きな納屋が明いて居りやすして別に物を納れない様でがやすが、旦那様彼處を安い店賃でお貸なすつて下せぬまし善「お前に貸すのに店賃も何もいらん多「そんなら屹度彼の納屋へ物を一杯詰めても大丈夫でがやすか、其代りお給金なしで働きや善「感心な事だ其志が面白い貸して遣りますが些と方々の御得意や御屋敷を教へて置かなければいかんが戸田様のお邸へ多助を遣うかノウ番頭「番「それが宜しう御座います善「多助や多「へい善「其處に四俵大俵が有るだらうそれを向ふの戸田能登守様のお屋敷へ持て往て呉んな、御通用門から入つて鎌田市作様のお宅へ届けるのだ、知れなければ御用で聞きなと請取書を持たせて遣りました、多助は路草を喰はずギシ／＼擔いで参り戸田様の御門に懸りまして多「ヒエ御免なせい門「なんだ／＼多「炭屋善右衛門の所から参りやしたが此お屋敷の御家來に鎌の一日と云ふ人がありやすか門「なんだフ、鎌田市作様か多「そんな能知てる門「何だけしからん奴だ、それは御用を入つて板塀に附いて眞直に行くとお馬場の所に出るから夫へ附いて曲ると裏

手に四軒お長家があるが二軒目のお宅だ。多「有難がんと又ギシシ」と擔いで教へられた通り参ますと鎌田市作と云ふ標札がありましたゆゑ多「御免なさい妻」なんだのう多「炭屋善右衛門から炭を持って参りやした士」そうか大きに御苦勞幾俵持て来たへ多「四俵持て参りやした士」そんなら二俵は此處に置いて跡の二俵は一軒隔てお隣の御宅まで持て往ておくれ、未だお荷物も片付くまいが手前方から左様申したと二俵持て往てくれ多「ハイ一軒隔てお隣かねようがんとすが代を貰ひていもんでがんと士」跡でやるヨ多「でもマア斯やつて請取に成て居りやんとすが代を貰ひていもんでがんと士」跡でませう士「跡で一處に遣るヨ多」それでも炭取てしめへに代をよこさねへで跡で炭取た覺はねえと云はれても私は田舎漢で仕様がねへ、主人が大事だから代をよこさねいじやア困るマアよこせ士「よこせとは何だ、訝しな奴だそんなら持て往けと代を投げ出すを多助は受取は懐中に入れ、そんなら此二俵一軒隔てお隣へ持て往きますべいと其處へ擔いでまゐり多「御免なせい」妻「どうれ誰だ多」へい私は炭屋の奉公人でがんとすがアノ一軒隔てお隣の鎌田市作様の處から炭二俵持て來やした妻「炭屋の男が

大きに御苦勞だのう多「我ら家の炭は宜い代物べい選んで安く賣りやんとすが炭を買ふなら得だから我らア方でべいお買ひなんしよ、他で買ては駄目でがんとすヨ妻「アイヨ他では取らないヨ此處へ置ては邪魔になるから開きが明いて居るから其處へ入れてお呉れそんなら多「此戸袋の下へ納れて置きやす、犬が小便をかけるると焚いて臭いから戸を建掛けて置きやんと、云ひながら椽側の方を見ますと旅荷物に縛り附けて御座います荷札に鹽原角右衛門と筆太に書いてありますゆゑ多助は氣が注ぎまして思はずヅカ／＼椽側の方へ参りました。

(一一一)

實父角右衛門多助を追ひ拂ふ

多助は戸田様のお屋敷へ炭を持て参り歸らうとして不圖目に付た荷札に實父の姓名があるに思わす椽の方へ驅より多「今出たお神さん妻」可笑い男だヨお神さん／＼と云て何だヨ、と云ひながら庭口の椽側の障子を明けて出て來ましたのは年頃四十五六の人物の宜い御新造で不斷着ゆる袖位ではありますすが御屋敷は堅いので紋付を着て居ま

す妻「何か用があるのかへ多」此處に荷物が有りやんして木札に鹽原角右衛門と書てあるが此お方は肥前の島原へお國詰に成て往た方では御座りやせんか妻「能く知て居のう、當家は鹽原と云ふヨ多」それでは此處な家はあの元阿部様の御家來で有たが敷浪人して上州小川村に居て又此處なお屋敷の御家來に成た方で貴婦は鹽原角右衛門様の御内室のおせいさんと云ひやんすか妻「アイ其通りだがどうして知てお出だと、云はれ多助は飛立つばかりに嬉しく思ひ泣聲を振り立て多」お母さまと云ひながら我を忘れておせいの裳にピツタリと絶つて多」お懐しふがんしたお母さま八歳の時にお別れ申た貴婦の實の子の多助でがんすヨ清「オヤマアどうもマア思ひ掛けないコレ多助、見る影もないそんな姿になつてと云ひながら同じく泣き出しました多」是には種々深い譯ががんしての事でどうかお父様やお母様にお目に掛りていと心掛けて居りやんして信心をしたお陰でマアお達者な御顔が見られやんしたと云ふ聲を聞き付け、奥より角右衛門が出て參り物をも云はす御新造の手を取て奥へ引入れ椽側の隔の障子をバツタリと建切て仕舞ましたから多助は呆然として多」お母様〜今此處へ出てお母

さんの手を持って引張り込だ人は誰だへ、お母若様しやお父様では御座りやせんかへお母様〜お父様か〜角「黙れ苟にも殿様の御側近く勤をする鹽原角右衛門炭屋の下男に知己は持んわい、成程今を距る事十五六年以前阿部家を出て上州東口の小川村に八ヶ年程浪人して居た其折沼田の下新田に鹽原角右衛門と申する百姓が居り私と同じ名前の好みを以て乳のない所から倅の多助を育て、呉れろと頼まれたゆゑ餘儀なく引受け之れなる清の乳を吞まして八歳までは養育したが、最う八歳にもなつたら歸して呉れろとの頼みに依り早速親許へ引渡した時に、其方の實父角右衛門より長らく倅が御厄介になり禮の仕方がないからと云つて聊かでは有るがと五十金を禮として呉れたればこそ拙者は其五十金を持って身支度を整へ借財を拂つて江戸表へ出て參り御當家へ御抱へになり只今では御側近くを勤め三百石頂戴致して居るも沼田下新田の角右衛門殿の恩義ではないか、拙者も其恩義を知らんではないが御當家へ御抱へになると間もなくお國詰を仰付けられ、萬里の波濤を隔て、居れば都度〜書面も送らんが、又なまじいに便を致せば其多助と云ふものが八歳まで育てられた事ゆる却て此方

を實の親と心得違ひを致し、實父角右衛門殿に不孝な事でも有はせぬかと存じて態と心あつて便りを致さずに居た、併し十四ヶ年振りて江戸表へ出て参り餘り懐しいから先達て國へ書面を送りし所、角右衛門殿の分家太左衛門より返事が参り、披て見と角右衛門様は一昨年没し後目相續を致す多助と申すものは昨年家出を致し跡方は焼失して鹽原角右衛門の家は絶たと云ふ返事に大に驚き、其返事の如くなれば多助と申す奴は人でなしと只今も申し居る所であるが、若や其多助と申す者は八歳まで養育されたゆゑ我を實の親と心得て江戸表へ参りズウ／＼しく來るとも對面は國の角右衛門殿の位牌へ對しても相成うと心得おるか、ソリヤア若いうちの事ゆゑ女に溺れるとか或は酒食に其身を果し路頭に迷ひ見る影もない姿となり迂路／＼致しては居らうかと朝夕共に此清と心配致して居たがどうも何共云ひ様なき不孝不義の奴、家督人たる者が親の家を捨て、國を立去るとは重々の不届奴め、假令此處へ参ればとて面會致す様な角右衛門と心得居るか、目通りはならんから早々出て往け 清誠に御立腹の段は重々御尤ともさまで御座います、多助お前心得違ひをしたらう、若い内には随分有りうちの

事とは申しながらお前より外に鹽原の家を續ぐ可きものはない其大事な家を捨て若氣の至りとは云ひながら女に溺れて金子を遣ひ果し家に居られなく成て家出をしたのだらうが、何んとマア淺ましい心におなりだ、今から十五年跡にお前を沼田の下新田へ遣てからと云ふものは暑いに附け寒いにつけ旦那様も私もお前の事を忘れた事はありませんヨ、痲瘡はしたなれど知らぬ田舎へ行て我儘を云て叱られやしないか、又田舎の事だから手習や學問も碌々出来まいだらうしどうして居るかと毎日お前の噂ばかりして居ましたが、そんな姿で來たとて親父様は中々物堅い御氣性だからお逢ひに成る氣遣ひはないから辛棒をして國へ歸り立派に鹽原の家を相續して出て來れば其時は御逢ひになるかも知れないが、只今の身の上で逢ふと云ふのは無理な話し、そんな見苦しい姿で迂路／＼して炭などを擔いでお父様お母さまと云われた譯ではあるまい、田舎育ちとは云へ餘り分別がないではないか、又お詫びの出來る時節もあらうから早く往きなさい 多「ハイ／＼私い中々女杯に溺れて金を遣つて國を出た譯ではがんせん、私

が思ひ直して、イヤ／＼養母やお榮の事を汗澗に御兩親の御耳に入たならお龜はお阿様には實の妹、又女房お榮は實の姪、此母子の悪事を聞かれたら物堅お父親様やお母さまが嘸お驚き遊ばし御心配なさるだらう、云わずに居ても跡で事の分の時もあらうからなまなか御心配を掛るより寧ろ何にも云わずに歸へらうと、佛の様な心の多助は何にも云ふまいと思ひまして多御尤もでがんすが種々深い譯が有ることではがんで御聞かせ申ていが云ふに云はれぬ譯が有て云ひやんせんが跡で事は分りやせう、私國に出ねへば命に係る事が在て據なく出たゞ、出れば跡で家の潰れる事は知て居るが命い取られては家を立てる事も出来ねへから、私が江戸へ出て奉公して金を貯め國へ歸つて家を興さうと思つて江戸へ来る事は来たが便るものががんしねへで、去年の八月廿日此お屋敷へ尋ねて来てお父様やお母様はお達者で居るかとお門で聞て見れば御國詰めに成たとの事で、お國は宇都宮だつたのが御國替に成て肥前の島原で三百里も前だと云はれ、頼みの綱も切れ果て、路頭に迷ふ身の上となり仕方がねへから昌平橋から身い投げべいとすする所を、助けて呉れたは今の主人山口屋善右衛門様深切に世話

をして請人なしで奉公人に使つて呉れやんしたから、私い山口屋で十年でも二十年でも死んだ氣になつて稼ぎ金を拵へ國へ歸つて鹽原の家を建て居る心でがんすからどうぞ心配なすつておくんなさるな角黙れ、それ程まで恩義を知て居るものが國の家を捨てゝ出るかへ、恩義を辨へて居るなれば町人でも士でも同じ事だから今の主人善右衛門と申す者は命を助けて呉れた恩人、殊に主人であるから身を捨て奉公をし忠義に勤めあげ手前が金子を拵へ國へ歸り、一旦絶へた親の家を相續し親より勝て立派に家を建てろヨ、身を立て道を行なひ名を後世に場けて父母を顯はすぐらいのことは八歳のをり寝物語に度々申聞けてあるではないか、手前も武士の伴イヤナニ假令百姓の子でも其位の事は辨へて居るだらう早く歸れ清逆も逢ひはないから、お歸りヨ多ハイ歸りますヨ、八歳の時にお別れ申ましたから親父様やお母様のお顔を碌に知んなかつたがお母様には今始めてお目に掛りましたからお母様の顔は斯う云ふ顔で斯う云ふお姿だと云ふ事は覺へやしたが、親父様のお顔は知りやしねへからお顔だけ見せておくんなせい、左様すれば親父様が表をお通りなさる時は顔を眺めてア、お達者で戸田様

に奉公していらつしやるかと思へば假令言葉は交せねへでも心丈夫に奉公が出来やんすから、どうぞお顔を見せておくんないやア親父様、ナニ殿様どうぞお願ひでがんですからお母様、ナニ御新造様どうぞ旦那様へ取次でお顔を見せておくんないや、ヨウ御新造様と我れを忘れて椽側に這ひ上て男泣に泣倒れるを障子の内で聞く鹽原角右衛門も堪へ兼ね、親子の情合思はず膝へハラ／＼と涙を落しましたか流石に武家魂は漳たもの屹と思ひ返して聲を荒らげ角「黙れ、早く往かぬか何時までも兎や斯ふ無禮の言を申すか、苟めにも殿様のお側近くを勤むる身の上で炭屋の下男に知己は持たん、遅々して居ると障子越に槍玉に揚るぞ多「ハイ／＼参りやす突殺されては仕様がねへ、有難親心たなア、自分だつて逢ひたくもあんべいけれども義理堅いお人だから一旦人に呉れたもんだから己ア子じやねへと云て向ふの子と思はせべいとすのだ、己だつて實の子だか虚の子だか知てるが堅いから槍で突殺すと云ひやんしたから是から槍で突殺された氣に成り死身に成て奉公しやんすから、どうぞ心配しねへで下せいハイ段々お寒くなりやんすからお體を大事にしてください、私い立派になるまでお達者

で居おくんなさいヨ、左様ならとオイ／＼泣ながら御門へ遣て來ると御門が殿から門「コレ／＼炭屋の男多「へー門「どうした泣顔して御門切手を戴いて來た多「何もねへ門「コレ／＼と云ふ間に無間に表へ出て漸く家へ歸て來か主「ハイ大きに御苦勞だつた、戸田様は七萬八千石だけ有てお立派だろう多「アノ屋敷は私生涯往くのは厭でがんです、戸田様だけは駄目だ、槍で突殺すと云はれやんした主「それは大方嘲弄たのだろう多「嘲弄されたのではありやしねへ、眞實でがんですがねへ、其槍で突殺すといふ心根が有難もんでがんですねへ、旦那様槍で脇腹を、刺れる心持は一通りでは有やすめへが、始終槍で突れて居る氣で働けばどんな苦しい奉公でも出來やうかと思ひやすから、旦那様始終私が脇腹を槍で突てると思つてユギ使つて下せい主「何の事だか分らないヨ「誠に感心だと、多助は實父の志の深さを有難心得ましたから、これより多助は命掛けで山口屋へ奉公してをります中に、一つの經濟を考へ出して金を貯める工夫をするお話は此次に申上ます。

扱て御話は二つに別れまして、沼田の鹽原の家では其騒動は一方ならず、馬が荒れ出して丹三郎を噛み殺しました時には名主幸右衛門原丹治もお龜も途方にくれて周章まはりました、是れは何も馬が多助の讐を取たと云ふ譯では御座いません、馬は鼻の先へ閃めく刃物の光りに驚いて躍ね出し、お榮を引伏し丹三郎を噛み殺す様な譯になるも天の悪しき自然に馬が斯様な事を致す様な事に成りましたもので御座います、丹治は我が可愛い作を噛み殺されましたから憤怒で庭へ飛び下り、馬の脇腹へ刀を突込んでこじりましたゆゑ流石に猛き大馬も其場へバツタリと横仆しになる上へ乗しかゝり力に任せてギューと無闇に刮りましたから馬は其儘悲しい聲をあげて息は絶ました、其中にワイ／＼と人聲が致しますゆゑ丹治も觀念いたして丹「お龜もう迎も此家に足を留めて居る譯にはいかん、殊に證據の艶書を太左衛門が持て逃げ出したから必ず役所へ訴へ出るに違ひない、さうする時は迎も斯うしては居れないから我も身を匿さなければならぬ、龜」そんなら旦那お邪魔でせうが私も御一處に連れて往つて下さいまし、丹「兎も角も早く逃げる支度をしろと云ひましたが差當り二人の死骸の遣り場があ

りません所から右の死骸を藁小屋へ突込みまして、それから有合した着替への衣類に百五六十兩の金を引き出して逃げる支度をして居る中に、門前には百姓が一杯黒山の様に群り寄り大聲を揚げて口々に名主も原父子も此處へ出る打殺して仕舞／＼と罵り立られ、丹治お龜は表へ出る譯にいかない所から一計を案じ彼の藁小屋へ火を放しました藁の事ゆゑ忽ち焼へ移り屋根裏へ抜けたのは母屋へ移り、焔々とばかりに燃へ出した時には火事なれぬお百姓衆の事ゆゑ大に驚きまして、丹治の逃げるを追ひ掛ける了簡もなく火を消す方へのみかゝりワイ／＼騒いで居うちに、丹治お龜の兩人は生垣を破り逃げ出しました、名主も逃げ場を失ひ漸くの事で生垣を破つて逃出さうとすると、平常小前の者に憎まれて居りますから、百姓衆は手に／＼鋤鍬を執り名主を殺せ／＼と云のでとう／＼無茶苦茶に殺して仕舞ました、此事早も御領主様へ聞きましたから太左衛門罷出て立派な申開きが相立ち、原丹治父子の悪業お龜の不屈の次第が分りましたが鹽原の家は焼失致し夫れなりに濟みまして、太左衛門は鹽原角右衛門の位牌を引取り線香の煙の絶へん様に致しました、此方はお龜丹治はお榮と丹三郎

の死骸を藁屋に匿し火葬に致しましたが茅屋ゆる忽ちに燃へ廣がり母屋へ移つり残らず類焼する、此間切れに丹治はお龜の手を取て須川へ出てそれより大戸村へ出てそれより岩本村へ掛り蛇平へ出る、これは上州吾妻郡の四萬の山口と申す所へ抜けて參る間道で、狐人か袖でなければ通らん路で御座いますが、兩人は身の上が怖いから山中を怖いとも思はない足弱を連れて漸くのこと山口へ參りました、彼の邊へいらつしやつた方は御案内で御座いますが温泉場で大久保先生が分析遊ばされた所が上州第一等の温泉であると云ふ事で、今二人は田村と申す家へ宿を取り身隠れをして居る内に九月の末からチラ／＼と雪が降りました、此邊は翌年の三月あたりでなくては雪が解けず、其間は往來が出来ませんから幸ひの匿れ場所として居る内に因果がお龜が懷妊致しました、三十九歳に成て子を設けると云ふは物の因果で、原丹治も困たがマア／＼金を澤山盗んで來たから充分贅澤をして田村の家に厄介に成て居りますと、翌年九月廿九日に産み落しましたは男の子で名を四萬太郎と附けましたが、お龜は産後の肥立が悪く漸々のこと十一月になりますと、先づ體も治まりましたから、斯ん

な山の中に何時までも居られる譯のものではない、それにお尋ねの風聞も大抵抜けた様子だから古郷忘じ難きの譬で二人一處に江戸へ往きどんな暮しでもしやうじやないか懐に金も有る事だからこれから、二人連立て十一月の五日に其處を出立しました、此日は少々空模様が悪いのを抜け出し、中の條より村上村に出で男子山の麓を通り男子山と申す恐しか六里餘の道を越し横堀と云ふ處へ登つて來ると、雪がチラリ／＼降り出しました、南の方には赤城山が一面に見へ後は男子山子持山北にあたつて草津から四萬の筆山吾妻山から一面に榛名山へ續いて見へる山又山の難所で、下は削りなせる谷にして吾妻川の流も冬の中頃ゆる水は涸れて居りますが名に負ふ急流、岩に當て打落す水音高くゴウ／＼と物凄き有難て御座ます、丹「困つた物が降り出して來たなあ龜」もうし旦那いけませんねへ、これから北牧まで何程有ますかへ丹「己も初めて、幾里あるか知らん誠に困まるな、幸ひに此處に草履わらんじを吊して有る家があるから腰を掛け桐油を羽織て往う、それより外に仕方がない、アイ御免へお婆さん茶を一杯お呉れ渡」ヒへーおかけなあんしよ、誠に可厭物が降り出しやしたの「これ

から北牧まで幾許あるのう 婆「ハイ一里些んべい有りやんしよ、これからは下りには
 なりやんすが道が艱難がねへ、マア此處へお掛けなせ、お困りで御座りやせう 丹「誠
 に困るヨ一里餘では今から往かれんのう、何處か此邊に宿屋はあるまへかノ 婆「ヒへ
 | 此間まで村上に二軒有たが眞實の宿屋ではがんせんから北牧の宿屋から喧ましく云
 はれて廢めて仕舞て今はありやしねへ、どうも北牧までの間には有やしないお困りで
 がんせうねへ 丹「困た事だ近處で泊めて貰う譯には往くまいか 婆「さうはめへります
 まへヨ、どう云ふ譯だかお尋ねものがあるのなんのと嚴しくつて、只の家へ旅人を泊
 る事がならねいと云ふお觸に成つて居りやんすから泊る事にはなりやすめへ、貴所若
 し困るならこれから半町ばかり跡へ歸ると察が有りやすが其の察へ往てお泊んなんし
 よ 婆「さま一人居て困る人は皆其處へ往て泊りやんすヨ 丹「其察は何處だへ、察とは何
 んだねえ 婆「何にも寺のこつてがんすが別に檀家もねへ寺で、お地藏様の堂守に比丘
 尼の婆さまが一人居やす 丹「往つて頼んだら泊て呉れようか 婆「旅人ばかりじやが
 せぬ商人衆も泊りやすさうでがんすから、泊めませう 丹「左様か茶代を此處に置くヨ

そんなら跡へ歸て横へ半町ばかり入るののう、大きにお世話で有たと此家を立出て
 跡へ少々戻り半町ばかり細道へ入つて往くと破れ堂が有り其中に鼻の打缺けた醜い体
 をして居る石の六地藏が建ております、其左り手に家根のない門形の處をはいつて見
 ますと破れ屋が有りましたから臺處口から入り 丹「御免下さいまし 比「ハイどなたで
 ざいます 丹「手前は旅の者で御座いますが夫婦で乳兒を抱へ此雪に逢ひ泊る處がなく
 困りました處、此家へ來てお願ひ申せば泊てくださると近邊の者に教へられて參りま
 したがどうかお情けに御泊下さいまし 比「嗚マアお困りで御座いませうお泊りなさい
 だが私も年を取居まして人様のお世話も出来ませんし、又こんな庵室の事で御座い
 ますから食物も着て寝るものもござんしねえし、其身其儘で轉りと御休みなさるので
 よければ其處に清水を笕で引た井戸がありますから足を洗つて此處へお上りなさい、
 盥は臺處ろにあります 丹「ハイ、有難御座います、とこれから足を洗つて上え通ると
 四尺に三尺の居爐に眞黒な自在を掛け煤ぶつた藥籠がつるしてあります 丹「實にわる
 いものが降り出しましたの 比「サア山國ではねへ時々山から雪が吹出し雪になるかと

思と又晴れ晴るかと思と又降ると云ふので山の事は頓と分りませんヨ、お前さん方は江戸のお方の様に思はれますねへ。比「左様で御座います少々仔細が有て田舎へ参り此般歸り掛けて御座います。比「寒いから遠慮なしに束采をくべて御煖りなさい何にも思御馳走はないから。丹「有難御座います、と束采をくべて吹きますと火が移り燃へ上る焚火の光で比丘尼婆の顔を見ると年頃五十五六ではあるが未だデツブリ肥つたみづくしい婆さんで、無地の天青色の布子に腰衣を着けて居りますのをお龜がきつと見て大に驚きましたは、三年跡沼田の不新田へ道連れの小平と云ふ草賊を連れ強談に來たお覺婆で有ますから喫驚致し龜「お前はお覺婆さんじやないか、と云はれ、お覺も驚ろき覺「これは誠にマア思ひ掛けない處でお目に掛りました、尊婦は下新田の角右衛門様の御内室の、お龜さんで御座いましたか。龜「お龜さんもないもんだ、旦那此婆さんがお榮を略取した又旅のお覺と云ふ悪婆で御座いますヨ、ほんとは比丘尼に成て斯様な處に匿れて居るとは些とも知らなかつたと云ふを聞き丹治は眼に角立て、丹「不屈な奴めと云ひながらツカ／＼と詰めて長刃へ手を掛けましたが、此後

は如何相成りませう。

(一一一)

原丹治又旅おかくの自滅

扱て丹治お龜は横堀村の庵室で圖らずお覺婆に逢ひましたから丹治は刀を引き付け詰め寄りますと、其權幕に流石の婆も悪黨ながら比丘尼に成て居ます事ゆる逃げもせず先非を悔て恐れ入り手を付きました。覺「お腹の立ちますは重々御尤もで御座いますかどうぞ私の申す事を一通り御聞きください、私も宜い年をして何時までも止まず親子連れで旅を稼ぎ悪事の數も仕拔きました、段々と思ひ返して見ると我身ながら恐しく思ふ處へ伴小平はお繩を戴き送られました此の七月牢死致しましたから、ハア之も悪い事をした罰と實に心から洗た様に改心致し今まで作た悪事の罪滅しの爲め頭を剃りまして毎日托鉢をして歩行て此村へ参り、慈悲ある人のお世話で此地藏堂へ入り堂守を致し麥や引割を戴いて漸々此處に斯うやつて居り、毎晩／＼地藏様に向ひ若い時分の懺悔を致しお説事をして居ます、此處で又お前さん方にお目に掛るのも皆な

悪事の報ひ、實に恐しい事で御座います、南無阿彌陀佛、どうぞ此圓顔に召
じ勘忍してくださいまし、と掌を合せ拜ゆる丹治も一旦は長刃を引付たが又思ひ返
丹「何か貴様は全く改心して尼に成たのか 龜「マアどうもマア彼の小平と云ふ悪徒は
牢死しましたかへそれからお前も改心し様とは思へないが眞實に改心したのかへ覺
誠に面目次第も御座いせんが虚に頭が剃られませうかシテ貴所方はこれから何所へ
御出で御座いますか江戸へいらつしやいますなら本街道の中仙道口へ出てはいけませ
んヨ、お尋ねの人相書が廻て居ますヨ 丹「エ、人相書が廻て居るとへ其はなんで覺
何んだか貴所のお心に聞いて御覽なさいナ、私は委しい譯は知りませんヨ人相書の次
第を聞いて見るに沼田の下新田の後妻のお龜さんが御領主土岐様の御家來原丹治と云
ふ人と奸通をし家へ火を放けて逃げたと云ふのでお手先の人相書が廻つて居ますか
ら中仙道へは出られませんヨ、雪でも解ける間二月頃まで此處に匿れていらつしやれ
ば些とは、ほとぼりも冷めませう、今往くのは危いもので御座いますと、云はれて丹
治はお龜と顔を見合せ 丹「實は火を放ける譯ではなかつたがお龜も亭主の有る身の上

ではなし私も獨身者ゆゑ遂和姦をした所、百姓共が大勢寄てたかつて叩き殺すと鋤
を持って取巻れ逃げ處がないゆゑ實は據なく火を掛けて逃げたが、人相書が廻て居よう
とは知らなかつた、婆々多分の禮も出來んが兩人居るだけの手當をした上に少々位は
お前にも心付を致すから三月まで此處に置いて呉れまいか調べに杯來る事はなからうか
覺「滅多には参りませんが來ても只村役人が御布令の書付や何かを持って來るだけの事
で御座います、又お前さん方が泊つて居る内は他の者は歸へして仕舞ますからお心置
なく御緩くりと泊つていらつしやいませ 丹「婆さん此處え來たのは却て仕合で有たと
云ひながら懷中から十兩取り出して 丹「これは誠に輕少だが兩人の手當に遣て置くか
ら米や薪でも買つて貰ひたいと婆々に渡せば婆々は大きに悦び 覺「御心配なさいませ
ナ酒でも買て來まじよと、夫より手當をよくして此處に三日程匿て居ました、すると
三日目の日暮方婆々が酒を買て参り三人で酒宴をして居りますと、土間口から菅の深
い三度笠を肩に掛け廻し合羽に千草の股引草鞋ばきで旅慣れた姿の男が入て來ました
之れは繼立の仁助と云ふ草賊で御座います 仕「阿母家かと云ふ聲を聞くより早くお覺

婆々は飛び出し空然仁助の胸倉を取り横頬を擲倒す打たれて仁助は不意に驚き仁「阿母何をするんだ覺」何も糞もあるものか能のめくと来やアがつて手前が意地を附けたばつかりで悴を牢死させる様にしやアがつて此奴と云ひながら又打ちます、仁助は益々驚き仁「ア、痛いヨ何にをするんだなア」何も糞も入るものか此處え来ひ名主へ引て往くと、ボカ／＼打ながら引すり行き樹陰へ来ましたから仁「なんだどうしたんだ覺」なんだじアねへよ妄闇に入て来て己は比丘尼に成て居る身の上じやないか殊にお客の居るのを知らねえかえ仁「何だか突然にボカ／＼打から分らねえ、それに哥々が牢死したと云ふのは何んだ覺」それは出たらめだ、己の云ふ事を眞實にする奴がある者か汝を打たのは泊つてる奴が二人居るからいやと云ふ程苛く打たなくつちや眞實にしないからだ其客人は原丹治とお龜と云ふ奴で汝も知てゐる下新田の後妻でお梅の實の親のお龜が泊つて居るのさ、澤山金を持てる様子だが丹治が己れを切て仕舞ひさうな権幕だつたから改心して尼に成つたと云ふ、哥々はお繩を愛けて牢死したと云て置たのに哥々の事を云ちやア化の皮が現れるじやアねえか、お前も氣がきかない

多 原 壘 助

のう仁「だつて、何だか知らねえからだなア、突然に驅出して来て擲り附けた時は己ア何だと思つた覺」汝さうして哥々はどうした仁「哥々は北牧まで来て居るヨ覺」マア耳を貸しねえヨ仁「貸して居らアな覺」暗くつて分らねえと云ひながら耳の傍え口を寄せ何にやら暫くコソ／＼耳語り覺「宜いかえ仁」そんなら屹度だヨ覺」どぢをくわねえ様に九ツ過ぎに宜いかと、仁助に別れお覺婆は顔色を變えて入て第り覺「嘘マアお驚きで御座いましたらう丹」驚いたヨ、何んであんなに腹を立たのたえ覺「彼奴は仁助と云ふ草賊で御座いますが件より年上だもんですから、智恵を附けて悪い者にしたので御座います丹」お前も年上で随分悪黨じやないか覺「私の悪い事は前から知れた事ですが彼奴の爲にどちを働き悴を牢死させる様になりましたから、私には敵同士で憎い奴だと思つてる所え、ズツ／＼しく、入て来ましたから捨て置けば此村の難義になりますから私が名主の所え引張て往たら直ぐに繁ばられ北牧え送られました、丹」あんな悪黨は来ない方が宜しい、ナニ自分も悪黨の癖にと話しながら酒を酌みかほしお覺は丹治を酔わせやうと思つてむやみに杯を勧めましたからグツスリと酔ひま

して最う寝ようと床に就きました頃は雪は歇まして風音のみ高く聞えます、九ツ過に音のしない様に臺所口から道連の小平は覗きの手拭で面部を深く包み三尺余の小長い柄え革を巻た銅金造の刀を差し千草の股引に脚半甲掛で仁助も同く忍入り、音のせぬ様に一處に上りましたが盗賊だから馴て居升、お覺の寢處え來て聲を密め仁「阿母く」
 覺「狼狽ちや不宣ヨ先刻仁助に云た通りにしねえ勘づかれちやアいけねいよ、仁」本堂の傍に寝てゐるか覺「本堂の前だヨと、指圖するゆる小平、仕助の兩人は拔足して參り丹治お龜の蒲團の間に手を差入れましたは、柳行李の中に金を入れて毎晩お龜と丹治の間にに入れて寝て居るのをお覺が知て居りますから小平に取らせましたは、其晩に限つて金を出してお龜が懐中え入れて置いた事は少も知りませんから小平はこれさえ盗めが宜いと心得ズツと手を入れにかゝると原丹治が目覺し、「盗賊と聲を立てるに驚いて小平が逃げ出す、丹治は己れ逃がさじと、枕邊の刀を探るとお覺婆が晝のうち刀を隠して置きましたから有ません、其隙に横合から繼立の仁助が突然切り附けるを引外づし手元え繰込んで仁助の刀を捻取り丹「邪魔するなといひながら力に任

よこして仕舞えと、取り

—原丹治又旅おかくの自滅—



せて刀附る、天命とはいひながら仁助は其儘刀倒される
 之れを見て小平は堪らんと庭の方えバラく逃出す
 を丹治は跡を追て往く、其間にお龜は盜賊だと察し怖いながらも一生懸命小兒を抱て胴巻をかゝえ表の方え逃出す、跡よりお覺は



お龜も追掛行
 き谷川縁の一筋道で樹の根に躓つき倒れるお龜の髻を掴んで引摺り倒し覺「此亞魔メエ、何を問のだべらばうめ金を渡して仕舞え龜」母子馴合て私の荷物を盗むのだなア覺「元より手前の身ぐるみ利うと思ふからだ、丹治は殺して仕舞たから何でも手前が金を持てるに違ひないからにかゝるお龜は取られじと挑み争ひ龜「人殺しく」と

怒鳴立る赤兒はオギヤア〜と泣出ましたゆゑお龜は思はず赤兒に心を取れバツタリ落しました紺縮緬の胴巻を見て、覺金だナと云ひながら拾ひにかゝるをお龜は渡すまいと互ひに力を極めて引合ひますると胴巻が裂けて中から、ドツシリと落ちるとたんに封が切れ黄金の花が近邊え散亂する處え、丹治は小平の逃げるを一目散に追て來て此体たらくを見て小平の逃げるに構はず突然お覺婆に一刀あびせかけるとお覺はキヤツと聲を上げて倒れる、其上え乗しかゝり喉元を刮つを居る背ろえ小平がそつと廻り銅金造りの長いやつを抜き放し丹治の脇腹目掛けてウーンと力に任せて深く突込まれ丹治はウンと仰反て身を顛はす所を足を踏みかけ猶も再びこじられて其儘息は絶えました、如何に惡の報ひとは申しながら繼立の仁助お覺の兩人は丹治の爲めに殺され丹治は又小平の爲めに殺されると云ふ、惡人同士互に修羅の責苦に遭ふとは實に恐るべき事で御座います、お龜は今原丹治の殺されるのを見て逃げる心もなく、アレ！人殺し誰か助けて下さいと云ひながら小平の足に紐り附くを、エ、邪魔するなど足を揚げてハタと蹴る蹴られてお龜はアツとばかりに恐ろしく削りなせる二三丈もある崖の

下を流るゝ吾妻川の中へ乳兒を抱たまゝゴロ〜と轉げ落ち生死に知す成りました、小平は刀の血を死骸の着物で拭ひ鞘に納め暗夜ながら閃々する黄金の光を見當に掻き集め、無茶苦茶に手拭に包んだり袂へ入たりして丹治の死骸を川中へ蹴落し、又惡黨でも親子の情でお覺の死骸を庵室の庭へ引摺て參り深く穴を掘り仁助の死骸と一處に埋め、道連れの小平は多くの金を持たまゝ何處へか逐電して仕舞ました。

助 多 原 豊
お話替つて山口屋善右衛門の家では多助が毎日種々な物を拾つて粗末にならぬやうに貯めて置きます、斯くて其年も暮れて翌年になりますと、一日の事で番頭の和平が旦那様どうか何を買つて戴きたいものですなア、納屋穿きの藁草履を善、ハイ、藁草履は最う残らず切りましたかへ番、へイ穿きやうが暴う御座ますのと殊に此節は働きのものが多いので鼻緒が切れると直ぐに川の中へ投げ込んで仕舞ますので困ります、澤山入りますからどうか、些と澤山買た方がお爲めに宜しからうと思ひますから百足もお買ひ成すつて下さい、善、そうかそれじゃア、要るだけ買なさいと話を居る傍で

多助が聞いて居まして「多」番頭さんくく「番」多助かへなんだ「多」只今之れで聞ききたら藁草履が御入用ださうでんすね「善」ハイ、入用だが「多」藁草履が入用なら私が買って貰うべし「善」お前藁草履を持って居るかへ「多」ハア些とべし藁草履を貯めやした、「善」さうか澤山もあるめいが貯つただけ買ってやらう「多」どうかお買ひ成すつて下さい藁草履は一足幾許しやする「善」さうさ、一足十二文だなア「多」十二文とするは河岸揚の職人が穿いたり家のものが穿いたりするから平均一日三十足宛入りやすが其中皆なが鼻緒を切ると棧橋から川の中へ投げ込んで仕舞ふのを私い竹の先へ釘を打て夫を引揚げて置いて毎晩私が鼻緒をたつてギユツと真中を締めて置いた、それに水の中へ入つたんだから先より丈夫に成て居りやす「善」感心なものだなアどうだ番頭「多」番頭さん貴所は算盤を取て店を預かるものだから聞きやすが日に十二文の草履が五足で幾許になりやす「番」丁度六十文になるのう「多」ハア六十文になれば年分には大へ事になりやすが一月で幾許になりやすといはれて、「番」番頭は算盤を取て「番」エ、カウツ、一日に五足づ、で一月に百五十足に成るのサ「多」其錢は幾許だなア「番」エ、ト一貫八

百八十二文サ「多」一年で何足になりやす「番」うるさいの、カウツ千八百足に成るのサ「多」其金高はいくらだね「番」うるさいのウカウツ金三兩一分二朱と五百六十文に成るのサ「多」目がはいつて居やすか「番」知れた事サ「多」それでは十年ではいくらに成りやす「番」うるさいのウエ、カウツトおや旦那様大きなものでございます、一萬八千足に成りやす「多」其金高はエ「番」うるさいのウエ、カウツト大きなものですなア、金三十四兩二分と七百四十八文に成りますが旦那様大きなものですなア、微塵積つて山となるの譬の通り十年で是程になります「多」ハア三十四兩二分と七百四十八文あれば國へ歸へつて家を建てる足しになりやすナ「番」持て來なさい、澤山もあるまい百足も貯つたかと思と、「多」多助が納屋から横庭へ運んで山の如くに積み上げました「多」一昨年からで随分貯つた「善」たいへん貯たなア幾足ある「多」ハア二年貯めたから勘定はしねへが三千足もあんべいかな「善」これは驚むたどうだの番頭感心なものだなア「番」驚きましたなア家でも草履の入る事はたいへんですなア「善」ヨシそれだけは新しい草履を買つた積りで手前の丹精を買つて遣らうが金は私は預るヨ、これから手帳を拵へて一々付け

て置きませう今日は預り始めだ多「金は入らねい先づそれだけは餘所の物を拾つたの
じやねへ家の物を拾つたのだから之れは旦那様へ上げべい、私が斯うして人に見せれ
ば些とは出方のものも草履を大事にしべいと思つてお手本に貯めたのだ、これは私が
錢貰ふべいと思つて貯めたのじやアねい、まだそれべいじやアねい大く御奉公にして
ある事があるが、それは最う十年も経てから見せべい善「不思議な男だのうなんと番
頭感心なものじやアないか番「驚きましたなア多「番頭さんも目前べいの、勘定で心
の勘定がねいから何が幾許入るか知りやアしねい店を預かる番頭さんだから確かりし
なんしヨ番「ハイ、畏りました、と云ので番頭も大きに氣が注ぎ主人も感服致し、
これから追々多助が他の人に真似の出来ぬ事を致しますお話しは一と息つきまして申
上ます

(一一三)

道連小平八右衛門を惱ます

鹽原多助は計らずも山口屋善右衛門に助けられ此家に奉公を致して居りましたが多助

の行狀の實明なのに主人は素より奉公人一同が感心致しました、其多助の氣の利くとは
主人の用向ばかりでなく番頭から小僧から家へ出入る者一同からおさんどんにまでも
能く勤めますが、決して阿諛でするのではなく眞實に致しますので、番頭が肩が張つ
たと云へば直ぐに後へ廻つて打きます、エヘンと咳拂ひをすれば眞ぐに灰吹を持って往
く風を引たと云ふと直ぐにお醫者を呼んで来る少し病氣が重いと思ふと直ぐに早桶を
買って来る、まさかそんな事もありますまいけれども多助は少しも隙がありませんで稼
ぎますのは追々金を貯めて國へ歸り養家へ恩返しをしやうと云ふので後には地面の二
十四ヶ所も持やうになります、さうなりますには後楯と云ふものが、なければなり
ません、商人が大きくなるには資本を貸して呉れる金主と云ふものがなければ大商人
にはなれませんが御座います、茲に下野國安蘇郡飛駒村に吉田八右衛門と云ふ
人が後に多助の荷主に相成りますが、此人が三十五歳に成るまで江戸へ出た事がありま
せんのは此人の親父八右衛門は六十以上の年で御座います、總て江戸の取引先きの事
を致して居りますから八右衛門は江戸へ出て參りませんでした、親八右衛門が不圖

病氣付きましたに因て八右衛門が始めて江戸へ出て参りました、頃は寶曆十二年十二月の十五日深川八幡の年の市で、其頃は繁昌致しましたもので餘り込み合ふから八右衛門は田舎漢の事ですから恐れまして、高橋を渡つて深川元町へ出て猿子橋の傍に濱田と云ふ料理屋があります、其夜は雪がチラ／＼降出し眞闇ですから外にあまり多人數の合客はありません様子であります、濱田へ上つて見ますと衝立を建て彼方にも此方にもお客が居ります、八右衛門が御膳を喫べて居りますと足利に猿田といふ所があつて其處に早川藤助といふ出船宿があります、丁度其主人が居合せまして思ひ掛けないから八右衛門の側へやつて参りまして藤「誠に暫らくで御座いました八右衛門様じやア御座へませんかへ八」誠にこれはどうも久しぶりで逢ひました藤助どんでがんですかお尋ねべいと思つたがツイ無沙汰しましたハア藤「能くお出になりました何の御用で八」ハア私もどうも江戸といふ所へ来てへと思つて居たが親父が達者で江戸の取引は己がするから汝は家に居ろといふから家にべい居りやしたが大した事でもありませんが親父が鹽梅が惡りいので手前往つて仕切を取つて來うといふので仕切を取

りに來ましたヨ、何んに取引先きは神田佐久間町の善右衛門が一番大へから彼方へ往つて一夜や二夜は泊つて來てもいゝからといふが親父が鹽梅が惡いからハア早く歸るべいと思つてハア藤「ハイ山口屋善右衛門は大くつて荷主を大事にするのは彼の位な家は無い、彼の親父も中々荷主を大事にするが、作は善太郎と云つて年は若い能く客を大事にするし、其にまた番頭の和平も客を大事にする、第一彼處の内は饗應が違つてハア八」さうださうだ親父に聞いて居りやしたが私の顔を知らないから向ふで金を渡さねいといけないがそんな事はあるめいかねエー藤「ナアにそんな事はねへ貴所は始めての事だから親父様が往くより却つて大事にするだんべいヨ八」親父も汝は始めて往くのだからこれを持って往くがいゝといふので受取證文を親父が寢床で書て手紙と此八十兩の受取證文を持て來やんしたから多分渡すべいと思つて居りやすがハア藤「そりやア大丈夫渡しやす、これから佐久間町へ往くには大橋を渡つて濱町へ出ればよろがんです、私は花川戸町の炭問屋へ些とべい預けたものがあつて寄らなければならぬいから大橋まで一所に参りませうと、昔の田舎の衆は大聲で話しを致したもので御座

います是から勘定を濟せ兩人連立て此處を出て大橋の袂で別れまして、早川藤助はお船藏の方へ参り八右衛門は大橋を渡つて彼是甘間ばかり参りますと、バラ／＼／＼つと駆けて来たものがありました、其頃は商人は皆雪駄を穿て居りまして土鯨の鼻緒の下りの雪駄で駆けて來まして前へのめるとたんに八右衛門の肋骨へ彼の男が頭を撫付けましたから八右衛門は驚いたのなんのと申しまして其男も喫驚きまして男「何んとも男譯がありませんが、少し怪しい奴が跡から追駆けて参りまして少々貯へもありませんから、大橋の央ばまで遁げて参りますと貴所のお姿が見へますから、追付ふと思つて駆けて参りますと貴所に突當りまして誠に申譯がありません、御免なすつて下さい何處かへ當たりましたか確りなさい／＼」八「ア、ア、ア、痛貴所はマア怪我といへば仕方がないが人の横腹へ石を打つ附けたかなア男「石じやありません轉ぶ拍子にツイ頭が當りましたので、八「ひどい石頭だったなア、嗚呼痛いそんならい、が身體が痺れて立てない男「真に申譯がありません、此處は往事でお話しが出来ません何處か茶屋へでも参りませう、此處に持合せた薬もありますから八「ア、痛い立てない

そんなら、私が脊負で上げませうと、彼の男も怪我とはいひながら氣の毒に思ひまして脊負やうにして橋の袂の茶屋へ連れて往きました女「入らつしやい／＼／＼男「どうか姉さん少し加減の悪方がお出になつたから奥を貸してお呉れ女「へエ貴所お加減がお悪いのですか嘸御困りで御座いませう、お草鞋で御座いますか足を拭て上げませう、杯と申ますと彼の店風の人が八右衛門の手を取て座敷へ上げまして男「誠に申譯がありません八「お前さんかいと、見ますと木綿物では御座いますが新清した着物に小倉の帯を締め細かい縞の前掛け掛けて居りまして色の淺黒い店風の人です八「誠に貴様はどういふ事で盜賊に逢ひましたか男「私は横山町三町目の播磨屋と云ふ袋物屋で御座います、深川までお拂を取りに参りまして百金受取て歸りましたから成るだけ賑やかな處を通つて來ますといやな風体の奴が跡から附て來ましたから盜賊だと思ひましたゆゑ逃げ出すとたんに貴様に打つかりまして何とも申譯がありません、之れに有合せました薬を湯で溶きましたから召上つて下さい八「これは誠に有り難う怪我とあれば仕方がないが金を持て夜歩行ねへがい、ヨ私やア田舎漢が始めて江戸へ出て來

たんでナアに醫者にも及ぶめへが横つ腹が突張つて仕様がねいね女「貴様些とお横におなりなさい 男「姉さん此近處にお醫者様はありませんか 女「誠にどうも此近處にお醫者様は御座いませぬ濱町まで參らなければ御座いませぬ 男「そうかい枕を貸して八右衛門を寝かしまして、彼の男が側で擦て居りますうちに八右衛門は宜心持になりましたからスヤ／＼と寝まして暫く経て目が覺めて見ますと彼の男は居りませんゆゑ、起上つて手水に往うと思ふと立てませぬそれに舌がつり上つて口もさかれませぬ 八「ハテナ、身体がしびれて歩行ねい起事が出来ねいこりや困まつたな、女中衆／＼と少しも舌が廻りませぬ 女「どうかありませんか、 八「今茲に居た人は如何したへ女「彼の方はお醫者を探して來から少し貴様を寝かしておいて呉と仰やつてお出になりました 八「ハテナ己ア此處へおいた包だの脇差たのはどうしたな 女「あの包や何かを此處へ置いてはいけないからと云つてお連れの方がお脚半までお持ちなすつて御出かけになりました 八「ソラア盜賊さア 女「大はきな聲を成すつちやアいけませんヨ、 八「盜賊だア盜賊野郎／＼、早く駕籠を呼びにやつて呉れと八右衛門は騒いで居

ります、又山口屋善右衛門の宅ではそんな事は少しも知りませぬ、其頃お商人方では夜の四ツ時になれば戸を閉めて仕舞ひます、店に子僧が手習をして居ります此方には番頭が帳合を致して居りますと土間に薙を敷いて頻りに草履を拵へて居りますのは多助で御座います 男「へい御面下さい／＼ 小「誰様ですナア 男「少し御面下さいと云ふから小僧か戸を開けるとはいつて來た男は半合羽に千種の股引に草鞋がけで一本脇差を差して手には小包を提げたま、 男「ハイ御面下さい 小「何方様からお出で御座います 番「エイ私は下野國安蘇郡飛駒村の炭荷主八右衛門と申すもので御座います 番「ハイ／＼此方へ／＼ 八「毎度親父ばかり出て居りまして私しが此方へ參りましたのは初めてと御座います親父が病氣で寝て居りやして寢床で證文と手紙を書いて私に代に來ましたが此方では誰様もお變りはありませんか 番「エ、お噂には承わつて居りますが能くどうも貴所がお出向で御座います、毎度主人と貴所のお噂ばかり致して居りましたマアお上んなさい 八「上つては居られませぬ平常なら宜が親父が煽らつて居りますから直ぐに扇橋まで往つて船へ乗つて歸る積りで御座へますからどうか之れへ

證文を持って参りましたから八十金お渡しを願ひます、儘に三貫目炭を送つたから夫丈の代を戴いて船賃は跡で宜う御座いますから八十金はどうか只今願ひます番「へいへいと云ひながら手紙を讀上げて見ますと金を八十兩俵に渡して呉れるとあり、受取證文を見ると八右衛門の書たのに違ひないから安心して番「若旦那、兼々の噂の八右衛門様がお出でになりました、エ、これは私共の若主人で今晚は主人が居りませんから代を致しますので八「ハアこれはどうも兼て親父から承つて居りましたが好若旦那で、貴所が善太郎様で御座いますか番頭さんは和平さまと仰いますか、へエどうか此後ともお心安く願ひます、それではどうか金子の處をお渡しを願ひます番「それでは毎でも砂糖と鹽引をお歳暮に上るんですが、貴所お持下さいますか、若し御迷惑なら小僧に持たして上ても宜しう御座います、何にしろ是非御一泊を願ひたう御座います、親父様が御病氣の事では據る御座ませんが、八「へエ、結構で御座います田舎では鹽引杯は結構で御座いますから扇橋まで持つて参りませう八「それでは八十金差上げて一貫二百文のお船賃は跡に致しまして、といひながら金の勘定をして居りました

て今渡さうとすると多「番頭さん、金を渡すのは容易に渡さねへ方がい、顔を知てる人じやアねいし初めて来た人だから旦那が歸へつて来てお話をしてから渡した方がようが、余計な事を云てるお前の知てる事じやアねいヨ多「後ろの方から口を出してはすみませんが貴所は飛駒村の八右衛門さんに違へありませんがへ八「ハイ私はそれに相違ねいが深くお問糺しをなさるのは私を疑ぐんなさるのかへ多「それでも私ア斯うやつて暗へ所で辭を掛けちやア濟ねへが、貴所は本統の吉田八右衛門様に違へねへかナ八「本統の虚のといふのは私を疑ぐるのかエ、茲に親父の手紙を持って来たのが確かな證據だのに何をお疑ぐりなさいますナ多「本統なら私が少し承りてい事があります番「コレ、何を云ふ、エ、これは山出して何も解りませんからどうかお腹をお立ちなさないで多「マア番頭さん黙止してお出なせへ、私聞かねいければ、ならねい事があるがモシ八右衛門様とやら貴様は下野辭でねへから私が聞くだかどうも貴所は下野の者じやアがんすめい八「私は下野の飛駒村の者に相違ねへがお前は何をいふのだ多「ナアにお前さんの辭は下野も上州も武州も方々の辭が交つて居るやうでが

んす番「お前何を云ふのだ黙して居ろくく」多「それじやア番頭さん私が暗い處で何にか云て居ても分らねいから其處へ出やんしやう、ドレ八右衛門さん、アはくく、どうもはア騙す事は出来ねへもんだ、久しぶりで逢たがお前己を忘れたかい、お前は道連の小平といふ草賊だつけないア、小「イヨウと小平は喫驚致し流石の悪人も跡え下りました多「嘘は吐けねえものだなア、小平ハア斯知れてしまつたから己れは「草賊だ」と云て歸つた方が宜かんべい、番頭さん此奴は道連の小平といふ草賊でがんすヨ番「へエー草賊かいそれだから夜は戸を開けねい方が宜といふのだ大變な騒ぎが出来た、多「アハ、ハ、ハ、既に七十兩と云ふ大金を奪れる處だつた、去年汝が己に及物突付て既の事で殺される處を助かつて此處に居るだが、汝はまアだ悪事が止まねへのか小「妙な處で逢つたなア而して貴様はどういふ譯で此處の家に居るのだ多「どうして居るつて、己ア金を貯めて國へ歸るべいと思つて此處な家で稼いで居る處へ汝が来たから分つたのよ小「エーオイ番頭さん私ア道連の小平といふ草賊で實は少し譯があつて此の書付が手に入つたから八十兩充分と騙り取らうと思つた處で山出しの多助の野郎

に見あらはされ、化の皮が顯れてしまつたから此儘じやア歸れねい、サア此の大きな家臺骨から突き出され、ば本望だ、サア突出して貰はう番「突き出すつてどうも、こりやア困つたと、番頭は頻りに心配致して居ります處へ、其頃は當今とは違ひまして人車が御座いませんから駕籠で大急ぎに参りましてトンくくく鳥渡此處をお開け成すつて下さいと、今度は眞實の吉田八右衛門と云ふ人が涎をタラく滴らし入つて参り只見れば先程の奴が自分の身形で居りますから、八右衛門は突然此野郎と云ひながら一生懸命に這ひ上がつて小平の胸ぐらを掴んで放しません八「此野郎呆れた野郎だ己が身體利かねやうにして俺れが荷物から脇差から大事な書付まで盗みやがつて盗賊く此野郎く小「静かにしろエ、と云ひながら八右衛門の手を逆さに捻つて此處に投げ付け草履穿きの儘でドツサリと店先へ上り胡座をかきまして小「ヤイ百姓實は俺ア小平と云ふ賊だ、上州で人殺から足がつき居られねへから其場をにげ猿田船へ乗て江戸へ着き先き濱田で飯を食いながら聞いて居ると手前が此の山口屋善右衛門へ八十兩の爲換を取りに來たと云ふ事を聞ちやア遁さねへ地獄耳、汝の跡を付て來

—道連小平八右衛門を備ます—

て轉んだ振りて荒稼ぎ、頭突きと云つて横腹を頭で打つて息の音とめ、御氣の毒だと介抱して吞ませた薬は麻痺薬だ、手前の身體がきかねエうちに衣類から懷中物まで引さらつて遁るのを盗人仲間頭突と云ふのだ、あの時攫つた書付からまんまと首尾よく八十兩いゝ正月をしよふと思つた所が打て違つて山出しの多助の野郎に見顯はされエ、もう破れかぶれた、サア突き出せくと云ふので店の者は大きに驚き頭を呼びにゆくやら何にやら騒ぎ致しますけれども小平は鐵挺でも動きませんので持て餘まし居る所へ、歸つて來たのは主人善右衛門でこれより小平を奥へ連れて參り意見を致しますお話しは次回までお預りに致しませう。

(一四)

多助道連小平の悪計を見破る

山口屋善右衛門の宅では道連れと縛號をされました、草賊小平が強談に參りましたが只今では強談杜騙をする者も悪才に長て居りましたして種々巧者になりましたが、其頃は強談をする者が商人の店先へ參りサア打ち殺せと云て、ドツカリ坐り込みますと表へ

多助原豊

黒山のやうに人が立ちまして外聞が悪いから餘義なく十か廿の金を持たして歸へしたものです、只今ではさういふ事は出来ません、直ぐに巡査が參りました、ハアコリヤ分署へ參れなんと申すから中々出来ませんが、昔は大家程かういふ事をされると困つたもので山口屋善右衛門は宅へ歸つて見ると此騒ぎですから直ぐに醫者を呼びにやりまして八右衛門を療治して貰ひ表から此様な所を覗き込まれてはならんかと、云ふので、奥へ通さうと申しても小平はどうしても動ません、したが小平も、段々考へて見るに此處で云ふ事を聞かなければ爲に悪いと思ひまして奥の六疊の座敷へ通りました、すると主人善右衛門を始め多助も番頭も參りまして善コレハ小平さんとか始めてお目に掛りましたが私も今歸つたばかりで委しい事は知りませんが、お前さんは私共の大事な荷主に毒薬を服せ身體を利かなくして證文を持てかたりをしやうと思つて店へ來た處が、宅の奉公人の多助がお前を知居て化の皮が顯れたから突出して呉れと云ふさうだが悪黨の方にはどういふ法があるか知らないが宅では繩付を出す事は好まない、多助が見顯はしたのは腹も立だろうがそんな事を云ても仕様がなから私

——多助道連小平の悪計を見破る——